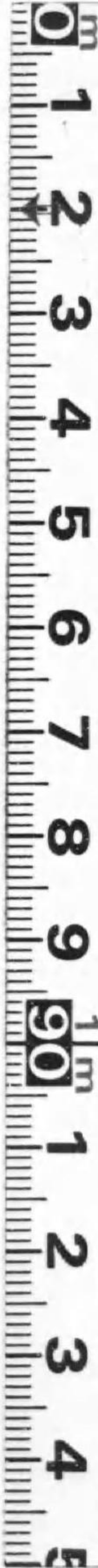


322-

重要
源氏物語

改訂版



始



特 218
963

文學博士 島津久基編



要註
源氏物語



東京 中興館藏版



はしがき

源氏物語——それは日本が持つ最も美しいものの一として、日本民族の優しい雅びな半面の姿見として、又世界最初の大小説、而も藝術香の高い神品として、我等の誇であり、悦びであらねばならぬ。さうしてこの一千年前の一宮廷女流の靈筆は、一千年後の今日に於ても、常に新たに生き、常に新たに輝き、巻を逐うて興味いよ／＼豊かな中に、偽りなき人生の諸相をまざ／＼と見せてくれるのは、殆ど驚異に値する。

源氏物語は詩であり、音楽であり、繪卷でもあると同時に、人生學の教科書でもある。古來婦人修養の伴侶として尊ばれたのも故ありと云ふべきであると共に、新しい意味でも、千古に通じ中外に互つて、毫も遜色なき處世の大教典である。これを心讀味解する人にとつては、音に婦人と云はず、無上の慈しみ深い師友たり得るであらう。

この日本國民必讀の古典が、なるべく廣く親しまれる爲に、本書は無理でない限り漢字を宛て、句讀を施して、讀み易くし、なほ理解に便する爲、必要な語句・引歌等に略註を添へ、系圖を示し、毎卷内容の梗概を條項に要約して掲げ、又卷末には隨時それ／＼關係深き興味ある資料を附し、すべて源氏鑑賞の目的に資したいと志して編したものである。但し教科書として用ゐられる場合をも顧慮し、適應の省略を施した部分もある。本文は流布の青表紙系の首書本を底本として、湖月抄本を以て補正し、新古諸註をも參考して校訂した。

註要
源氏物語
目次

| | | |
|----|----|-----|
| 桐 | 壺 | 一 |
| 帚 | 木 | 一七 |
| 夕 | 顏 | 二九 |
| 若 | 紫 | 六九 |
| 末 | 摘花 | 一〇一 |
| 紅葉 | 賀 | 一三三 |
| 花 | 宴 | 一四四 |
| 葵 | | 一五五 |
| 賢 | 木 | 一六七 |
| 花 | 散里 | 二二三 |
| 須 | 磨 | 二二九 |
| 明 | 石 | 二五二 |

桐きり

壺つぼ

一名

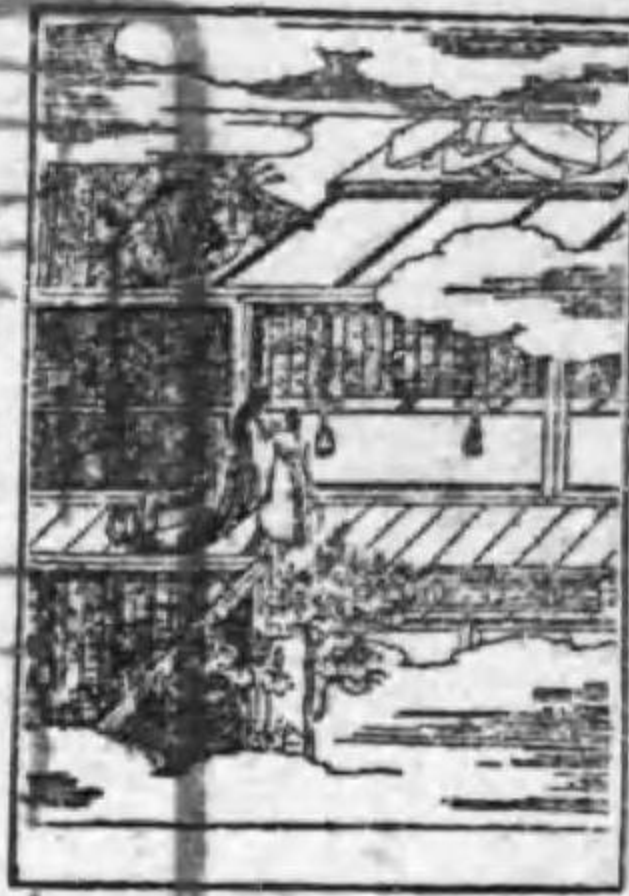
壺つぼ

前せん

栽ざい

(源齡一一三)

帝の桐壺更衣寵愛——若宮誕生・人々の嫉妬・著袴——更衣病氣退出・
 逝去・帝の御悲嘆——野邊の送り——野分だつた韃負命婦の勅使・涙新
 たな母君の繰言——命婦の復命・帝の御鬱悶——書始・更衣母逝去——
 高麗人の觀相・源姓を賜ふ——源氏元服・葵上との結婚



いづれの御時にか、女御・更衣數多侍ひ給ひける中に、いとやんごとなき際に
 はあらぬが、勝れて時めき給ふありけり。初めより、我はと思ひあがり給へる
 御方々、めざましきものにおとしめそぬみ給ふ。同じ程、それより下藤の更衣
 達は、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨みを負ふ
 積りにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、いよいよ
 飽かず哀れなるものと思ほして、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。父の大納言は亡くなりて、母北
 の方なむ、いほしへの人の由あるにて、親打具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方々にも劣らず、
 何事の儀式をもてなし給ひけれど、取立てて、はかくしき御後見しなければ、事とある時は、なほ據り
 どころなく心細げなり。

前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。いつしかと心許ながら
 せ給ひて、急ぎ参らせて御覽するに、珍らかなる兒の御容貌なり。一の御子は右大臣の女御の御腹にて、寄
 せ重く、疑ひなき備の君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂ひには、並び給ふべくもあらざりければ、
 大方のやんごとなき御思ひにて、此の君をば、私物に思ほしかしづき給ふ事限りなし。母君初めよりおし
 なべての上宮仕し給ふべき際にはあらざりき。おぼえいとやんごとなく上衆めかしけれど、わりなく纏はさ
 せ給ふ餘りに、さるべき御遊びの折々、何事にも故ある事のふし／＼には、先づ参ら上らせ給ふ。或時は大

- (一) 皇后の次位の妃
- (二) 女御の次位の妃
- (三) 身分
- (四) 病がちに
- (五) 由緒ある舊家の
- (六) 兩親揃つて
- (七) 早く見たいと
- (八) 世間の信望

殿籠り過して、やがて侍はせ給ひなど、強ちに、御前去らずもてなさせ給ひし程に、おのづから輕き方にも見えしを、この御子生まれ給ひて後は、いと心殊に思ほし掟てたれば、坊にも、善うせずば、此の御子の居給ふべきなめりと、一の御子の女御は思し疑へり。人より先に参り給ひて、やんごとなき御思ひなべてならす、御子達などもおはしませば、この御方の御諫をのみぞ、なほ煩はしう心苦しう思ひ聞え

させ給ひける。畏き御蔭をば頼み聞えながら、おとしめ疵を求め給ふ人は多く、我が身はか弱く物果敢なき有様にて、なかくなる物思ひをぞし給ふ。御局は桐壺なり。數多の御方々を過ぎさせ給ひつゝ、隙なき御前渡りに、人の御心を盡くし給ふも、げにことわりと見えたり。参り上り給ふにも、餘りうち頻る折々は、打橋・渡殿、此處彼處の道に怪しき業をしつゝ、御送り迎への人の衣の裾、堪へ難う、正無き事どもあり。又或時は、えさらぬ馬道の戸を鎖し籠め、此方彼方、心を合はせて、はしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。事に觸れて、數知らず苦しき事のみ増れば、いといたう思ひ怱びたるを、いと哀れと御覽じて、後涼殿に、もとより侍ひ給ふ更衣の曹司を、外に移させ給ひて、上局に賜はす。この恨みまして遣らむ方なし。

この御子三つになり給ふ年、御袴著の事、一の宮の奉りしに劣らず、内藏寮・納殿の物を盡くしていみじ

- (一) 春宮
- (二) 淑景舎。清涼殿
- (三) 殿舎と殿舎との間に臨時に渡す板
- (四) 殿舎から殿舎へ渡る廊
- (五) 不都合なこと
- (六) 是非通らねばな
- (七) 殿中の眞中を貫通する板廊
- (八) 間の悪い思ひを
- (九) 御座近くの休息所
- (一〇) 著袴の式。男子三歳の時行ふ
- (一一) 寶物を納める所
- (一二) 累代の御物を納める所

按察大納言

北方



うせさせ給ふ。それにつけても、世のそしりのみ多かれど、この御子のおよすけもておはする御容貌心ばへ、有り難く珍らしきまで見え給ふを、え嫉みあへ給はず。物の心知り給ふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ。

その年の夏、御息所果敢なき心地に煩ひて、罷出なむとし給ふを、暇更に許させ給はず。年頃、常のあつしさになり給へれば、御目馴れて、帝「なほ暫し試みよ」とのみ宣はするに、日々に重り給ひて、唯五六日の程にいと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、罷出させ奉り給ふ。かゝる折にも、有るまじき恥もこそと心遣ひして、御子をば留め奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限りあれば、さのみもえ留めさせ給はず、御覽じだに送らぬ覺束なさを、いふ方なく思さる。いと匂ひやかに、美しげなる人の、いたう面瘦せて、いと哀れと物と思ひしみながら、言に出でて聞えやらす、有るか無きかに消え入りつゝものし給ふを御覽するに、來し方行く末思召されず、萬づの事を、泣く泣く契り宣はすれど、御答へもえ聞え給はず。まみなどいとなげげにて、いとどなよくと、我かの氣色にて臥したれば、如何さまにかと思召し惑はる。輦車の宣旨など宣はせても、また入らせ給ひては、更にあ許させ給はず。帝「限りあらむ道にも、後れ先だたじと契らせ給ひけるを、さりとらうち捨てては、え行きやらじ」と宣はするを、女もいといみじと見奉りて、

「更衣」限りとて別るゝ道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思う給へましかば」と、息も絶えつゝ、聞えまほしげなる事は有りげなれど、いと苦しげにたゆげ

- (一) 成長する
- (二) 御見送り
- (三) 手で引く車。特に勅許を得た人が
- (四) 宮中の門内で乗る
- (五) 下二段に活用す
- (六) 謙稱の助動詞。四段
- (七) 活の敬語と異なる

なれば、斯くながら、ともかくもならむを御覽じ果てむと思召すに、今日始むべき祈禱ども、さるべき人々承れる、「今宵より」と聞え急がせば、わりなく思ほしながら、罷出させ給ひつ。御胸のみつと塞がりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ給ふ。御使の行き交ふ程もなきに、猶いぶせさを限りなく宣はせつるを、「夜中打過ぐる程になむ、絶え果て給ひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて歸り参りぬ。聞召す御心惑ひ、何事も思召し分かれず、籠りおはします。御子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かゝる程に侍ひ給ふ例なき事なれば、罷出給ひなむとす。何事かあらむとも思ほしたらず、侍ふ人々の泣き惑ひ、上も御涙の隙なく流れおはしますを、怪しと見奉り給へるを、よろしき事にだに、かゝる別れの悲しからぬはなきわざなるを、まして哀れに言ふ甲斐無し。

限りあれば、例の作法に斂め奉るを、母北の方、同じ煙にも上りなむと、泣き焦れ給ひて、御送りの女房の車に慕ひ乗り給ひて、愛宕といふ所に、いと殿しうその作法したるに、おはし著きたる心地、いかばかりかはありけむ。空しき御骸を見る、猶おはするものと思ふが、いと甲斐無ければ、灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人と、ひたぶるに思ひなりなむ」と、賢しう宣ひつれど、車より落ちぬべう惑ひ給へば、「さは思ひつかし」と、人々もて煩ひ聞ゆ。内裏より御使あり。三位の位贈り給ふよし、勅使来て、その宣命讀むなむ、悲しき事なりける。女御とだにいはずなりぬるが、飽かず口惜しう思さるれば、今一階の位をだにと、贈らせ給ふなりけり。これにつけても、憎み給ふ人々多かり。物思ひ知り給ふは、様貌などのめでたかりし事、心ばせのなだらかに目易く、憎み難かりし事など、今ぞ思し出づる。さま悪しき御もてなし

(一) 火葬場。山城國愛宕郡 (二) 國文の詔勅

故こそ、すげなう嫉み給ひしか。人柄の哀れに、情ありし御心を、上の女房なども戀ひ忍び合へり。「なくてぞ」とは、かゝる折にやと見えたり。はかなく日頃過ぎて、後のわざなどにも細かに訪はせ給ふ。程經るまに、せむ方なう悲しう思さるゝに、御方々の宿直なども絶えてし給はず、たゞ涙に沾ちて明し暮させ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「亡き跡まで、人の胸あくまじかりける人の御覺えかな」とぞ、弘徽殿などには猶恕し無う宣ひける。一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御戀しさのみ思ほし出でつゝ、親しき女房、御乳母などを遣はしつゝ、有様を聞召す。

野分だちて、俄に膚寒き夕暮の程、常よりも思し出づる事多くて、靱負の命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしき程に、出し立てさせ給うて、やがてながめおはします。斯様の折は、御遊びなどせさせ給ひしに、心殊なる物の音を搔鳴らし、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは異なりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さるゝにも、闇の現には猶劣りけり。命婦、彼處に罷出著きて、門引き入るゝよりけはひ哀れなり。寡婦住みなれど、一人の御かしづきに、とかく繕ひ立てて、目易き程にて過し給ひつるを、闇に昏れて伏沈み給へる程に、草も高くなり、野分にいと荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にも障らすさし入りたる。南面に下して、母君とみにえ物も宣はず。今まで留まり侍るがいと憂きを、かゝる御使の、蓬生の露分け入り給ふにつけても、恥かしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣い給ふ。命婦参りてはいと心苦

(一) ある時はありの
すさびに憎かりき
なくてぞ人の戀し
かりける「奥入」

(二) 法事
(三) 野分めいて
(四) ねば玉の闇のうつ
つはさだかなる夢に

いくらも勝らざりけ
り(古今、戀三)
人の親の心は闇に
あらねども子を思ふ

道に惑ひぬるかな
(後撰、雜一、兼
輔)
訪ふ人もなき宿

なれど来る春は八
重葎にもさはらざ
りけり(新勅撰、
春上、貫之)

しう、心肝も盡くるやうになむ」と典侍の奏し給ひしを、物思ひ給へ知らぬ心地にも、げにこそいと忍び難う侍りけれ」とて、やゝためらひて仰せ言傳へ聞ゆ。命「暫時は夢かとのみ辿られしを、やう／＼思ひ鎮まるにしも、覺むべき方なく堪へ難きは、如何にすべきわざにかとも、問ひ合はすべき人だになきを、忍びては参り給ひなむや。若宮のいと覺束なく、露けき中に過し給ふも、心苦しう思さるゝを、疾く参り給へ」など、はかくしうも宣はせやらす、噎せかへらせ給ひつゝ、且は人も心弱く見奉るらむと、思し慎まぬにしもあらぬ御氣色の心苦しさに、承りも果てぬやうにてなむ罷出侍りぬる」とて御文奉る。目も見え侍らぬに、かく長き仰せ言を光にてなむ」とて見給ふ。

程程ば少し打紛るゝ事もやと、待ち過す月日に添へて、いと忍び難きはわりなきわざになむ。幼稚き人も如何にと思ひやりつゝ、諸共にはぐくまぬ覺束なさを、今は猶、昔の形見になすらへてものし給へ。

など、細やかに書かせ給へり。

帝「宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそ遣れ

とあれど、え見給ひはてず。命長さの、いと辛う思ふ給へ知らるゝに、松の思はむ事だに、恥かしう思ふ給へ侍れば、百敷に行き交ひ侍らむ事は、ましていと憚り多くなむ。長き仰せ言を度々承りながら、自らはえなむ思ひ給へ立つまじき。若宮は、如何に思ほし知るにか、参り給はむ事をのみなむ思し急ぐめれば、こ

- (一) 宮中の意に掛く
- (二) 若宮に比す
- (三) 壽則多辱(莊子)

- (四) 天地篇
- (五) いかにしてあり
- (六) と知られし高砂の

- (七) 松の思はむことも
- (八) 恥かし(奥入)
- (九) いかでなほありと

- (十) 知らせし高砂の松
- (十一) の思はむことも恥
- (十二) かし(古今六帖、五)

とわりに悲しう見奉り侍るなど、内々に思ひ給ふるさまを奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば、かくておはしませも、忌々しう忝く」など宣ふ。命「宮は大殿籠りにけり。見奉りて、委しく御有様も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべし」とて急ぐ。命「昏れ惑ふ心の闇も堪へ難き片端をだに、はるくばかりに聞えまほしう侍るを、私にも、心のどかに罷出給へ。年頃嬉しく面立たしき序にのみ、立寄り給ひしものを、かゝる御消息にて見奉る、かへす／＼つれなき命にも侍るかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言今はとなるまで、唯、この人の宮仕の本意、必ず遂げさせ奉れ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな」と、かへす／＼諫め置かれ侍りしかば、はかくしう後見思ふ人なき交らひは、なかなかなるべき事と思ひ給へながら、唯かの遺言を違へじとばかりに、出し立て侍りしを、身に餘るまでの御志の、萬づに忝きに、人げなき恥を隠しつゝ、交らひ給ふめりつるを、人の嫉み深く積り、安からぬ事多くなり添ひ侍るに、横さまなるやうにて、終に斯くなり侍りぬれば、却りてはつらくなむ、長き御志を思ひ給へられ侍る。これもわりなき心の闇になむ」と、言ひもやらす噎せ返り給ふ程に、夜も更けぬ。命「上も然なむ。命「我が御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになむ。世に聊かも、人の心を曲げたる事はあらじと思ふを、唯この人故にて、數多さるまじき人の恨みを負ひし果て／＼は、斯う打捨てられて、心をさめむなき方に、いと人わろく、かたくなに成り果つるも、前の世ゆかしうなむ」と、打返しつゝ、御潮垂れがらにのみおはします」と語りて盡させず。

- (一) (四) 人の親の心
- (二) 是闇にあらねども

- (三) 子を思ふ道に惑ひ
- (四) ぬるかな(前出)

- (五) 故更衣は
- (六) (三) 望を懸けてあつた女で

泣くく、魚夜いたう更けぬれば、今宵過さず、御返り奏せむ」と急ぎ参る。月は入方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、叢の蟲の聲々催し顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

命「鈴蟲の聲の限りを盡くしても長き夜飽かずふる涙かな
えも乗りやらず。

母「いとどしく蟲の音しげき浅茅生に露置き添ふる雲の上人

託言も聞えつべくなむ」と言はせ給ふ。をかしき御贈物などあるべき折にもあらねば、唯かの御形見にとて、かゝる用もやと残し置き給へりける、御装束一領、御髪上の調度めく物添へ給ふ。若き人々、悲しき事は更にもいはず、内裏邊を朝夕に慣らひて、いとさうくしく、上の御有様など思ひ出で聞ゆれば、疾く参り給はむ事をそゝのかし聞ゆれど、かくいましき身の添ひ奉らむも、いと人聞き憂かるべし、又見奉らで暫しもあらむは、いと後めたる思ひ聞え給ひて、すがくともえ参らせ奉り給はぬなりけり。

命婦は、まだ大殿籠らせ給はざりけるを、哀れに見奉る。御前の壺前裁の、いと面白き盛りなるを、御覽するやうにて、忍びやかに、心にくき限りの女房四五人侍はせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。この頃、明暮御覽する、長恨歌の御繪、亭子院の畫かせ給ひて、伊勢・貫之に詠ませ給へる、大和言葉をも、唐土の詩をも、唯その筋をぞ、枕言にせさせ給ふ。いと細やかに有様を問はせ給ふ。哀れなりつる事忍びやかに奏す。御返り御覽すれば、

いととも長きは置所も侍らず。斯かる仰せ言につけても、かき昏らす亂り心地になむ。

(一) お恨み言 (二) 建物に狭く圍まれた前庭の植込 (三) 宇多法皇 (四) 口癖

荒き風防ぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞ靜心なき

などやうに亂りがはしきを、心をさめざりける程と、御覽じ免すべし。いと斯うしも見えじと思し鎮むれど、更にあ忍びあへさせ給はず、御覽じ始めし年月の事さへ掻き集め、萬づに思し續けられて、時の間も覺束無かりしを、かくても月日は經にけりと、淺ましう思召さる。命「故大納言の遺言過たず、宮仕の本意深くものしたりし喜びは、甲斐あるさまにこそ思ひ渡りつれ。言ふ甲斐なしや」と打宣はせて、いと哀れに思しやる。命「かくてもおのづから、若宮など生ひ出で給はば、さるべき序もありなむ。命長くこそ思ひ念せめ」など宣はす。かの贈物御覽せさす。亡き人の住處尋ね出でたりけむ、微の釵ならましかばと思ほすも、いと甲斐なし。

命「尋ね行く幻士もがな傳にても魂の在所を其處と知るべく

繪に畫ける楊貴妃の容貌は、いみじき畫師といへども、筆限りありければ、いと句なし。太液の芙蓉、未央の柳も、けに通ひたりし容貌を、唐めいたる粧ひはうるはしうこそ有りけめ、懐かしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言種に、羽を比べ、枝を交さむと契らせ給ひしに、叶はざりける命の程ぞ、盡きせず恨めしき。風の音、蟲の音につけても、物のみ悲しう思さるゝに、

(一) 故更衣に比す (二) 唯將舊物表 (三) 太液芙蓉未央柳 (四) 河内本には「か (五) 故更衣の (六) 在天願作比翼 (七) 在在地願爲連理枝 (八) 長恨歌の句

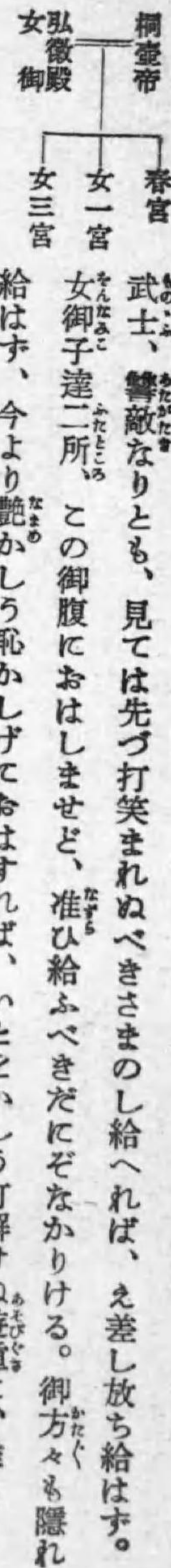
弘微殿には、久しう上の御局にも参り給はず、月の面白きに、夜更くるまで遊びをぞし給ふなる。いとすさまじう、ものしと聞召す。この頃の御氣色を見奉る上人・女房などは、傍痛しと聞きけり。いと押立ちかどくしき所ものし給ふ御方にて、事にも有らず思し消ちて、もてなし給ふなるべし。月も入りぬ。

帝「雲の上も涙に昏る、秋の月いかですむらむ浅茅生の宿

思しやりつゝ、燈火を挑げ盡くして、起きおはします。右近の司の宿直奏の聲聞ゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して夜の御殿に入らせ給ひても、まどろませ給ふ事難し。

月日経て、若宮参り給ひぬ。いとこの世の物ならず、清らにおよすけ給へれば、いとゆゝしう思したり。明くる年の春、坊定まり給ふにも、いと引越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、又世の承け引くまじき事なれば、なか／＼危く思し憚りて、色にも出させ給はずなりぬるを、さばかり思したれど、限りこそありけれと、世の人も聞え、女御も御心落ち居給ひぬ。かの御祖母北の方、慰む方なく思し沈みて、おはすらむ所にだに尋ね行かむと、願ひ給ひし験にや、終に亡せ給ひぬれば、またこれを悲しみ思すこと限りなし。御子六つになり給ふ年なれば、この度は思し知りて戀ひ泣き給ふ。年頃馴れ睦び聞え給へるを、見奉り置く悲しびをなむ、返す／＼宣ひける。今は内裏にのみ侍ひ給ふ。七つになり給へば、書始などせさせ給ひて、世に知らず聰う賢くおはすれば、餘りに怖ろしきまで御覽す。昔今は誰も／＼え憎み給はじ。母君なくてだにらうたうし給へ」とて、弘微殿などにも渡らせ給ふ御供には、やがて御簾の内に入れ奉り給ふ。いみじき

- (一) 清涼殿に在る御 休息所
- (二) 不興に 宿を思ひこそやれ
- (三) 九重の内だに明 滋爲政
- (四) 名對面。左右近 衛交替で夜中の禁
- (五) 御讀書始の儀式 裏警護を勤め、宿
- (六) せめて母君の居 直各自が名告する
- (七) 拾遺、雜秋、善 されぬ今なりと



思ひ聞え給へり。わざとの御學問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ續けば、事々しううたてぞなりぬべき人の御様なりける。

その頃高麗人の参れるが中に、賢き相人ありけるを聞召して、宮の中に召さむ事は、宇多帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕う奉る右大辨の子のやうに思はせて奉て奉る。相人驚きて、數多度傾き怪しむ。想國の親となりて、帝王の上なき位に登るべき相おはします人の、其方にて見れば、亂れ憂ふる事やあらむ。朝廷の固めとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、又その相違ふべしと言ふ。辨もいと才賢き博士にて、言ひ交したる事どもなむ、いと興ありける。文など作り交して、今日明日歸り去りなむとするに、かく有り難き人に對面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、面白く作りたるに、御子もいと哀れなる句を作り給へるを、限りなう感で奉りて、いみじき贈物どもを捧げ奉る。朝廷よりも多く物賜はず。おのづから事廣ごりて、漏らさせ給はねど、春宮の祖父大臣など、如何なる事にかと、思し疑ひてなむありける。帝長き御心に、倭相をおほせて、思し寄りける筋なれば、今までこの君を、親王にもなさせ給はざりけるを、相人は眞に賢かりけりと思し合はせて、無品親王の外戚の寄せ無

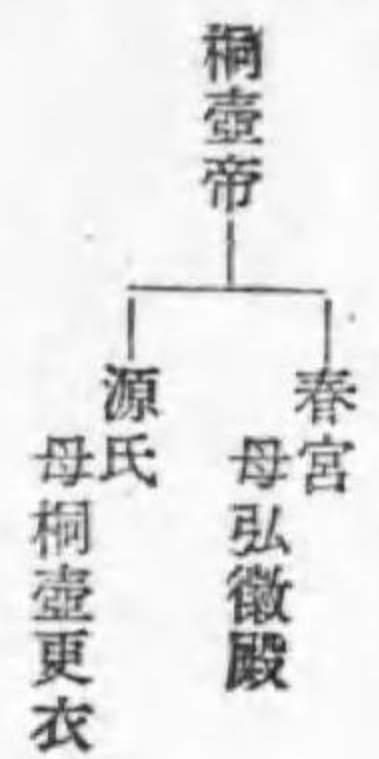
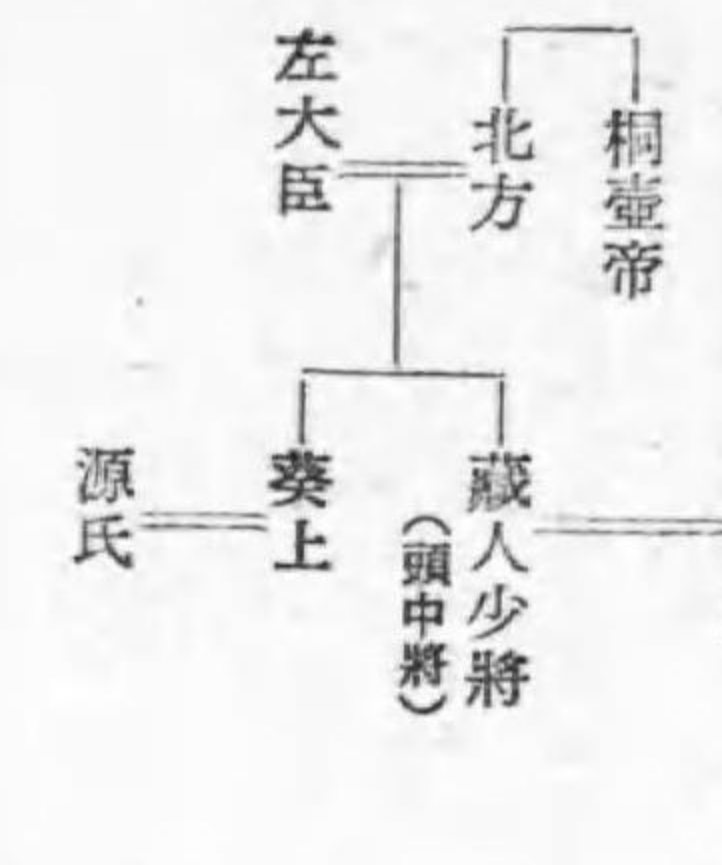
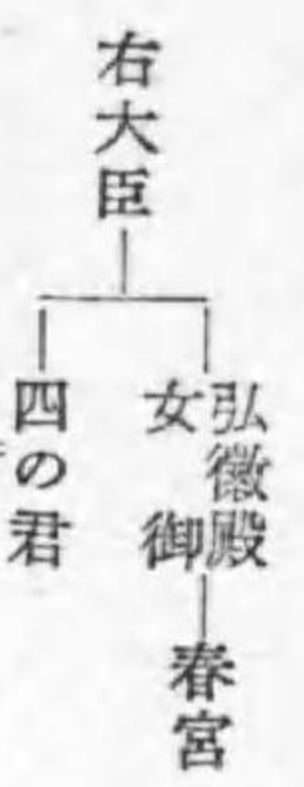
- (一) 外蕃之人、必可 對耳(寛平遺誠の 七條朱雀の東西に
- (二) 召見者、在簾中 一節) 在った
- (三) 見之、不可直 來朝外賓の館舍 (三) 詩賦
- (四) 位の無い。親王 位の階は一品から
- (五) 後楯 四品まで

きにては漂はさじ。我が御世もいと定めなきを、直人にて朝廷の御後見をするなむ、行先も頼もしげなる事と思し定めて、いよ／＼道々の才を習はせ給ふ。際殊に賢くて、直人にはいとあたらしけれど、親王となり給ひなば、世の疑ひ負ひ給ひぬべく物し給へば、宿曜の賢き道の人に考へさせ給ふにも、同じさまに申せば、源氏になし奉るべく思し掟てたり。

この君の御童姿いと變へま憂く思せど、十二にて御元服し給ふ。居起ち思し替みて、限りある事に事を添へさせ給ふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式の、よそほしかりし御響に落させ給はず。所々の饗など、内藏寮・穀倉院など、公事に仕う奉れる、疎かなる事もこそと、取り分き仰せ言ありて、清らを盡くして仕う奉れり。おはします殿の東の廂、東向に御椅子立てて、冠者の御座、引入の大臣の御座御前にあり。申の時にぞ源氏参り給ふ。角髪結ひ給へる面つき、顔のほひ、様變へ給はむ事惜しげなり。大藏卿藏人仕う奉る。いと清らなる御髪を削ぐ程、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばと、思し出づるに堪へ難きを、心強く念じ返させ給ふ。冠し給ひて、御休所に罷出給ひて、御衣奉り替へて、下りて拜し奉り給ふさまに、皆人涙落し給ふ。帝はたましてえ忍びあへ給はず。思し紛る、折もありつるを、昔の事取り返し、悲しく思さる。いと斯うきびはなる程は、上げ劣りやと疑はしく思されつるを、あさましう美しげさ添ひ給へり。引入の大臣の皇女腹に、唯一人かしづき給ふ御女、春宮よりも御氣色あるを、思し煩ふ事ありけ

- (一) 二十八宿及び九曜星の行度をもて人間の運命を占ふ術。占星術
- (二) 紫宸殿
- (三) 清涼殿
- (四) 元服する人
- (五) 加冠。當日冠者に冠を初めて被ら
- (六) 幼弱
- (七) 元服劣り。元服役。この時は左大臣した爲に美しさが劣ること
- (八) 葵上
- (九) 清涼殿
- (十) 元服する人
- (十一) 加冠。當日冠者に冠を初めて被ら
- (十二) 幼弱
- (十三) 元服劣り。元服役。この時は左大臣した爲に美しさが劣ること
- (十四) 葵上

るは、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも御氣色賜はら給せひければ、重さらば此の折の御後見なめるを、添臥にも」と催させ給ひければ、さ思したり。侍ひに罷出給ひて、人々御酒など参る程、親王達の御座の末に、源氏著き給へり。大臣氣色ばみ聞え給ふ事あれど、物の慎ましき程にて、ともかくも得あへしらひ聞え給はず。御前より、内侍宣旨承り傳へて、大臣参り給ふべき召しあれば、参り給ふ。御祿の物、上の命婦取りて賜ふ。白き大桂に御衣一領、例の事なり。御杯の序に、



帝「いとときなき初元結に長き世を契る心は結び籠めつや御心ばへありて驚かさ給ふ。」
左「結びつる心も深きもとゆひに濃き紫の色し褪せずば」と奏して、長橋より下りて舞踏し給ふ。左馬寮の御馬、藏人所の鷹居ゑて賜はり給ふ。御階の下に、親王達・上達部列ねて、祿ども品々に賜はり給ふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大辨なむ承りて仕う奉らせける。屯食、祿の韓櫃などもなど、所狭きまで、春宮の御元服の折にも數増れり。なか／＼限りもなく殿しうなむ。
その夜大臣の御里に、源氏の君罷出させ給ふ。作法世に珍らしきまで、もてかしづき聞え給へり。いとときびはにておはしたるを、ゆ／＼しう美しと思ひ聞え給へり。

- (一) 下侍。休息所
- (二) 掌侍中の第一膺
- (三) 勾當内侍
- (四) 清涼殿から紫宸殿へ渡る廊
- (五) 楡板を曲げて造
- (六) 果物を入れた籠
- (七) 卯形に握った強飯
- (八) 結婚の儀式

女君は少し過し給へる程に、いと若うおはすれば、似げなく恥かしと思いたり。この大臣の御覺えいとやんごとなきに、母宮、内裏の一つ御后腹になむおはしければ、何方につけても物鮮かなるに、この君さへ斯くおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて終に世の中を知り給ふべき、右の大臣の御勢ひは、物にもあらず壓され給へり。御子ども數多、腹々に物し給ふ。宮の御腹は藏人の少將にて、いと若うをかしきを、右の大臣の御中はいとよからねど、え見過し給はで、かしづき給ふ四の君に婚せ給へり。劣らずもてかしづきたるは、あたまほしき御間どもになむ。源氏の君は、上の常に召し纏はせば、心安く里住もえし給はず。大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず覺え給ひて、二三日など、絶え／＼に罷出給へど、只今は幼き御程に、罪なく思しなして、いとなみかしづき聞え給ふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、擇り調へ選りて侍はせ給ふ。御心につくべき御遊びをし、おふなく／＼思し勞く。内裏には舊の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方々の人々、罷出散らす侍はせ給ふ。里の殿は、修理職・内匠寮に宣旨下りて、になう改め造らせ給ふ。舊の木立、山のたゝすまひ、面白き所なるを、池の心廣くしなして、めでたく造りのゝしる。かゝる所に、思ふやうならむ人を居ゑて住まばやとのみ、歎かしう思し渡る。光君といふ名は高麗人のめで聞えてつけ奉りけるとぞ、言ひ傳へたるとなむ。

(一) 葵上十六歳。源氏十二歳

(二) 葵上 出来るかぎり

(三) 桐壺を源氏の御部屋として

(四) 無二。一説、無

(五) 池を廣く掘つて

長恨歌

峨眉山下少人行 旌旗無光日色薄
 蜀江水碧蜀山青 聖主朝々暮々情
 行宮見月傷心色 夜雨聞鈴腸斷聲
 天旋地轉回龍馭 到此躊躇不能去
 馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死處
 君臣相顧盡沾衣 東望都門信馬歸
 歸來池苑皆依舊 太液芙蓉未央柳
 芙蓉如面柳如眉 對此如何不淚垂

回頭下望人寰處 不見長安見塵霧
 唯將舊物表深情 鈿合金釵寄將去
 釵留一股合一扇 釵擘黃金合分鈿
 但令心似金鈿堅 天上人間會相見
 臨別殷勤重寄詞 詞中有誓兩心知
 七月七日長生殿 夜半無人私語時
 在天願作比翼鳥 在地願爲連理枝
 天長地久有時盡 此恨綿綿無絕期

(一) 葵上十六歲。源氏十二歲
(二) 葵上出來るかぎり
(三) 桐壺を源氏の御部屋として
(四) 無二。一説、無似
(五) 池を廣く掘つて

長恨歌

漢皇重色思傾國，楊家有女初長成。天生麗質難自棄，回眸一笑百媚生。春寒賜浴華清池，侍兒扶起嬌無力。雲鬢花顏金步搖，春宵苦短日高起。承歡侍宴無閒暇，後宮佳麗三千人。金屋粧成嬌侍夜，姊妹弟兄皆列土。遂令天下父母心，驪宮高處入青雲。緩歌慢舞凝絲竹，漁陽鼙鼓動地來。九重城闕煙塵生，翠華搖々行復止。六軍不發無奈何，花鈿委地無人收。君王掩面救不得，黃埃散漫風蕭索。峨眉山下少人行，蜀江水碧蜀山青。行宮見月傷心色，天旋地轉回龍馭。馬嵬坡下泥土中，君臣相顧盡沾衣。歸來池苑皆依舊，芙蓉如面柳如眉。

御宇多年求不得，養在深閨人未識。一朝選在君王側，六宮粉黛無顏色。溫泉水滑洗凝脂，始是新承恩澤時。芙蓉帳暖度春宵，從此君王不早朝。春從春遊夜專夜，三千寵愛在一身。玉樓宴罷醉和春，可憐光彩生門戶。不重生男重生女，仙樂風飄處々聞。盡日君王看不足，驚破霓裳羽衣曲。千乘萬騎西南行，西出都門百餘里。宛轉蛾眉馬前死，翠翹金雀玉搔頭。回首血淚相和流，雲棧縈紆登劍閣。旌旗無光日色薄，聖主朝々暮々情。夜雨聞鈴腸斷聲，到此躊躇不能去。不見玉顏空死處，東望都門信馬歸。太液芙蓉未央柳，對此如何不淚垂。

春風桃李花開夜，西宮南苑多秋草。梨園弟子白髮新，夕殿螢飛思悄然。暹々鐘鼓初長夜，鴛鴦瓦冷霜華重。悠悠生死別經年，臨邛道士鴻都客。爲感君王展轉思，排空馭氣奔如電。上窮碧落下黃泉，忽聞海上有仙山。樓殿玲瓏五雲起，中有仙人字太真。金闕西廂叩玉局，聞道漢家天子使。攬衣推枕起徘徊，雲鬢半偏新睡覺。風吹仙袂飄々舉，玉容寂寞淚欄干。含情凝睇謝君王，昭陽殿裏恩愛絕。回頭下望人寰處，唯將舊物表深情。釵留一股合一扇，但令心似金鈿堅。臨別殷勤重寄詞，七月七日長生殿。在天願作比翼鳥，在天長地久有時盡。

秋雨梧桐葉落時，宮葉滿階紅不掃。椒房阿監青娥老，孤燈挑盡未成眠。耿耿星河欲曙天，翡翠衾寒誰與共。魂魄不曾來入夢，能以精神致魂魄。遂教方士殷勤覓，升天入地求之偏。兩處茫茫皆不見，山在虛無縹渺間。其中綽約多仙子，雪膚花貌參差是。轉教小玉報雙成，九華帳裏夢魂驚。珠箔銀屏遷迤開，花冠不整下堂來。猶似霓裳羽衣舞，梨花一枝春帶雨。一別音容兩渺茫，蓬萊宮中日月長。不見長安見塵霧，不見長安見塵霧。鈿合金釵寄將去，釵擘黃金合分鈿。天上人間會相見，詞中有誓兩心知。夜半無人私語時，在地願爲連理枝。此恨絲絲無絕期，

帶

木

(一七五)

光源氏の本性——雨夜品定——頭中將の女性論——左馬頭の中品禮讚——
 良妻難・家出女——才氣と質實——嫉妬深い指喰女の話(馬頭)——仇めい
 た木枯の女の話(馬頭)——心もとなき常夏の女の話(頭中將)——賢婦人蒜
 食ひ女の話(藤式部)——馬頭の結論



光源氏、名のみことくしう、言ひ消たれ給ふ咎多かなるに、いとゞ、斯かる
 好色事どもを、末の世にも聞き傳へて、軽びたる名をや流さむと、忍び給ひけ
 る隠ろへ事をさへ語り傳へけむ、人の物言ひさがなさよ。さるは、いといたく
 世を憚り、眞實だち給ひける程に、なよびかにかしき事は無くて、交野の少
 將には笑はれ給ひけむかし。まだ中將などに物し給ひし時は、内裏にのみ侍ひ
 ようし給ひて、大殿には絶えく罷出給ふを、忍ぶの亂れやと、疑ひ聞ゆる事も
 ありしかど、さしもあだめ
 き目馴れたる、うちつけのすきくしさなどは、好ましからぬ御本性にて、稀には、
 あながちに引違へ心盡
 しなる事を、御心に思し留むる癖なむ生憎にて、さるまじき御振舞もうちまじりける。

長雨晴閑なき頃、内裏の御物忌さし續きて、いとゞ長居侍ひ給ふを、大殿には覺束なく恨めしと思したれど、
 萬づの御装ひ、何くれと珍らしきさまに調じ出で給ひつゝ、御子息の君達、唯この御宿直所の宮仕を勤め給
 ふ。宮腹の中將は、中に親しく馴れ聞え給ひて、遊び戯れをも、人よりは心安く、馴れくしく振舞ひたり。
 右大臣のいたはりかしづき給ふ住處は、この君もいと物憂くして、好色がまじきあだ人なり。里にても、我
 が方のしつらひ眩くして、君の出で入りし給ふに、打連れ聞え給ひつゝ、夜晝、學問をも遊びをも諸共にし
 て、をさく立ち後れず、何處にても纏はれ聞え給ふほどに、自ら長まりも置かず、心の中に思ふ事をも

(一) 譏り貶されがち
 の失策

(二) 交野少將物語(散
 佚)の主人公

(三) 春日野の若紫の
 摺衣しのぶの亂れ
 かぎり知られず

(四) 伊勢物語の
 頭中將。葵上の
 兄。右大臣の女四
 の君の夫

隠しあへずなむ、陸れ聞え給ひける。つれづれと降り暮して、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさく人
 少なに、御宿直所も例よりは長閑やかなる心地するに、御殿油近くて、書どもなど見給ふついでに、近き御
 厨子なる、いろ／＼の紙なる文どもを引き出でて、中將わりなくゆかしがれば、馬さりぬべき、少しは見せ
 む。片はなるべきもこそ」と許し給はねば、中將「その打解けて、傍痛しと思されむこそゆかしけれ。おし
 なべたる大方のは、敷ならねど、程々につけて、書き交しつゝも見侍りなむ。おのがじし、怨めしき折々、
 待顔ならむ夕暮などのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、やんごとなく、切に隠し給ふべきなどは、斯様に
 おほさうなる御厨子などに、打置き散らし給ふべくもあらず、深く取り置き給ふべかめれば、これは、二の
 町の心安きなるべし。片端づつ見るに、馬斯くさま／＼なる物どもこそ侍りけれ」とて、心當てに、それか
 かれかなど問ふうちに、言ひ當つるもあり、もて離れたる事をも思ひ寄せて疑ふもをかしと思せど、言少な
 にて、とかく紛らはしつゝ、取隠し給ひつ。馬其所にこそ多く集へ給ふらめ。少し見ばや。さてなむこの厨子
 も心よく開くべき」と宣へば、馬御覽じ所あらむこそ難く侍らめ」など聞え給ふ序に、馬女の、これはしも
 と難つくまじきは難くもあるかなと、やう／＼なむ見給へ知る。唯うはべばかりの情に、手走り書き、折節
 の答へ心得てうちしなどばかりは、随分によろしきも多かりと見給ふれど、そも眞にその方を取り出でむ選
 びに必ず漏るまじきは、いと難しや。わが心得たる事ばかりを、おのがじし心をやりて、人をば貶しめなど、
 傍痛き事多かり。親など立添ひもてあがめて、生ひ先籠れる窓の内なる程は、唯片かどを聞き傳へて、心を

(一) 燈火
 (二) 書畫調度等を入

れ載せる置戸棚
 (三) 一通りの

(四) 二流
 (五) かなりな

(六) 楊家有女初長
 成 養在深閨一人

未識 (長恨歌の
 句)

動かす事もあめり。容貌をかしくうちおほどき、若やかにて紛るゝ事なき程、はかなきすさびをも人真似に
 心を入るゝ事もあるに、自ら一つ故づけてし出づる事もあり。見る人後れたる方をば言ひ隠し、さてあり
 ぬべき方をば繕ひて、まねび出すに、それ然あらじと、そらに、如何は推し量り思ひ朽さむ。眞かと思もて
 行くに、見劣りせぬやうは無くなむあるべき」と呻きたる氣色も恥かしげなれば、いとなべてはあらねど、
 我も思し合はする事やあらむ、打微笑みて、馬その片かども無き人はあらむや」と宣へば、馬いとさばかり
 ならむ邊には、誰かは賺され寄り侍らむ。取る方なく口惜しき際と、優なりと覺ゆばかり勝れたるとは、敷
 等しくこそ侍らめ。人の品高く生まれぬれば、人にもてかじづかれて隠るゝ事も多く、自然にそのけはひこ
 よなかるべし。中の品になむ、人の心々おのがじし立てたる趣も見えて、分かるべき事かた／＼多かるべ
 き。下のきさみといふ際になれば、殊に耳立たずかし」とて、いと隈なげなる氣色なるもゆかしくて、馬そ
 の品々やいかに。いづれを三つの品に置きてか分くべき。もとの品高く生まれながら、身は沈み、位短くて
 入げ無き、又直人の上達部などまで成り上りたる、我は顔にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる、その差
 別をばいかゞ別くべき」と問ひ給ふ程に、左馬頭、藤式部丞、御物忌に籠らむとて参れり。世の好き者に
 て、物よく言ひ通れるを、中將待ちとりて、この品々を辨へ定め争ふ。いと聞きにくき事多かり。

馬「成りのぼれども、もとよりさるべき筋ならぬは、世の人の思へる事も、さはいへど猶異なり。又もとはや
 んごとなき筋なれど、世に經るたつき少なく、時世移ろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、
 (一) おつとりして
 (二) 媒の人など
 (三) 中流階級
 (四) 貴族でない普通
 (五) 左馬寮の長官

悪びたる事ども出で来るわざなれば、とりくことにわりて、中の品にぞ置くべき。受領と言ひて、人の國の事にかゝらひ營みて、品定まりたる中にも、又きざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、擇り出でつべき頃ほひなり。なま／＼の上達部よりも、非参議の三四位どもの、世の覚え口惜しからず、もとの根ざし賤しからぬが、安らかに身をもてなし振舞ひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬ事など、はた無かめるまゝに、省かず、眩きまでもてかしづける女などの、賤しめ難く生ひ出づるも數多あるべし。官仕に出で立ちて、思ひかけぬ幸ひ取出づる例ども多かりかし」など言へば、異すべて、賑ははしきによるべきななり」とて笑ひ給ふを、異他人の言はむやうに、心得ず仰せらるゝ」とて中将憎む。異もとの品、時世のおぼえ打合ひ、やんごとなき邊の、内々のもてなしけはひ後れたらむは、更にも言はず、何をして斯く生ひ出でけむと、言ふ甲斐なく覺ゆべし。打合ひて勝れたらむもことわり、これこそはさるべき程と覺えて、珍らかなる事と、心も驚くまじ。なにがしが及ぶべき程ならねば、上は打措き侍りぬ。さて世にありと人に知られず、寂しくあばれたらむ葎の門に、思ひの外に、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなく珍らしくは覺えぬ。如何ではた斯かりけむと、思ふより違へる事なむ、怪しく心留まるわざなべき。父の年老い、物むつかしげに肥り過ぎ、兄の顔憎げに、思ひやり異なる事なき閨の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたる事わざも、故なからず見えたらむ、片かどにても、如何思ひの外にをかしからざらむ。

(一) 國司の長官
(二) 京以外の地方の諸國

(三) 四位で参議たり得る資格ある人、又もと参議だつた

人、及び三位以上でまた参議に任せられぬ人

(四) さつぱりと氣持よい
(五) 富裕

(六) 拙者

勝れて疵なき方の選びにこそ及ばざらめ、さる方にて捨て難きものをば」とて、式部を見やれば、我が妹どものよろしき聞えあるを思ひて宜ふにやとや心得らむ、物も言はず。いでや上の品と思ふにだに難げなる世をと、君は思すべし。白き御衣どものなよ／＼かなるに、直衣ばかりを、しどけなく著なし給ひて、紐なども打捨てて、添ひ臥し給へる御火影、いとどめでたく、女にて見奉らまほし。この御爲には、上は上を擇り出でても、猶飽くまじく見え給ふ。

さまざまの人の上どもを語り合はせつゝ、異大方の世につけて見るには咎なきも、わが物と打頼むべきを選ばむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。男の朝廷に仕う奉り、はか／＼しき世の固となるべきも、眞の器ものとなるべきを取り出さむには、難かるべしかし。されど、賢しとても、一人二人世の中を政ちしるべきならねば、上は下に助けられ、下は上に靡きて、事廣きに譲らふらむ。狭き家の内の主人とすべき人一人を思ひ廻らすに、足らばで悪しかるべき大事どもなむかた／＼多かる。と有れば斯かり、あふさきるさにて、斜にさてもありぬべき人の少なきを、すき／＼しき心のすさびにて、人の有様を數多見合はせむの好みならねど、偏に思ひ定むべき寄邊とすばかりに、同じくは我が力入りをし、直し引繕ふべき所なく、心に叶ふ様もやと、擇り初めつる人の、定まり難きなるべし。必ずしも我が思ふに叶はねど、見初めつる契りばかりを捨て難く、思ひ留まる人は、物眞實なりと見え、さて保たるゝ女の爲も、心にくく推し量らるゝなり。されど何か、世の有様を見給へ集むるまゝに、心に及ばず、いとゆかしき事も無しや。君だちの上なき御

(一) 物に寄り添うて
(二) 女にして

(三) そへにととすればかゝりかくすればあな言ひしらずあふさきるさに(古今、誹諧歌)

(四) 一方善ければ他

(五) 不十分ながらも

選びには、まして如何ばかりの人かは偶ひ給はむ、所狭く思ひ給へぬぞに。容貌きたなげなく若やかなる程の、おのがししは塵も附かじと身をもてなし、文を書けど、おほどかに言選をし、墨つき仄かに、心もとなく思はせつゝ、又さやかにも見てしがなと、すべなく待たせ、僅かなる聲聞くばかり言ひ寄れど、息の下に引入れ、言少ななるが、いとよくも隠すなりけり。なよびかに女しと見れば、餘り情に引籠められて、取り成せばあだめく。これを初めの難とすべし。事が中に、斜なるまじき、人の後見の方は、物の哀れ知り過し、はかなきついで的情あり、をかしきに進める方、無くてもよかるべしと見えたるに、又實々しき筋を立てて耳挿みがちに、美相なき家刀自の、偏に打解けたる後見ばかりをして、朝夕の出で入りにつけても、公私の人のたゝすまひ、善き悪しき事の、目にも耳にもとまる有様を、疎き人に、わざと打まねばむやは、近くて見む人の、聞き分き思ひ知るべからむに、語りも合はせばやと、打ちも笑まれ、涙もさしぐみ、若しはあやなきおほやけ腹立たしく、心一つに思ひ餘る事など多かるを、何にかは聞かせむと思へば、打背かれて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、哀れとも打獨言たるゝに、何事ぞなど、あはつかにさし仰ぎ居たらむは、如何は口惜しからぬ。唯一向に見てきて、柔かならむ人を、とかく引繕ひてはなどか見ざらむ。心もとなくとも直し所ある心地すべし。げに差向ひて見む程は、さてもらうたき方に罪免し見るべきを、立離れては、さるべき事をも言ひ遣り、折節に出でむ業の、あだ事にも、まめ事にも、我が心と思ひ得る事なく、深き至り無からむは、いと口惜しく、頼もしげなき咎や、なほ苦しからむ。常は少しそばくしく、心づき無き人の、

- (一) 最初に擧ぐべき
- (二) 夫の世話
- (三) 妻を
- (四) 主婦
- (五) 妻
- (六) わけもない公憤
- (七) ボカンとして
- (八) 角のある
- (九) 氣に食はぬ

折節につけて、出で榮えするやうもありかし」など、隈なき物言ひも、定めかねていたく打歎く。

「今はたゞ品にもよらし、容貌をば更にも言はじ。いと口惜しく、拗けがましきおほえだに無くば、たゞ偏に物眞實に、静かなる心の趣ならむ寄邊をぞ、終の頼所には思ひ置くべかりける。餘りのゆゑよし、心ばせ、打添へたらむをば、喜びに思ひ、少し後れたる方あらむをも、強ちに求め加へじ。後やすく長閑けき所だに強くば、うはべの情は、おのづからも附けつべき業をや。艶に物恥して、恨み言ふべき事をも、見知らぬさまに忍びて、上はつれなく操作り、心一つに思ひ餘る時は、言はむ方無く凄き言の葉、哀れなる歌を詠み置き、忍ばるべき形見を留めて、深き山里、世離れたる海面などに、這ひ隠れぬかし。童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞きて、いと哀れに悲しく、心深き事かなと、涙をさへなむ落し侍りし。今思ふには、いと輕々しく、殊更びたる事なり。志深からむ男を置きて、見る目の前につらき事ありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げ隠れて人を惑はし、心をも見むとする程に、長き世の物思ひになる、いと味氣無き事なり。心深しやなど誓め立てられて、哀れ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。思ひ立つ程は、いと心澄めるやうにて、世に願みすべくも思へらず。』いであな悲し、斯くはた思しなりけるよ』などやうに、相知れる人來訪らひ、一向に憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて涙落せば、使ふ人、古御達など、『君の御心は哀れなりけるものを、あたら御身を』など言ふに、みづから額髪をかき探りて、あへなく心細ければ、打撃みぬかし。忍ぶれど涙こぼれそめぬれば、折々毎に念じ得ず、悔やしき事も多かるに、佛もなか／＼心ぎたなしと見給ひつべし。濁に染める程よりも、生浮びにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。絶えぬ宿

- (一) 表面は強ひて平氣な風を装ひ
- (二) 老女達
- (三) 地獄・餓鬼・畜生を三惡道、修羅を加へて四惡道といふ

世淺からで、尼にもなさで尋ね取りたらむも、やがてその思ひ出で恨めしき節あらざらむや。悪しも善くも相添ひて、とあらむ折も、斯からむきさみをも、見過したらむ中こそ、契り深く哀れならめ、我も人も、後めたく心置かれじやは。又斜に移ろふ方あらむ人を恨みて、氣色ばみ背かむ、はた痴がましかりなむ。心は移ろふ方ありとも、見初めし志いとほしく思はば、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならむたじろぎに、絶えぬべきわざなり。すべて萬づの事なだらかに、怨すべき事をば、見知れるさまに仄めかし、恨むべからむ節をも、憎からずかすめなさば、それにつけて、哀れも増りぬべし。多くは、我が心も、見る人から治まりもすべし。餘り無下に打緩べ見放ちたるも、心安くらうたきやうなれど、おのづから輕き方にぞ覺え侍るか。繫がぬ船の浮きたる例も、げにあやなし。さは侍らぬか」と言へば、中將領く。眞さしあたりて、をかしとも哀れとも、心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ大事なるべけれ。我が心過無くて見過さば、さし直してもなどか見さらむと覺えたれど、それさしもあらじ。ともかくも違ふべき節あらむを、長閑やかに見忍ばむより外に、増す事あるまじかりけり」と言ひて、我が妹の姫君は、この定めに適ひ給へりと思へば、君の打眠りて詞交せ給はぬを、さうくしく心やましと思ふ。馬頭物定めの博士になりて、ひゞらぎ居たり。中將は、このことわり聞き果てむと、心に入れてあへしらひ居給へり。

馬「萬づの事によそへて思せ。木の道の工匠の、萬づの物を、心に任せて作り出すも、臨時の翫弄物の、その

- (一) 縁が
- (二) 妻次第で
- (三) 澹乎若深淵之

静、泛乎若不繫之舟。(文選、鵬鳥賦の句)

無情水任方圓器、不繫舟隨去住風。(白氏文集、偶吟)

- (四) 男
- (五) 妻上

- (六) 物足りなく
- (七) 喋り立てる

物と、跡も定まらぬは、そばつき戯ればみたるも、げに斯うもしつべかりけりと、時に付けつゝ、様を變へて、今めかしきに移りて、をかしきもあり。大事として、眞に置しき、人の調度の飾とする、定まれるやうあるものどもを、難なくし出づる事なむ、猶眞の物の上手は、様殊に見え分かれ侍る。又繪所に上手多かれど、墨書きに選ばれて、次々に更に劣り優る差別ふとしも見え分かれず。斯かれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐國の烈しき獸の形、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろくしく作りたる物は、心に任せて、一きは人の目を驚かして、實には似ざらめど、さてありぬべし。尋常の山のたゞすまひ水の流、目に近き人の家居有様、げにと見え、懐かしくやはらびたる形などを、靜かに書きませて、すくよかならぬ山の氣色、木深く、世離れて疊みなし、氣近き籬の内をば、その心しらひ掟などをなむ、上手はいと勢ひ殊に、わろ者は及ばぬ所多かめる。手を書きたるにも、深き事は無くて、此處彼處點長に走り書き、そこはかとなく氣色ばめるは、打見るに、かどくしく氣色立ちたれど、猶眞のすぢを細やかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一度取り並べて見れば、猶實になむ寄りける。はかなき事だに斯くこそ侍れ、まして人の心の、時に當りて氣色ばめらむ見る目の情をば、え頼むまじく思ひ給へ侍り。その初めの事、すきすきしくとも申し侍らむ」とて、近く居寄れば、君も目覺し給ふ。中將いみじく信じて、頬杖をつきて對ひ居給へり。法の師の、世の理説き聞かせむ所の心地するも、且はをかしけれど、斯かるついでには、各々睦

- (一) 形式
- (二) 一寸觀た時
- (三) きちんとした

(四) 宮中で繪畫の事を司る所

(五) 墨で畫くことで、作り繪の對

(六) 支那渤海の東。仙山

(七) 險阻でない
(八) 氣取つた

言もえ忍び止めずなむありける。

馬「早う、まだいと下臈に侍りし時、哀れと思ふ人侍りき。聞えさせつるやうに、容貌などいとまほにも侍らざりしかば、若き程の好色心地には、この人を止まりにとも思ひとどめ侍らす。寄邊とは思ひながら、さうさうしくて、とかく紛れ歩き侍りしを、物怨じをなむいたくし侍りしかば、心づきなく、いと斯からで、おいらかならましかばと思ひつゝ、餘りいと許しなく疑ひ侍りしもうるさくて、斯く數ならぬ身を見も放たで、など斯くしも思ふらむと心苦しき折々も侍りて、自然に心治めらるゝやうになむ侍りし。この女のあるやう、もとより思ひ至らざりける事にも、いかでこの人の爲にはと、無き手を出し、後れたる筋の心をも、猶口惜しくは見えじと思ひ勵みつゝ、とにかくにつけて、もの眞實に後見、露にても、心に違ふ事は無くもがなと思へりし程に、進める方と思ひしかど、とかくに靡き來てなよび行き、醜き容貌をも、この人に見や疎まれむと、わりなく思ひ繕ひ、疎き人に見えは、面伏にや思はれむと、憚り恥ぢて、操にもてつけて、見馴るゝ儘に、心もけしうはあらず侍りしかど、唯この憎き方一つなむ、心治めず侍りし。當時思ひ侍りしやう、斯うあながちに隨ひ怖ぢたる人なめり。いかで懲るばかりのわざして、嚇して、この方も少しよろしくもなり、さがなさも止めむと思ひて、眞に憂しなども思ひて、絶えぬべき氣色ならば、斯ばかり我に隨ふ心ならば思ひ懲りなむ、と思ひ給へて、殊更に情なくつれなきさまを見せて、例の腹立ち怨するを、馬「斯くおぞましくは、いみじき契り深くとも、絶えて又見じ。限りとは思はば、斯くわりなき物疑ひはせよ。行く先長く見え

(一) 眞秀。十分。か
たほの對

(二) 終生の妻
(三) 嫉妬

(四) おとなしい
(五) 他人

(六) 夫の不面目
(七) 嫉妬

(八) 口やかましき
(九) 剛情

むと思はば、辛き事ありとも、念じて斜に思ひなりて、斯かる心だに失せなば、いと哀れとなむ思ふべき。人並々にもなり、少し大人びむに添へて、又並ぶ人無くなむあるべき」など、賢く教へ立つるかなと思ひ給へて、我猛く言ひそし侍るに、少し打笑ひて、女「萬づに見だてなく、物げなき程を見過して、人數なる世もやと待つ方は、長閑に思ひなされて、心疚しくもあらず。辛き心を忍びて、思ひ直らむ折を見つけむと、年月を重ねむあいな頼みは、いと苦しくなむあるべければ、互に背きぬべきさみになむある」と妬げに言ふ時に、腹立たしくなりて、憎げなる事どもを言ひ勵まし侍るに、女もえをさめぬ筋にて、指一つを引き寄せてくひて侍りしを、おどろくしく託ちて、馬「斯かる疵さへつきぬれば、いよく交らひをすべきにもあらず、辱しめ給ふめる官位いとゞしく、何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり」など言ひ嚇して、馬「さらば今日こそは限りなめれ」と、この指を屈めて罷出ぬ。

馬「手を折りて逢ひ見しことを數ふればこれ一つやは君が憂き節
え怨みじ」など言ひ侍れば、流石に打泣きて、

女「憂き節を心一つに數へ來てこや君が手を別るべき折

など、言ひしろひ侍りしかど、誠には變るべき事とも思ひ給へずながら、日頃經るまで消息も遣はさず、あぐれ罷り歩くに、臨時の祭の調樂に、夜更けて、いみじう雲降る夜、これかれ罷り散るゝ所にて、思ひ廻

(一) 言ひ過し
(二) 空だのみ
(三) 手を折りてあひ

みしことを數ふれ
は十といひつゝ四
つはへにけり(伊)

勢物語、紀有常)
(四) 文句はあるまい
(五) 陰曆十一月下の

酉の日に行はれる
賀茂の臨時祭
(六) 祭日の前に樂所

で行はれる舞樂の
調習

らせば、なほ家路と思はむ方は、又無かりけり。内裏邊の旅寝もすさまじかるべく、氣色ばめる邊は、そゝろ寒くやと、思ふ給へられしかば、いかゞ思へると氣色も見がてら、雪を打拂ひつゝ罷りて、なまゝ人悪く爪くはるれど、さりとも今宵日頃の恨みは解けなむと思ふ給へしに、火仄かに壁に背け、萎えたる衣どもの厚肥えたる、大なる籠に打懸けて、引き上ぐべき物の帷など打上げて、今宵ばかりやと、待ちけるさまなり。さればよと心驕りするに、正身は無し。さるべき女房どもばかり留まりて、『親の家に、この夜さりなむ渡りぬる』と答へ侍り。艶なる歌も詠まず、氣色ばめる消息もせで、いと直屋隠に情無かりしかば、あへなき心地して、さがなく許し無かりしも、我を疎みねと思ふ方の心やありけむと、さしも見給へざりし事なれど、心疚しきまゝに思ひ侍りしに、著るべき物、常よりも心留めたる色合しさま、いとあらまほしくて、流石に我が見捨ててむ後をさへなむ、思ひ遣り後見たりし。さりとも絶えて思ひ放つやうはあらじと思ひ給へて、とかく言ひ侍りしを、背きもせず、尋ね惑はさむとも隠れ忍びず、かゞやかしからず答へつゝ、女たゞ、ありし心ながらは、えなむ見過すまじき。改めて長閑に思ひならばなむ、あひ見るべき』など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと、思ひ給へしかば、暫し懲らさむの心にて、しか改めむとも言はず、いたくつなびきて見せし間に、いといたく思ひ歎きて、果敢なくなり侍りにしかば、戯れにくくなむ覺え侍りし。ひとへに打頼みたらむ方は、さばかりにてありぬべくなむ思ひ給へ出でらるゝ。果敢なきあだ事をも、眞の大事をも、

(一) 氣取りや。後段
の木枯の女

(二) 何だかきまりわ
るく躊躇せられる
(三) 伏籠。衣服を温
め又は香を薫き染

(四) 几帳
めるに用ふ
(五) 當人

(六) 唯ちつと引籠つ
て
(七) こちらが面目を

失はぬ程度に
(八) 張り合つて

言ひ合はせたるに甲斐無からず。立田姫と言はむにもつき無からず。棚機の手にも劣るまじく、その方も具してうるせくなむ侍りし」とて、いと哀れと思ひ出でたり。中將「その棚機の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞ肖えまし。げにその立田姫の錦には、又如くものあらじ。はかなき花紅葉と言ふも、折節の色合つきなく、はかなくしからぬは、露の榮えなく消えぬる業なり。さるにより難き世ぞとは、定めかねたるぞや」と、言ひはやし給ふ。

馬「さて又、同じ頃罷り通ひし所は、人も立ち優り、心ばせ誠に故ありと見えぬべく、打詠み走り書き、搔い弾く爪音、手つき口つき、皆たどくしからず、見聞き渡り侍りき。見る目も事も無く侍りしかば、このさがな者を、打解けたる方にて、時々隠ろへ見侍りし程は、こよなく心留まり侍りき。この人亡せて後、如何はせむ、哀れながらも過ぎぬるは甲斐無くて、屢々罷り馴るゝまゝに、少し眩く、艶に好ましき事は、目につかぬ所あるに、打頼むべくも見えず。かれくゝにのみ見せ侍る程に、忍びて心かはせる人ぞありけらし。神無月の頃ほひ、月面白かりし夜、内裏より罷出侍るに、或上人來會ひて、この車に相乗りて侍れば、大納言の家に罷り泊らむとするに、この人の言ふやう、『今宵人待つらむ宿なむ、怪しく心苦しき』とて、この女の家はた避きぬ道なりければ、荒れたる崩より、池の水、影見えて、月だに宿る住處を過ぎむも流石にて、下り侍りぬかし。もとよりさる心を交せるにやありけむ、この男いたくすゞろぎて、門近き廊の簀子だつも

(一) 秋を司る女神。
染色をさす
(二) 不似合でなく
(三) 棚機姫。裁縫をさす

(四) 巧み
(五) 私
(六) 殿上人

(七) よけれぬ道。
是非通らねばなら
ない道
(八) 雲居にて相語ら

はぬ月だにも我が
宿すぎて行く時は
なし(拾遺、雜上、
伊勢)

(九) そはくして
(一〇) 細板を透し並べ
た藤

のに尻をかけて、とばかり月を見る。菊いと面白くうつろひ渡りて、風に競へる紅葉の亂れなど、哀れとげに見えたり。懐なりける笛取り出でて吹き鳴らし、『影もよし』などつゞしり歌ふ程に、能く鳴る和琴を調べととのへたりけるを、うるはしく掻き合はせたりし程、けしうはあらじかし。律の調は、女の物やはらかに掻き鳴らして、簾の内より聞えたるも、今めきたる物の聲なれば、清く澄める月に折つき無からず。男いたく感でて、簾の下に歩み來て、『庭の紅葉こそ、げに踏み分けたる跡もなけれ』など妬ます。菊を折りて、

上人『琴の音も菊も得ならぬ宿ながらつれなき人を引きや留めける

悪かめり』など言ひて、『今一聲聞きはやすべき人のある時に、手な残い給ひそ』など、いたく戯れかゝれば、女いたう聲繕ひて、

女『木枯に吹き合はすめる笛の音を引き留むべき言の葉ぞ無き

と艶き交すに、憎くなるをも知らで、又、箏の琴を盤渉調に調べて、今めかしく掻い弾きたる爪音、かど無きにはあらねど、眩き心地なむし侍りし。たゞ時々打語らふ宮仕人などの、飽くまで戯ればみ好色たるは、さても、見る限りはをかしくもありぬべし、時々にも、さる所にて忘れぬやすがと思ふ給へむには、頼もしげ無く差過いたりと心置かれて、その夜の事に事託けてこそ罷り絶えにしか。この二つの事を思ふ給へ合

- (一) 飛鳥井に、く 樂、飛鳥井) の稱。律は陽、目 もなし(古今、秋 (六) 律調。十二律中宿りはすべし、か (二) ポツリく歌ふ は陰。 下) の一
- げもよし、オケ、 (三) 倭琴。六絃で我 (五) 秋は來ぬ紅葉は (六) 河内本は「月」も (七) 支那傳來の樂器
- みもひも寒し、御 國固有のもの 宿に降りしきぬ道 (七) 支那傳來の樂器
- 林もよし (催馬) (四) 目に對する音調 踏み分けて訪ふ人 十三絃

はするに、若き時の心にだに、猶さやうに持て出でたる事は、いと怪しく頼もしげ無く覺え侍りき。今より後は、ましてさのみなむ思ふ給へらるべき。御心のまゝに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉篠の上の露などの、艶にあえかなるすきくしさのみこそ、をかしく思さるらめ。今さりとも、七年餘りの程に思し知り侍りなむ。なにがしが賤しき諫にて、好色撓めらむ女には心置かせ給へ。過して、見む人の、頑なる名をも立てつべきものなり」と誠む。中將、例のうなづく。君、少し片笑みて、さる事とは思すべかめり。何方につけても、人悪く、はしたなかりける御物語かな」とて、打笑ひおはさうす。

中將「なにがしは癡者の物語をせむ」とて、「いと忍びて見初めたりし人の、さても見つべかりしけはひなり

頭中將

—王臺

三位中將—夕顔上

(常夏の女)

しかば、長らふべきものとしも思ひ給へざりしかど、馴れ行くまゝに、哀れと覺えしかば、絶えく忘れぬものと思ふ給へしを、さばかりになれば、打頼める氣色なども見えき。頼むにつけては、恨めしと思ふ事もあらむと、心ながら覺ゆる折々も侍りしを、見知らぬやうにて、久しき跡絶をも、斯う邂逅なる人とも思ひたらず、朝夕にもてつけたらむ有様に見えて、心苦しかりしかば、頼め渡る事などもありきかし。親も無くいと心細げにて、さらばこの人こそはと、事につれて思へるさまも、らうたげなりき。斯う長閑けきに穩しくて、久しく罷らざりし頃、この見給ふる邊より、情なくうたてある事をなむ、さる便りありてかすめ言はせたりける。後にこそ聞き侍りしか。さる憂き

(二) 折りてみば落ち ぞしぬべき秋萩の 枝もたわむに置け

る白露(古今、秋 上) (三) 拙者 (四) 夫 (五) 頼ませ (六) 氣を許して (七) 私の本妻。右大

(三) 拙者 (四) 夫

(五) 頼ませ (六) 氣を許して

(七) 私の本妻。右大 臣の四の君

事やあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しく侍りしに、無下に思ひ萎れて心細かりければ、幼き者などもありしに、思ひ煩ひて、瞿麥の花を折りて遣せたりし」とて涙ぐみたり。さてその文の詞は」と問ひ給へば、異いさや、異なる事も無かりきや。

女 山がつの垣ほ荒るとも折々に憐れはかけよ撫子の露

思ひ出でしまゝに罷りたりしかば、例のうらも無きものから、いと物思ひ顔にて、荒れたる家の露滋きを眺めて、蟲の音に競へる氣色、昔物語めきて覺え侍りし。

頭 咲きまじる花は何れと分かねども猶常夏に如くものぞ無き

大和撫子をばさし置きて、まづ塵をだになど親の心を取る。

女 打拂ふ袖も露けきとこ夏に嵐吹き添ふ秋も來にけり

と、果敢なげに言ひなしてまめしく恨みたる様も見えず、涙を漏らして落してもいと恥かしく慎ましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心安くて又跡絶置き侍りし程に、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。まだ世にあらば、果敢なき世にぞさすららむ。哀れと思ひし程に、煩はしげに思ひ纏はす氣色見えましかば、斯くもあくがらさざらまし。こよなき跡絶置かずさるものに爲なして、長く見るやうも侍りなまし。かの撫子のらうたく侍りしかば、いかで尋ねむと思ひ給ふるを、今にえこそ聞きつけ侍らね。これこそ宜ひつる果敢なき例なめれ。つれなくて、辛しと思

(一) 玉鬘をいふ。後、
源の養女

(二) 隔て心
(三) 床に掛けたので、女を指す

(四) 塵をだにすゑとぞ思ふ咲きしより妹とわがぬるとこ夏の花
(古今、夏、朝恒)

ひけるをも知らで、哀れ絶えざりしも、益なき片思なりけり。今やうく忘れ行く際に、彼れ將た、えしも思ひ離れず、折々人遣りならず胸焦るゝ夕もあらむと覺え侍り。これなむ、え保つまじく頼もしげ無き方なりける。されば彼のさがな者も、思ひ出である方に忘れ難けれど、さし當りて見むには、煩はしく、よろせずば、飽きたき事もありなむや。琴の音の進めりけむかどくしさも、好色たる罪重かるべし。この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、何れと、終に思ひ定めずなりぬること世の中や。唯斯くぞとりくくに較べ苦しかるべき。この様々の善き限りを取り具し、難すべき種はひ交ぜぬ人は、何處にかはあらむ。吉祥天女を思ひ懸けむとすれば、法氣づき奇しからむこそ、又佗しかりぬべけれ」とて、皆笑ひ給ひぬ。

頭「式部が所にぞ氣色ある事はあらむ。少しづつ語り申せ」と責めらる。式「下が下の中には、何でふ事か聞召し所侍らむ」と言へど、頭の君、まめやかに遅しと責め給へば、何事を取り申さむと思ひ廻らすに、式「まだ文章の生に侍りし時、賢き女の例をなむ見給へし。かの馬頭の申し給へるやうに、公事をも言ひ合はせ、私さまの世に住まふべき心掟を、思ひ廻らさむ方も至り深く、才の際なまの博士恥かしく、すべて口明かすべくなむ侍らざりし。それは、或博士の許に、學問などし侍るとて、罷り通ひし程に、主人の女ども多かりと聞き給へて、はかなき序に言ひ寄りて侍りしを、親聞きつけて、杯持て出でて、我が二つの道論ふを聞け」となむ、聞えごち侍りしかど、をさく打解けても罷らず、かの親の心を憚りて、流石にかゝづらひ

(一) 材料
(二) 吉祥天。毘沙門
天の妹
(三) 佛臭い

(四) 進士とも言ふ。
大學の學生
(五) 生活の心得
(六) 學問の程度

(七) 主人會良媒、
置酒滿玉壺、四
座且勿飲、聽我
歌兩途富家女

易嫁、嫁早輕其
夫、貧家女難嫁、
嫁晚孝於姑、聞
君欲娶婦、娶婦

意何如(白氏文集、
秦中吟十首の内、
議婚)

侍りし程に、いと哀れに思ひ後見、寢覺の語らひにも、身の才つき、朝廷に仕う奉るべき、道々しき事を教へて、いと清げに、消息文にも假字と言ふものを書き交せず、うべくしく言ひまはし侍るに、おのづから罷り絶えて、その者を師としてなむ、僅なる腰折文作事など習ひ侍りしかば、今にその恩は忘れ侍らねど、懐かしき妻子と打頼まむに、無才の人、生悪ならむ振舞など見えむに、恥かしくなむ見え侍りし。まいて君達の御爲には、さしもはかしく、したゝかなる御後見は、何にかはせさせ給はむ。果敢なし口惜しとかつ見つゝも、唯我が心につき、宿世の引く方侍るめれば、男しもなむ、仔細無きものは侍るめる」と申せば、残りを言はせむとて、頭中等「さてくをかしかりける女かな」と賺い給ふを、心は得ながら、鼻の邊をこづきて語りなす。式「さていと久しく罷らざりしに、物の便りに立ち寄りて侍れば、常の打解け居たる方には侍らで、心疚しき物越にてなむ逢ひて侍りし。ふすぶるにやと、痴がましくも、又よき節なりとも思ひ給ふるに、この賢人將た、輕々しき物怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひ取りて恨みざりけり。聲もはやりにかて言ふ様、『月頃風病重きに堪へかねて、極熱の草藥を服して、いと臭きによりなむ、え對面賜はらぬ。目のあたりならずとも、さるべからむ雜事等は承らむ』と、いと哀れにうべくしく言ひ侍り。答へに何とかは言はれ侍らむ、唯、式「承りぬ」とて、立ち出で侍るに、さうとしくや覺えけむ、焉この香失せなむ時に立ち寄り給へ」と高やかに言ふを、聞き過さむいどほし、暫し立ち休らふべきに、將た侍らねば、

(一) 鹿爪らしく
(二) 拙劣な文
(三) 仕様のない。駄

目なものです
(四) うごめかして。
得意な様子

(五) 嬌ぶ。嫉妬する
(六) 浮々とした高調
子

(七) 感冒
(八) 暑氣拂の藥。蒜
(九) 御面會が出来ません

げにその臭ひさへ、花やかに立ち添へるもすべ無くて、逃目を使ひて、

式「さゝがにの振舞しるき夕暮にひるま過ぐせと言ふがあやなさ

如何なる事託ぞや」と言ひも果てず走り出で侍りぬるに、追ひて、

女「逢ふ事の夜をし隔てぬ中ならばひる間も何か眩からまし

流石に口疾くなどは侍りき」と、徐々と申せば、君達あさましと思ひて、虚言とて笑ひ給ふ。君達「何處のさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向ひ居たらめ。むくつけき事」と、爪弾をして、言はむ方なしと、式部をあはめ憎みて、君達「少し宜しからむ事を申せ」と責め給へど、式「これより珍らしき事は候ひなむや」と下りぬ。

馬「總べて男も女も、わる者は、僅かに知れる方の事を、残り無く見せ盡くさむと思へるこそいとほしけれ。

三史・五經の道々しき方を、明らかに曉り明さむこそ愛敬なからめ、などかは、女と言はむからに、世にある事の公、私につけて、無下に知らず至らずしもあらむ。わざと習ひ學ばねども、少しもかどあらむ人の、耳にも目にも留まる事、自然に多かるべし。さる儘には、眞字を走り書きて、さるまじきどちの女文に、半ば過ぎて書きすくめたる、あなうたて、この方のたをやかならましかばと見ゆかし。心地にはさしも思は

(一) 逃げ腰になる意
(二) わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも(古今、

戀四、墨塗歌、衣通姫(原歌下句、くものおこなひ今宵しるしも(書紀、一三))

(三) 蒜間と晝間とに掛く
(四) 寧ろおとなしく
(五) 輕蔑する
(六) 淡む。疎む

(七) 三史は、史記・漢書・後漢書、五經は、易經・書經、詩經・春秋・禮記

(九) 本人の心持にはそんなに感じずとも

ざらめど、自らおのづかこはくしき聲に讀みなされなどしつゝ、殊更ことごとびたり。これは上臈じやうらふの中にも、多かる事ぞかし。歌詠むと思へる人のやがて歌に纏まとはれ、をかしき故事かむことをも、初めより取り込みつゝ、すさまじき折々、詠みかけたるこそものしき事なれ。返しせねば情無し、えせざらむ人ははしたなからむ。さるべき節會せつごうなど、五月ごがつの節せちに急ぎ参る朝あした、何なにのあやめも思ひ鎮しづめられぬに、えならぬ根を引き掛け、九日くじふの宴うたげに、先づ難かたき詩の心を思ひ廻まわらし、暇いとまなき折せに、菊きくの露つゆをかこち寄せなどやうの、つき無なき營いとなみに合あはせ、さならでも、おのづからげに後のちに思へば、をかしくも哀あはれにもあべかりける事の、その折せにつき無く、目にも留とどまらぬなごをも、推し量おしはからず詠み出でたる、なか／＼心こころおくれて見ゆ。萬づの事に、なかはさてもと覺ゆる折せから時々思ひ分かぬばかりの心にては、よしばみ情なさけ立たざらむなむ目易めやすかるべき。すべて心に知れらむ事をも、知らず顔かほにもてなし、言はまほしからむ事をも、一つ二つの節せちは、過すすべくなむあべかりける」など言ふ。何方いづかたにより果はつとも無なくて、はて／＼は怪あやしき事どもになりて、明し給ひつ。

- (一) わざとらしい 節句や儀式等の折 (あやめ)の節句 (六) 九月九日の重陽 (七) 支那の菊水の故事など思ひ寄せて
- (二) 仰々しい の集會 (五) 文目。分別。菖 (菊)の節。觀菊宴
- (三) 朝廷で催される (四) 五月五日の端午 蒲よもぎに掛く (八) 共折ともせに不相應あはな

空蟬卷(略)

夕ゆふ 顔かほ

(一七五一十月)

源氏老乳母の病氣見舞・隣家に咲く夕顔の花・扇に認めた女の歌——夕
 顔の宿の様子を語る惟光・動く源氏の好奇心——六條御息所と源氏——
 鄙びた夕顔の宿・源氏の熱愛——恐ろしき廢院の一夜・物怪に驚はれた
 夕顔の頓死——東山に移す悲しき屍——夕顔の弔ひに東山へ・悲歎昏迷・
 病む源氏——夕顔の侍女右近の物語・初めて知る女の身の上（頭中將の
 常夏）——夕顔の法事



(二) 六條邊の御忍び歩行の頃、内裏より罷出給ふ中宿に、大貳の乳母のいたく煩ひ
 て尼になりける、訪らはむとて、五條邊なる家尋ねおはしたり。御車入るべ
 き門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせ給ひける程、むつかしげ
 なる大路の様を見渡し給へるに、この家の傍に、檜垣といふもの新しうして、
 上は、半蔀四五間ばかりあげ渡して、簾などもいと白う涼しげなるに、をかし
 き額つきの透影、數多見えて覗く。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。如
 何なる者の集へるならむと、様變りて思さる。御車もいたう寢し給へり。先驅も追はせ給はず、誰とか知ら
 むと打解け給ひて、少し差覗き給へれば、門は蔀のやうなるを押しあげたる、見入れの程なく物はかなき住
 居を、あはれに、何處かさしてと思ほしなせば、玉の臺も同じ事なり。切掛たつ物に、いと青やかなる葛の、
 心地よげに蔓ひ懸れるに、白き花ぞ、おのれ獨笑みの眉開けたる。遠方人に物申すと、獨言ち給ふを、
 御隨身つい居て、身の白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ
 咲き侍りける」と申す。げにいと小家がちに、むづかしげなる邊の、此面彼面あやしう打ちよるぼひて、む
 ねくしからぬ軒の端毎に、蔓ひ纏はれたるを、口惜しの花の契りや。一房折りて參れ」と宣へば、この

(一) 前坊の妃、六條
 御息所に源が密に
 通はれた頃

(二) 源の乳母
 (三) 大貳乳母の子。

(四) 下部だけ板にし
 て上部を吊上げる
 やうにした蔀

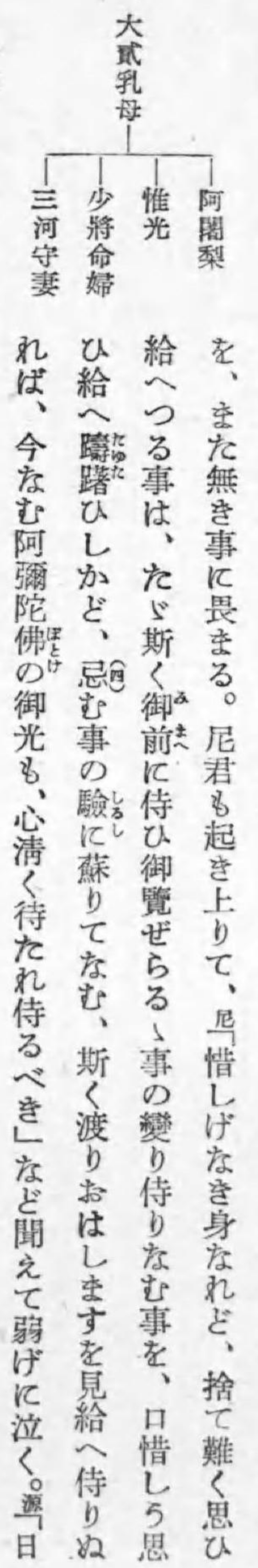
(五) 外から見た所
 (六) 世の中はいづれ
 かきしてわがなら
 む行きとまるをぞ

(七) 横板を斜に重ね
 合せた塀
 (八) うち渡す遠方人
 に物申すわれその
 所に白く咲ける
 (九) しつかりしてな
 い

は何の花ぞも (古
 今、旋頭歌)

押し開けたる門に入りて折る。流星に戯れたる遺戸口に、黄なる生絹の單袴、長く著なしたる童のをかしげなる出で来て打招く。白き扇の、いたう燦がしたるを、^(一)これに置いて参らせよ。枝も情なげなめる花を」ととて、取らせたれば、門開けて惟光の朝臣の出で来たるして奉らす。惟光「鍵を置き感はし侍りて、いと不便なるわざなりや。物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬ邊なれど、亂がはしき大路に立ちおはしまして」と、畏まり申す。

引き入れて下り給ふ。惟光が兄の阿闍梨、婚の参河守、女など渡り集ひたる程にて、斯くおはしましたる慶



頃癒り難く物せらるゝを、安からず歎き渡りつるに、かく世を離るゝさまに物し給へば、いと哀れに口惜しうなむ。命長くて、猶位高くなども見なし給へ。さてこそ九品の上にも、障りなく生まれ給はめ。この世に少し憾み残るは、わろきわざとなむ聞く」など、涙ぐみて宣ふ。片ほなるをだに、乳母などやうの思ふべき人は、浅ましう眞ほに見なすものを、ましていと面だたしう、なづさひ仕う奉りけむ身もいたはしく、辱

- (一) 女童 身はそれを渡して (五) 私の出世を
- (二) 香を染ませた (四) 尼になつて受戒 (六) 極樂淨土の往生
- (三) 出て来たのに隨 した (七) 満足でない子で

く思ほゆべかめれば、すゞろに涙がちなり。子どもはいと見苦しと思ひて、背きぬる世の去り難きやうに、自ら羣み御覽せられ給ふと、つきじろひ目くはず。君はいと哀れと思して、眞いはけなかりける程に、思ふべき人々の打捨ててものし給ひける名殘、育む人数多あるやうなりしかど、親しく思ひ睦ぶる筋は、また無くなむ思ほえし。人となりて後は、限りあれば、朝夕にしもえ見奉らず、心のまゝに訪らひ參うづる事はなけれど、猶久しう對面せぬ時は心細く覺ゆるを、さらぬ別れはななくもがなとなむ」など、細やかに語らひ給ひて、押拭ひ給へる御袖の匂ひも、いと所狭きまで薫り満ちたるに、げに世に思へば、おしなべたらぬ人の御宿世ぞかすと、尼君をもどかしと見つる子どもも、皆うち潮垂れけり。修法など、またく始むべき事など掟て宣はせて、出で給ふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覽すれば、持て馴らしたる移り香、いと染み深う懐かしうて、をかしうすさび書きたり。

女心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花
そこはかとなく書き紛らはしたるも、あてはかに故づきたれば、いと思ひの外にをかしう覺え給ふ。惟光に源「この西なる家は何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」と宣へば、例のうるさき御心とは思へども、さはえ申さで、雫この五六日此處に侍れど、病者の事を思ひ給へあつかひ侍る程に、隣の事はえ聞き侍らず」など、はしたなげに聞ゆれば、眞憎しとこそ思ひたれな。されど、この扇の尋ねべき故ありて見ゆるを、猶この邊の心知れらむ者を召して問へ」と宣へば、入りて、この宿守なる男を呼びて問ひ聞く。雫揚名介なりける人の

- (一) 祖母・母等 (三) 官名のみで職務も得分もない介(地方官)。揚名は有名無實の意
- (二) 世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子の爲(伊勢物語、業平)。さらぬ別れは避け得られぬ別れ。死別

家になむ侍りける。男は田舎に罷りて、女なむ若く事好みて、姉妹など宮仕人にて來通ふと申す。詳しく事は、下人のえ知り侍らぬにやあらむ」と聞ゆ。さらばその宮仕人なり。したり顔に物馴れて言ひつるかなと、めざましかるべき際にやあらむと思せど、さして聞えかゝれる心の、憎からず過し難きぞ、例の此の方には重からぬ御心なめりかし。御疊紙に、いたう有らぬさまに書き變へ給ひて、

源 寄りてこそそれかとも見ぬ黄昏にほのく見つる花の夕顔

ありつる御隨身して遣はず。まだ見ぬ御さまなりけれど、いと著く思ひ當てられ給へる御側目を見過さで、さし驚かしけるを、答へ給はで程経ければ、なまはしたなきに、斯くわざとめかしければ、甘えて、如何に聞えむなど言ひしろふべかめれど、めざましと思ひて隨身は参りぬ。御前の松明灰かにて、いと忍びて出で給ふ。半蔀は下してけり。隙々より見ゆる火の光、螢よりけに仄かに哀れなり。御志の所には、木立・前裁など、なべての所に似ず、いと長閑に心憎く住みなし給へり。打解けぬ御有様などの、氣色殊なるに、有りつる垣根思ほし出でらるべくもあらずかし。翌朝少し寝過し給ひて、日さし出づる程に出で給ふ。朝けの御姿は、げに人のめで聞えむもことわりなる御様なりけり。今日もこの蔀の前渡りし給ふ。來し方も過ぎ給ひけむ邊なれど、たゞはかなき一ふしに御心留まりて、如何なる人の住處ならむとは、往來に御目とまり給ひけり。

- (一) 妻
- (二) 低い身分
- (三) 目指して詠みか
- (四) 女は源をまだ見、
- (五) どうやら開が悪
- (六) もつと
- (七) 六條御息所の邸
- (八) 御息所の御機嫌
- (九) 扇の歌の件

惟光、日頃ありて参れり。眞煩ひ侍る人、猶弱げに侍れば、とかく見給へあつかひてなむ」など聞えて、近く参り寄りて聞ゆ。眞仰せられし後なむ、隣の事知りて侍る者呼びて、問はせ侍りしかど、はかしくも申し侍らず。いと忍びて五月の頃ほひより物し給ふ人なむあるべけれど、その人とは、更に家の内の人にだに知らせずとなむ申す。時々中垣の垣間見し侍るに、げに若き女どもの透影見え侍り。褶だつもの、かごとばかり引きかけて、冊く人侍るなめり。昨日夕日の残りなくさし入りて侍りしに、文書くとて居て侍りし人の、顔こそいとよく侍りしか。物思へるけはひして、在る人々も忍びて打泣くさまなどなむ、著く見え侍る」と聞ゆ。君打笑み給ひて、知らばやと思したり。覺えこそ重かるべき御身の程なれ、御齡の程、人の靡きめで聞えたるさまなど思ふには、好き給はさらむも、情なくさうくしかるべしかし。人の承け引かぬ程にてだに、猶さりぬべきあたりの事は、好ましく覺ゆるものと思ひ居り。眞若し見給へ得る事もや侍ると、はかなき序作り出でて、消息など遣はしたりき。書き馴れたる手して、口疾く返事などし侍りき。いと口惜しうはあらぬ若人どもなむ侍るめる」と聞ゆれば、眞猶言ひ寄れ。尋ね知らではさうくしかりなむ」と宣ふ。かの下が下と、人の思ひ貶しし住居なれど、その中にも、思ひの外に口惜しからぬを見つけたらむはと、珍らしう思ほすなりけり。

秋にもなりぬ。人やりならず、心盡くしに思ほし亂るゝ事どもありて、大殿には、絶間置きつゝ、怨めしうのみ思ひ聞え給へり。六條邊にも、解け難かりし御氣色をおもむけ聞え給ひて後、引返し斜ならむはいとほ

- (一) 裳の上にはく袴
- (二) 推光の心
- (三) 馬頭等が卑んだの
- (四) 雨夜の品定の時
- (五) 御息所の
- (六) 漸く驟かせ
- (七) 手の裏返して不熱心に

しかし。されど餘所なりし御心惑ひのやうに、あながちなる事はなきも、如何なる事にかと見えたり。女は、いと物を餘りなるまで思ししめたる御心さまにて、齡の程も似げなく、人の漏り聞かむにいとど、かくつき御夜がれの寝ざめく、思し萎るゝ事いと様々なり。霧のいと深き朝、いたくそゝのかされ給ひて、眠たげなる氣色に、打歎きつゝ出で給ふを、中將の御許、御格子一間上げて、見奉り送り給へと思しく、御几帳引き遣りたれば、御頭擡げて見出し給へり。前裁のいろく亂れたるを、過ぎがてに休らひ給へるさま、げに類なし。廊の方へおはするに、中將の君も御供に参る。紫苑色の折にあひたる羅の裳、鮮やかに引結ひたる腰つき、たをやかに艶きたり。見返り給ひて、隅の間の勾欄に暫し引き居ゑ給へり。打解けたらぬもてなし、髪の下端、めざましくもと見給ふ。

源「咲く花にうつるてふ名はつゝめども折らで過ぎ憂き今朝の朝顔

いかゞすべき」とて、手を捉へ給へれば、いと馴れて疾く、

中朝霧の晴間も待たぬけしきにて花に心を留めぬとぞ見る

と公事にぞ聞えなす。をかしげなる侍童の、姿好ましう殊更めきたる、指貫の裾露げげに、花の中にまじりて、朝顔折りて参る程など、繪に晝かまほしげなり。大方にうち見奉る人だに、心しめ奉らぬはなし。物の情知らぬ山賤も、花の陰には猶休らはまほしきにや。この御光を見奉る邊は、程々につけて、わが愛し

(一) 我が物とならぬうち

(二) 御息所二十四歳。

源十七歳

(三) 源が
(四) 御息所の侍女

(五) 御息所が

(六) 表は蘇枋、裏は

萌葱

(七) 御息所に譬ふ

(八) 禁忌だが

(九) 源の

と思ふ女を仕う奉らせばやと願ひ、若しは口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、賤しきにても、猶この御邊に侍はせむと、思ひ寄らぬは無かりけり。ましてさりぬべき序の御言の葉も、懐かしき御氣色を見奉る人の、少し物の心を思ひ知るは、いかゞは疎かに思ひ聞えむ。明暮打解けてしもおはせぬを、心もとなき事に思ふべかめり。

まことや、かの惟光が預りの垣間見は、いとよく案内見とりて申す。誰その人とは更にえ思ひ寄り侍らす。人にいみじく隠れ忍ぶる氣色になむ見え侍るを、徒然なるまゝに、南の半蔀ある長屋に渡り來つゝ、車の音すれば、若き者ども覗きなどすべかめるに、この主と思しきも、這ひ渡る時侍るめる。容貌なむ、仄かなれど、いとらうたげに侍る。一日先驅追ひて渡る車の侍りしを、覗きて、童女の急ぎ來て、「右近の君こそ。先づ物見給へ。中將殿こそ、これより渡り給ひぬれ」と言へば、又よろしき大人出で來て、あなかまと、手搔くものから、「いかでさは知るぞ、いで見む」とて這ひ渡る。打橋だつものを路にてなむ通ひ侍る。急ぎ來る者は、衣の裾を物に引きかけて、よろぼひ倒れて、橋よりも落ちぬべければ、「いでこの葛城の神こそ、嶮しうし置きたれ」と、むつがりて、物覗きの心も醒めぬめり。君は御直衣姿にて、御隨身共もありし。某くそれがしと敷へしは、頭中將の隨身、その小舎人童をなむ、しるしに云ひ侍りし」など聞ゆれば、眞確かにその車をぞ見まし」と宣ひて、若しかの哀れに忘れざりし人にやと思しよるも、いと知らまほしげなる御氣

(一) 主の女
(二) 人名の下に添へて、呼び掛ける敬稱。どの

(三) シイツと手眞似で制しつゝも
(四) 葛城の一言主神が役行者に命ぜら

れて、葛城山と金峰山に一夜の中に石橋をかける事を誓つたが、夜明け

て終に成功しなかつた傳説
(五) 近衛の中・少將等の召し連れる侍童

(六) 常夏の女(帯木卷、三四頁参照)

色を見て、^惟私の懸想もいとよくし置きて、案内も残る所なく見給へ置きながら、唯我がどちと知らせて物などいふ若き御許の侍るを、^虚瀕れしてなむ、謀られ罷り歩く。いとよく隠したりと思ひて、小さき子どもなどの侍るが、言過ちしつべきも言ひ紛らはして、又人無きさまを強ひて作り侍る」など語りて笑ふ。^眞尼君の訪らひにもせむ序に、垣間見せさせよ」と宣ひけり。假にても、宿れる住居の程を思ふに、これこそ、かの人の定め侮りし下の品ならめ。その中に、思ひの外にかしき事もあらば、など思ほすなりけり。惟光、聊かの事も御心に違はじと思ふに、おのれも隈なき好色心にて、いみじくたばかり惑ひ歩きつゝ、忍びておはしませ初めてけり。この程の事、くだくしければ例の漏らしつ。

女を、さしてその人と尋ね出で給はねば、我も名告りをし給はで、いとわり無う寔れ給ひつゝ、例ならず下り立ち歩き給ふは、疎かには思されぬなるべしと見れば、我が馬をば奉りて、御供に走り歩く。^眞懸想人のいと物げ無き足もとを見つづられて侍らむ時、辛くもあるべきかななど佗ぶれど、人に知られ給はぬ儘に、かの夕顔の案内せし隨身ばかり、さては顔むげに知るまじき童一人ばかりぞ率ておはしける。もし思ひ寄る氣色もやとて、隣に中寄りをだにし給はず。女もいと怪しう心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、曉の道を窺はせ、御在所見せむと尋ねれど、そこはかたなく惑はしつゝ、流石に哀れに見ではえあるまじく、この人の御心に懸りたれば、便無く輕々しき事とも思ほし返し佗びつゝ、いと屢々おはします。斯かる筋は、眞實人の亂るゝ折もあるを、いと目易くしづめ給ひて、人の咎め聞ゆべき振舞はし給はざりつるを、怪しきまで、今朝の程晝間の隔も覺束なくなど、思ひ煩はれ給へば、且はいと物狂ほしく、さまざま心留むべき事の様

- (一) 馬頭
- (二) 馬を主に譲つた爲
- (三) 惟光の家
- (四) 女のこと

にもあらずと、いみじく思ひ醒し給ふに、人のけはひ、いとあさましく柔かにおほどきて、物深く重き方は後れて、一向に若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず。いとやんごと無きにはあるまじ、何處にいと斯うしも留まる心ぞと、返す／＼思す。いと殊更めきて、御装束をも、寔れたる狩の御衣を奉り、さまざま變へ、顔をも仄見せ給はず、夜深き程に、人を鎮めて出で入りなどし給へば、昔在りけむものの變化めきて、うたて思ひ歎かるれど、人の御けはひ、將た手探にも著きわざなりければ、誰ばかりにかはあらむ、猶この好色者のし出でつる業なめりと、大夫を疑ひながら、せめてつれなく知らず顔にて、かけて思ひ寄らぬさまに、撓まず戯れ歩けば、如何なる事にかと心得難く、女方も、怪しう様違ひたる物思ひをなむしける。君も斯くうら無くたゆめて這ひ隠れなば、何處をはかりとか我も尋ねむ。假初の隠處と將た見ゆれば、何方にも移ろひ行かむ日を、何時とも知らじと思すに、追ひ惑はして斜に思ひ做しつづれば、唯斯ばかりのすさびにても過ぎぬべき事を、更にさて過してむと思されず、人目を思して隔て置き給ふ夜な／＼などは、いと忍び難く、苦しきまで思ほえ給へば、猶誰となくて二條院に迎へてむ。若し聞えありて便無かるべき事なりとも、さるべきにこそは。我が心ながら、いと斯く人に染む事は無きを、如何なる契りにかはありけむなど思ほし寄る。眞いざ、いと心安き所にて、長閑に聞えむ」など語り給へば、女なほ怪しう、斯く宣へど、世づかぬ御もてなしたれば、物恐ろしくこそあれ」と、いと若びて言へば、げにと微笑まれ給ひて、眞げにいづれか狐ならむな。たゞ謀られ給へかし」と、懐かしげに宣へば、女もいみじく靡きて、さもありぬべう思ひたり。世に無くかたはならむ事なりとも、一向に隨ふ心は、いと哀れげなる人と見給ふに、猶かの頭中將

- (一) 女
- (二) 源
- (三) 惟光
- (四) 惟光は
- (五) 安心させて
- (六) 不都合な

の常夏疑はしく、語りし心さま先づ思ひ出でられ給へど、忍ぶるやうこそはと、強ちにも問ひ出で給はず。氣色ばみてふと背き隠るべき心さまなどは無ければ、かれく跡絶置かむ折こそは、さやうに思ひ變る事もあらめ、心ながらも少しは移ろふ事あらむこそ、哀れなるべけれとさへ思しけり。

八月十五夜隈なき月影に、隙多かる板屋残り無く漏り来て、見慣らひ給はぬ住居のさまも珍らしきに、曉近くなりにけるなるべし、隣の家々あやしき賤男の聲々、目覺して、興あはれいと寒しや。今年こそ生業にも頼む所少なく、田舎の通ひも思ひかけねば、いと心細けれ。北殿こそ、聞き給へや」など言ひ交はすも聞ゆ。いと哀れなる己がじしの營みに、起き出でてそゝめき騒ぐも程無きを、女いと恥かしく思ひたり。艶だち氣色ばまむ人は、消えも入りぬべき住居の様なめりかし。されど長閑に、辛きも憂きも、傍痛き事も、思ひ入れたるさまならで、我がもてなし有様は、いとあてはかに兒めかしくて、又無くらうがはしき隣の用意なさを、如何なる事とも聞き知りたるさまならねば、なか／＼恥ぢ赫かむよりは罪免されてぞ見えける。ごほどほと、鳴る神よりも、おどろ／＼しく踏み轟かす碓の音も枕上と覺ゆる。あな耳かしがましと、これにぞ思さるゝ。何の響とも聞き入れ給はず、いと怪しう目覺しき音なひとのみ聞き給ふ。くだ／＼しき事のみ多かり。白妙の衣うつ砧の音も、微に此方彼方聞き渡され、空飛ぶ雁の聲、取り集めて忍び難き事多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開け給ひて、諸共に見出し給ふ。程なき庭にされたる吳竹、前萩の露はなほ斯かる所も同じ如きらめきたり。蟲の聲々亂りがはしく、壁の中の蟋蟀だに閑遠に聞き慣らひ給へる御耳に、さし當てたるやうに鳴き亂るゝを、なか／＼さま變へて思さるゝも、御志一つの淺からぬに、萬づの

(一) 咲きまじる花は何れとわかねどもなほ常夏にしくものぞなき(頭中將の歌、帯木卷、三四頁参照) (三) 呼び掛けの敬稱

罪免さるゝなめりかし。白き給、薄色のなよゝかなるを重ねて、花やかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、其處と取り立てて勝れたる事もなけれど、細やかにたを／＼として、物うち言ひたるけはひ、あな心苦しと、唯いとらうたく見ゆ。心ばみたる方を少し添へたらばと見給ひながら、なほ打解けて見まほしく思さるれば、眞いさ、唯この邊近き所に、心安くて明さむ。斯くてのみはいと苦しかりけり」と宣へば、夕「如何でか俄ならむ」と、いとおいらかに言ひて居たり。この世のみならぬ契りなどまで頼め給ふに、打解くる心ばへなど、怪しくやう變りて、世馴れたる人とも覺えねば、人の思はむ所もえ憚り給はで、右近を召し出でて、隨身を召させ給ひて、御車引き入れさせ給ふ。この在る人々も、斯かる御志の疎かならぬを見知れば、おぼめかしながら頼みを懸け聞えたり。明方も近うなりにけり。鶏の聲などは聞えて、御嶽精進にやあらむ、唯翁びたる聲に頼づくぞ聞ゆる。起居のけはひ堪へ難げに行ふ、いとあはれに、朝の露に異ならぬ世を、何を貪る身の祈りにかと聞き給ふに、「南無當來導師」とぞ拜むなる。興かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがり給ひて、

優婆塞が行ふ道をしるべにて來む世も深き契り違ふな

長生殿の舊き例はゆゝしくて、羽を交さむとは引きかへて、彌勒の世をぞ豫ね給ふ。行く先の御頼め、いとこちたし。

- (一) 覺束ないながら 千日の精進
- (二) 大和國金峰山に 彌勒菩薩の事。
- (三) 彌勒善薩の事。 釋尊滅後五十六億
- (四) 在俗の佛弟子男 七千萬歳を経て出
- (五) 七月七日長生殿 現し衆生を化導す
- 夜半無人私語時 在る故にいふ
- 在天願作比翼鳥 在地願爲連理枝
- (長恨歌の句)

夕先の世の契り知らるゝ身の憂さに行末かねて頼み難さよ
 斯やうの筋なども、さるは心もと無かめり。いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむ事を、女は思ひやすらひ、
 とかく宣ふ程に、俄に雲隠れて、明け行く空いとをかし。はした無き程にならぬ前にと、例の急ぎ出で給ひ
 て、軽らかに打載せ給へれば、右近ぞ乗りける。その邊近き某の院におはし著きて、預召し出づるほど、
 荒れたる門の忍草茂りて見上げられたる、譬しへ無く木暗し。霧も深く露けきに、簾をさへ上げ給へれば、
 御袖もいたう濡れにけり。還「まだ斯やうなる事を慣らはざりつるを、心盡なる事もありけるかな。
 古も斯くやは人の惑ひけむ我がまだ知らぬ東雲の道
 慣らひ給へりや」と宣ふ。女恥ぢらひて、

夕「山の端の心も知らで行く月は上の空にて影や絶えなむ

心細く」とて、物恐ろしう妻げに思ひたれば、かのさし集ひたる住居の心慣らひならむと、をかしう思す。
 御車入れさせて、西の對に御座などよそふ程、勾欄に御車引掛けて立ち給へり。右近、艶なる心地して、來
 し方の事なども、人知れず思ひ出でけり。預「いみじく經營し歩く氣色に、この御有様知り果てぬ。ほのぼ
 のと物見ゆる程に、下り給ひぬめり。假初なれど清げに設ひたり。御供に人も侍はざりけり。不便なるわ
 ざかな」とて、睦まじき下家司にて、殿にも仕う奉る者なりければ、参り寄りて、預「さるべき人召すべきに
 や」など申さすれど、還「殊更に人來まじき隠處覓めたるなり。更に心より外に漏らすな」と口固めさせ給ふ。

- (一) 河原院敷(河海抄)
- (二) 留守番
- (三) 世話をする
- (四) 愈と源に相違な
- (五) 下役の家司
- (六) 左大臣家

御粥など急ぎ参らせられたれど、取り次ぐ御まかなひ打合はず、まだ知らぬ事なる御旅寢に、息長川と契り給ふ
 より外の事なし。

日闌くる程に起き給ひて、格子手づから上げ給ふ。いといたく荒れて、人目もなく遙々と見渡されて、木立
 いと疎ましく物古りたり。け近き草木などは殊に見どころ無く、皆秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、
 いと氣疎げになりける所かな。別納の方にぞ、曹司などして、人住むべかめれど、此方は離れたり。氣
 疎くもなりにける所かな。さりとも鬼なども、我をば見免してむ」と宣ふ。顔は猶隠し給へれど、女のいと
 辛しと思ふべければ、げに斯ばかりにて隔てあらむも、事のさまに違ひたりと思して、

露の光や如何に」と宣へば、後目に見おこせて、
 夕光ありと見し夕顔の上露は黄昏時の空目なりけり

と仄かに言ふ。をかしと思しなす。げに打解け給へるさま世に無く、所柄まいてゆゝしきまで見え給ふ。還「盡
 きせず隔て給へる辛さに、顯はさじと思ひつるものを、今だに名告りし給へ。いとむくつけし」と宣へど、
 夕「海士の子なれば」とて、流石に打解けぬさま、いとあいだれたり。還「よし、これも我からなめり」と、怨

- (一) 鴉鳥のおき長川
- (二) 誤脱あるか
- (三) 離れ屋
- (四) 紐とくは顔を見
- (五) 白波の寄するな
- (六) 甘えてゐる
- (七) あまの刈る藻に
- は絶えぬとも君に
- 語らむ事つきめや
- も(萬葉、二〇、
- 馬史國人)
- 三頁「心あてに」
- の歌参照
- ぎさに世をつくす
- あまの子なれば宿
- 棲む蟲のわれから
- も定めず(新古今、
- 雑下)
- とねをこそなかめ
- 世をば恨みじ(古
- 今、戀五、藤原直
- 子朝臣)
- 玉鉾は道の意。四

み且は語らひ暮し給ふ。惟光尋ね聞えて、御菓物など参らす。右近が言はむ事、流石にいとほしければ、近くもえ侍ひ寄らす。斯くまで辿り歩き給ふをかしう、さもありぬべき有様にこそはと、推し量るにも、我がいとよく思ひ寄りぬべかりしことを、譲り聞えて、心廣さよなど、めざましうぞ思ひ居る。譬しへ無く靜かなる夕の空を眺め給ひて、奥の方は暗う物むつかしと、女の思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥し給へり。夕ばえを見交はして、女も、斯かる有様を思ひの外に怪しき心地はしながら、萬づの歎忘れて、少し打解け行く氣色、いとらうたし。つと御傍に添ひ暮して、物をいと恐ろしと思ひたる様、若う心苦し。格子疾く下し給ひて、御殿油参らせて、名残無くなりたる御有様に、猶心の中の隔殘し給へるなむ辛き」と怨み給ふ。内裏に如何に求めさせ給ふらむを、何處に尋ねらむと思し遣りて、且は怪しの心や、六條邊にも、如何に思ひ亂れ給ふらむ。怨みられむに苦しうことわりなりと、いとほしき筋は先づ思ひ出で聞え給ふ。何心も無き差し向ひをあはれと思すまゝに、餘り心深く、見る人も苦しき御有様を、少し取捨てばやとぞ、思ひ比べられ給ひける。

宵過ぐる程少し寝入り給へるに、御枕上にいとをかしげなる女居て、己がいとめでたしと見奉るをば、尋ねも思ほさで、斯く異なる事無き人を率ておはして時めかし給ふこそ、いとめざましく辛けれ」とて、この御傍の人を掻き起さむとすと見給ふ。物に驚るゝ心地して、驚き給へれば、火も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引抜きて、打置き給ひて、右近を起し給ふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて参り寄り。眞渡殿なる宿直人起して、紙燭さして参れと言へ」と宣へば、耳いかでか罷らむ。聞うて」と言へば、眞あな若

(一) 夕ばえする顔

(二) 御息所の

若し」と打笑ひ給ひて、手を叩き給へば、山彦の答ふる聲、いと疎し。人はえ聞きつけで参らぬに、この女君いみじく戦き惑ひて、如何さまにせむと思へり。汗もしとゞになりて、われかの氣色なり。吾物懼をなむわり無くせさせ給ふ御本性にて、如何に思さるゝにか」と右近も聞ゆ。いとかわくくて、晝も空をのみ見つるものを。いとほしと思して、眞われ人を起さむ。手叩けば、山彦の答ふる、いと煩し。こゝに暫し近く」とて、右近を引き寄せ給ひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開け給へれば、渡殿の火も消えにけり。風少し打ち吹きたるに、人は少なくて、侍ふ限り皆寝たり。この院の預の子の、睦まじく使ひ給ふ若き男、又上童一人、例の隨身ばかりぞありける。召せば、御答して起きたれば、眞紙燭さして参れ。隨身も弦打ちして、絶えず聲づくれと仰せよ。人離れたる所に、心解けて寝ぬるものか。惟光の朝臣の來りつらむは」と問はせ給へば、預の子「侍ひつれど、仰せ言も無し。曉に御迎へに参るべき由申してなむ罷出侍りぬる」と聞ゆ。この斯う申すものは、瀧口なりければ、弓弦いとつきんしく打ち鳴して、「火危し」と言ふく、預が曹司の方へ去ぬるなり。内裏を思し遣りて、名對面は過ぎぬらむ。瀧口の宿直奏今こそと推し量り給ふは、まだいたう更けぬにこそは。歸り入りて探り給へば、女君はさながら臥して、右近は傍に俯し臥したり。眞こは何ぞ。あな物狂ほしの物懼や。荒れたる所は、狐などやうのもの、人育さむとて、け恐ろしう思はするならむ。まろあれば、さやうの物には威されじ」とて、引き起し給ふ。耳いとうたて、亂り心地の悪しう侍れば、俯し臥して侍るなり。御前にこそ、わり無く思さるらめ」と言へば、眞そよ。など斯うは」とて搔探り

(一) 魔を拂ふ鳴弦

(二) 禁中警衛の武士

(三) 清涼殿上での宿

(四) 直の殿上人の名告

(五) 時にある

(六) 宿直の瀧口の武

(七) 士の名告。弦打ちして名告る

給ふに、息もせず。引き動かし給へど、なよ／＼として、我にもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、鬼物にけ取られぬるなめりと、せむ方無き心地し給ふ。紙燭持て参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せて、選なほ持て参れ」と宣ふ。例ならぬ事にて、御前近くもえ参らぬ慎ましさに、長押にもえ上らず。選なほ持て來や。所に従ひてこそ」と召し寄せて見給へば、たゞこの枕上に、夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそ斯かる事は聞けと、いと珍らかにむくつけけれど、先づこの人は如何になりぬるぞと思ほす心騒ぎに、身の上も知られ給はず、添ひ臥して、「やゝ」と驚かし給へど、たゞ冷えに冷え入りて、息は疾く絶え果てにけり。言はむ方なし。頼もしく如何にと言ひ觸れ給ふべき人もなし。法師などをこそは、斯かる方の頼もしきものには思すべけれど、さこそ心強がり給へど、若き御心地にて、言ふ甲斐無くなりぬるを見給ふに、遣る方無くて、つと抱きて、選吾が君生き出で給へ。いみじき目な見せ給ひそ」と宣へど、冷え入りにたれば、けはひ物疎くなり行く。右近は、唯あなむつかしと思ひける心地皆覺めて、泣き惑ふさまいといみじ。南殿の鬼の、某の大臣を脅しける例を思し出でて、心強く、選さりとも徒らに成り果て給はじ。夜の聲はおどろ／＼し。あなかま」といさめ給ひて、いと慌しきに、惘れたる心地し給ふ。この男を召して、選こゝにいと怪しう、物に魔れたる人の惱ましげなるを、只今惟光の朝臣の宿れる所に罷りて、急ぎ参るべき由言へと仰せよ、某の阿闍梨其處

(一) 宇多法皇京極御
息所と河原院御幸
の時敵左大臣の靈

(二) 崇をなした傳説
(江談抄、三)など
(三) 紫宸殿で鬼が闘

中、藤原忠平の刀
の鎧を執へたのを
忠平がその手を斬

らうとするを逃げ
去つた話(大鏡上、
太政大臣忠平)

(三) 使の者に命ぜよ
(四) 惟光の兄(四二
頁系圖参照)

にもものするほどならば、此處に來べき由忍びて言へ。かの尼君などの聞かむに、おどろ／＼しく言ふな。斯かる歩行許さぬ人なり」など、物宣ふやうなれど、胸は塞がりて、この人を空しくしなしてむ事のいみじく思さるゝに添へて、大方のむく／＼しさ譬へむ方なし。夜中も過ぎにけむかし、風のやゝ荒々しう吹きたるは。まして松の響木深く聞えて、氣色ある鳥の枯聲に鳴きたるも、梟はこれにやと覺ゆ。打思ひ廻らすに、此方彼方け遠く疎ましきに、人聲せず。などて斯く果敢なき宿りは取りつるぞと、悔しさも遣らむ方なし。右近は物も覺えず、君につと添ひ奉りて、戦き死ぬべし。又これも如何ならむと、心空にて執らへ給へり。我一人さかしき人にて、思し遣る方ぞ無きや。火は仄かに隣きて、母屋の際に立てたる屏風の上、此處彼處の隈々しく見ゆるに、物の足音ひし／＼と踏み鳴らしつゝ、後より寄り來る心地す。惟光疾く参らなむと思す。在所定めぬものにて、此處彼處尋ねける程に、夜の明くる程の久しさ、千夜を過さむ心地し給ふ。辛うじて鶏の聲遙かに聞ゆるに、命を賭けて、何の契りに斯かる目を見るらむ。忍ぶとも、世にある事隠れなくて、内裏に聞召されむことを初めて、人の思ひ言はむ事、よからぬ童べの口ずさびになりぬべきなめり。あり／＼て、痴がましき名を取るべきかなと、思し廻らす。

辛うじて惟光の朝臣参れり。夜中曉と言はず御心に隨へる者の、今宵しも侍はで、召にさへ怠りつるを、憎しと思ほすものから、召し入れて、宣ひ出でむ事のあへ無きに、ふと物も言はれ給はず。右近、大夫のけはひ聞くに、初めよりの事、打思ひ出でられて泣くを、君もえ堪へ給はで、我一人さかしがり抱き持ち給へり

(一) 惟光の母(四一
頁参照)

(二) 早く来てくれ
ばよい

(三) 今まで大した失態も見せな
かつたその果てにたうとら

けるに、この人に息を伸べ給ひてぞ、悲しき事も思されける。とばかり、いといたく、えも止めず泣き給ふ。やゝためらひて、「こゝにいと怪しき事のあるを、淺ましと言ふにも餘りてなむある。斯かる頼の事には誦經などをこそはすなれとて、その事どもせさせむ、願なども立てさせむとて、阿闍梨ものせよと言ひ遣りつるは」と宣ふに、「昨日山へ罷り上りにけり。先づいと珍らかなる事にも侍るかな。かねて、例ならず御心地の物せさせ給ふ事や侍りつらむ」と宣ふ事も無かりつとて泣き給ふさま、いとをかしげにらうたく、見奉る人もいと悲しくて、己れもよと泣きぬ。さいへど年打老成、世の中のある事も、潮染みぬる人こそ、物の折節は頼もしかりけれ、何れも若きどちにて、言はむ方も無けれど、「この院守などに聞かせむ事は、いと便無かるべし。この人一人こそ睦じうもあらめ、おのづから物言ひ漏らしつべき眷屬も立ち交りたらむ。先づこの院を出でおはしましね」と言ふ。さて、これより人少ななる所は如何でかあらむ」と宣ふ。

「げにさぞ侍らむ。かの故郷は、女房などの悲びに堪へず泣き惑ひ侍らむに、鄰繁く咎むる里人多く侍らむに、おのづから聞え侍らむを、山寺こそ、なほ斯やうの事おのづから行き交り、物紛るゝ事侍らめ」と、思ひまはして、「昔見給へし女房の尼にて侍る、東山の邊に移し奉らむ。惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者の、みづはぐみて住み侍るなり。邊は人繁きやうに侍れど、いとかがかか侍り」と聞えて、明け離るゝ程の紛れに、御車寄す。この人をえ抱き給ふまじければ、上席に押し包みて、惟光乗せ奉る。いとさゝやかにて、疎ましげも無くらうたげなり。したゝかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目昏れ惑ひて、淺ましう

- (一) 惟光
- (二) 惟光
- (三) 世故によく馴れた人
- (四) 院守
- (五) 夕顔の今までの
- (六) 見知りの
- (七) 年老いて
- (八) 閑靜

悲しと思せば、成り果てむさまを見むと思せど、「はや、御馬にて二條の院へおはしまさなむ。人騒がしくなり侍らぬ程に」とて、右近を添へて乗す。君に馬をば奉りて、我は徒歩より、括り引き上げなどして出で立つ。かつはいと怪しく覺えぬ送りなれど、御氣色のいみじきを見奉れば、身を捨てて行くに、君は物も覺え給はず、我かのさまにておはし著きたり。

「何處よりおはしますにか。惱ましげに見えさせ給ふ」など言へど、御帳の内に入り給ひて、胸をおさへて思ふに、いとみじければ、などて乗り添ひて行かざりつらむ。生き返りたらむ時、如何なる心地せむ。見捨てて行き別れにけりと辛くや思はむと、心惑ひの中にも思すに、御胸せき上ぐる心地し給ふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しく惑はれ給へば、斯く果敢なくて、我も徒らになりぬるなめりと思す。日高くなれど、起き上り給はねば、人々怪しがりて、御粥などそのかし聞ゆれど、苦しうといと心細く思さるゝに、内裏より御使あり。昨日もえ尋ね出で奉らざりしより、覺束ながらせ給ふ。大殿の君達参り給へど、頭中將ばかりを、「立ちながら此方に入り給へ」と宣ひて、御簾の内ながら宣ふ。乳母にて侍る者の、この五月の頃ほひより、重く煩ひ侍りしが、頭剃り忌む事受けなどして、その験にや、蘇りたりしを、この頃又起りて弱くなむなりにたる。今一度訪らひ見よと申したりしかば、幼きよりなづさひし者の、今はの刻に辛しと思はむと、思ひ給へて罷れりしに、その家なりける下人の病しけるが、俄にえ生き敢へで亡くなりけるを、恐ぢ憚りて、日を暮してなむ取り出で侍りけるを、聞きつけ侍りしかば、「神事なる頃は、いと不便なる事と思ふ給へ長まりて、え参らぬなり。この曉より、咳嗽病にや侍らむ、頭いと痛くて苦しう侍

- (一) なじんだ
- (二) 九月は齋月。神事多く行はれる

れば、いと無禮にて聞ゆる事」など宣ふ。中將「さらばさる由をこそ奏し侍らめ。昨夜も御遊びに、畏く見
め奉らせ給ひて、御氣色悪しく侍りき」と聞え給ひて、立ち返り、如何なる行觸にかゝらせ給ふぞや。陳
べ遣らせ給ふ事こそ、眞とも思ひ給へられぬ」と言ふに、胸打潰れ給ひて、如何に細かにはあらで、唯覺え
ぬ穢らひに觸れたる由を奏し給へ。いとこそ怠々しく侍れ」と、つれなく宣へど、心の中には、言ふ甲斐無
く悲しき事を思ふに、御心地も悩ましければ、人に目も見合はせ給はず。藏人の辨を召し寄せて、眞實に斯
かる由を奏せさせ給ふ。大殿などにも、斯かる事ありてえ参らぬ御消息など聞え給ふ。

日暮れて惟光参れり。斯かる穢らひありと宣ひて、参る人々も皆立ちながら罷出れば、人繁からず。召し寄
せて、如何にぞ。今はと見果てつや」と宣ふまゝに、袖を御顔に押し當てて泣き給ふ。惟光も泣くく、
「今は限りにこそはものし給ふめれ。長々と籠り侍らむも便無きを、明日なむ日宜しく侍れば、とかくの事、
いと尊き老僧の相知りて侍るに、言ひ語らひつけ侍りぬる」と聞ゆ。如何に添ひたりつる女は如何に」と宣へば、
惟「それなむ亦、え生くまじう侍るめ。我も後れじと惑ひ侍りて、今朝は谷にも落ち入りぬべくなむ見給へつ
る。かの故郷の人に告げ遣らむと申せど、暫し思ひ鎮めよ。事の様思ひ廻らして」となむこしらへ置き侍り
つる」と、語り聞ゆる儘に、いといみじと思して、我もいと心地悩ましく、如何なるべきにかとなむ覺ゆ
る」と宣ふ。惟「何か更に思ほし物せさせ給ふ。さるべきにこそ萬づの事侍らめ。人にも漏らさじと思ひ給ふ
れば、惟光下り立ちて、萬づは物し侍る」など申す。如何に。さ皆思ひなせど、浮びたる心のすさびに人
を徒らになしつる託言、負ひぬべきがいと辛きなり。少將の命婦などにも聞かすな。尼君まして斯様の事な
(一)穢らひに行き逢ふこと (二)申譯なき儀 (三)頭中將の弟 (四)葬儀 (五)右近 (六)右近が (七)惟光の妹

ど諫めらるゝを、心恥かしくなむ覺ゆべき」と、口固め給ふ。惟「さらば法師ばらなどにも、皆言ひなすさま
異に侍り」と聞ゆるにぞかゝり給へる。ほの聞く女房など、「怪しく何事ならむ。穢らひの由宣ひて、内裏に
も参り給はず。又斯く私語き歎き給ふ」と、仄々怪しがる。如何に事無くしなせ」と、その程の作法宣へど、
惟「何か、事々しくすべきにも侍らず」とて立つが、いと悲しく思はるれば、如何に思ふべけれど、今一
度かの亡骸を見ざらむが、いといふせかるべきを、馬にてもせむ」と宣ふを、いと怠々しき事とは思へど、
惟「さ思されむは如何にせむ。早おはしまして、夜更けぬ前に歸らせおはしませ」と申せば、この頃の御宴に設け
給へる狩の御装束著替へなどして出で給ふ。御心地搔き昏し、いみじく堪へ難ければ、斯く怪しき路に出で
立ちても、危かりし物懲に、如何にせむと思し煩へど、なほ悲しさの遣る方無く、たゞ今の骸を見では、又
いつの世にか、ありし容貌をも見むと思し念じて、例の大夫・隨身を具して出で給ふ。路遠く覺ゆ。十七日
の月さし出でて、河原の程、御前の火も仄かなるに、鳥邊野の方など見遣りたる程など、物むつかしきも、
何とも覺え給はず、搔き亂る心地し給ひて、おはし著きぬ。邊さへ凄きに、板屋の傍に堂建てて行へる尼
の住居、いとあはれなり。御燈明の影仄かに透きて見ゆ。その屋には、女一人泣く聲のみして、外の方に、
法師ばらの二三人物話しつゝ、わざとの聲立てぬ念佛ぞする。寺々の初夜も皆行ひ果てて、いとしめやかな
り。清水の方ぞ、光多く見えて人のけはひも繁かりける。この尼君の子なる大徳の、聲尊くて經うち讀みた
るに、涙残りなく思はる。入り給へれば、火取り背けて、右近は屏風隔てて臥したり。如何に佗しからむと

- (一) 頼つて安心され
- (二) 以ての外
- (三) 御微行
- (四) 昨夜の
- (五) 右近
- (六) 午後十時過から十
二時過までの勤行

見給ふ。恐ろしき氣も覺えず、いとらうたげなる様して、まだいさゝか變りたる所無し。手を執らへて、馬我に今一度聲をだに聞かせ給へ。如何なる昔の契りにかありけむ、暫しの程に心を盡くして哀れに覺えしを、打捨てて感はし給ふが「いみじき事」と、聲も惜しまず泣き給ふ事限り無し。大徳達も誰とは知らぬに、怪しと思ひて皆涙落しけり。右近をば、馬「いざ二條院へ」と宣へど、五年頃、幼く侍りしより、片時立離れ奉らず馴れ聞えつる人に、俄に別れ奉りて、何處にか歸り侍らむ。如何に成り給ひにきとか人にも言ひ侍らむ。悲しき事をばさるものにて、人に言ひ騒がれ侍らむが「いみじき事」と言ひて、泣き感ひて、馬煙にたぐひて慕ひ参りなむ」と言ふ。馬「理ことわりなれど、さなむ世の中はある。別れといふものの悲しからぬは無し。とあるも斯かるも、同じ命の限りあるものになむある。思ひ慰めて、我を頼め」と、宣ひこしらへても、馬「斯く言ふ我が身こそは、生き留まるまじき心地すれ」と宣ふも頼もしげ無しや。惟光「夜は明方になり侍りぬらむ。はや歸らせ給ひなむ」と聞ゆれば、願みのみせられて、胸もつと塞がりて出で給ふ。路いと露けきに、いとどしき朝霧に、何處ともなく感ふ心地し給ふ。ありしながら打臥したりつるさま、打交はし給へりし、我が紅くれなるの御衣かんせの著られたりつるなど、如何なりけむ契りにかと、道すがら思さる。御馬にも、はかしく乗り給ふまじき御様なれば、又惟光添ひ扶けておはしませするに、堤の程にて馬よりすべり下りて、いみじく御心地感ひければ、馬「斯かる路の空にて、はふれぬべきにやあらむ。更にい行き著くまじき心地なむする」と宣ふに、惟光も心地感ひて、我がはかしくば、さ宣ふとも、斯かる道に率て出で奉るべきかはと思ふに、いと心慌しければ、川の水にて手を洗ひて、清水の觀音を念じ奉りても、術無く思ひ感ふ。君も強ひて

* 行倒れになる

御心を起して、心の中に佛を念じ給ひて、又とかく扶けられ給ひてなむ、二條院へ歸り給ひける。怪しう夜深き御歩おんあゆみきを、人々、「見苦しき業かな、この頃例よりも靜心しづこころなき御忍歩おんしのあゆみきの打頻うちしきりる中にも、昨日の御氣色のいと惱ましう思したりしには、如何で斯く迎り歩むかひあゆみき給ふらむ」と歎き合へり。誠に、臥し給ひぬる儘に、いといたく苦しがり給ひて、二三日になりぬるに、むげに弱る様にし給ふ。内裏うちにも、聞召し歎く事限りなし。御祈り方々かたがたに隙なくのゝしる。祭・祓はら・修法しゆぽうなど、言ひ盡くすべくもあらず。世たぐひに類なくゆゝしき御有様なれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人の騒ぎなり。苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など近く賜はりて侍はせ給ふ。惟光、心地も騒ぎ感へど、思ひのどめて、この人のたつき無しと思ひたるを、もてなし助けつゝ侍はす。君は、いさゝか隙ありて思さるゝ時は、召し出でて使ひなどし給へば、程なく交らひ著きたり。服いと黒うして、容貌かたちなどよからねど、かたはに見苦しからぬ若人わかうとなり。馬「怪しう短かりける御契りに引かされて、我も世にえあるまじきなめり。年頃の頼み失ひて心細く思ふらむ慰めにも、若し存命ぞんめいへば、萬づにはぐくまむとこそ思ひしか。程も無く又立ち添ひぬべきが、口惜しくもあるべきかな」と、忍びやかに宣ひて、弱げに泣き給へば、言ふ甲斐なき事をば措きて、いみじう惜しと思ひ聞ゆ。殿の内の人、足を空に思ひ感ふ。内裏より御使、雨の脚よりもけに繁し。思し歎きおはしますを聞き給ふに、いと辱けて、せめて強く思しなる。大殿おほいどのもいみじく經營けいぎし給ひて、日々に渡り給ひつゝ、様々さまざまの事をせさせ給ふ驗しるしにや、廿餘日はつかあまりいと重く煩ひ給へれど、異なる名殘なごり残らず、おこたりさまに見え給ふ。穢らひ忌み給ひしも、一つに満ちぬる夜なれば、覺束ながらせ給ふ御心おんこころわり無くて、内裏の御宿

(一) 右近の頼りなく思つてゐるのを

(二) もつと

(三) つとめて

(四) 左大臣

(五) 父帝の

(六) 桐壺

直所に参り給ひなす。大殿、我が御車にて迎へ奉り給ひて、御物忌何やかやと、むつかしう慎ませ奉り給ふ。我にもあらず、あらぬ世に返りたるやうに、暫しは覚え給ふ。

九月二十日の程にぞ、おこたり果て給ひて、いといたう面瘦せ給へれど、なか／＼いみじう艶かしうて、ながめがちに音のみ泣き給ふ。見奉り咎むる人もありて、御物怪なめりなど言ふもあり。右近を召し出でて、長閑やかなる夕暮に、物語などし給ひて、猶いとなむ怪しき。などてその人と知られじとは、隠し給へりしぞ。眞に蟹の子なりとも、さばかりに思ふを知らで隔て給ひしかばなむ、辛かりし」と宣へば、有などてか深く隠し聞え給ふ事は侍らむ。いつの程にてかは、何ならぬ御名告を聞え給はむ。初めより怪しう、覚えぬ様なりし御事なれば、「現とも覚えすなむある」と宣ひて、御名隠しも、さばかりにこそはと聞え給ひながら、等閑にこそ紛らはし給ふらめとなむ、憂き事に思したりし」と聞ゆれば、あゝ無かりける心競どもかな。我は然隔つる心も無かりき。たゞ斯様に人に免されぬ振舞をなむ、まだ習はぬ事なる。内裏に諫め宣はするを初め、慎む事多かる身にて、果敢なく人に戯言を言ふも、所狭う、取りなし煩き身の有様になむあるを、果敢なかりし夕より、怪しう心に懸りて、強ちに見奉りしも、斯かるべき契りにこそは物し給ひけめと、思ふも哀れになむ、又打返し辛う覺ゆる。斯う長かるまじきにては、などさしも心に染みて哀れと覺え給ひけむ。尙委しう語れ。今は何事を隠すべきぞ。七日々々の佛書かせても、誰が爲とか、心の中にも思はむ」と宣へば、有何かは隔て聞えさせ侍らむ。自ら忍び過し給ひし事を、亡き御後に、口さが無くやはと思ひ給

(一) 多分源氏君とは推察されるのだけれどと

(二) 賤しい自分故にいゝ加減に

(三) つまらぬ根くらべ
(四) 名も素性も知らずしては

ふるばかりになむ。親達は早う亡せ給ひにき。三位中將となむ聞えし。いとらうたきものに思ひ聞え給へりしかど、我が身の程の心許無さを思すめりしに、命さへ堪へ給はずなりにし後、果敢なき物の便りにて、頭中將まだ少將にもし給ひし時、見初め奉らせ給ひて、三年許は志あるさまに通ひ給ひしを、去年の秋の頃、かの右の大臣殿より、いと恐ろしき事の聞えまうで来しに、物懼をわりなくし給ひし御心に、せむ方無う思し怖ぢて、西の京に、御乳母の住み侍る所になむ、這ひ隠れ給へりし。それもいと見苦しきに住み佗び給ひて、山里に移るひなむと思したりしを、今年よりは塞がりたる方に侍りければ、違ふとて、怪しき所に物し給ひしを、見顯はされ奉りぬる事と思し歎くめりし。世の人に似ず物慎みをし給ひて、人に

三位中將
夕類
玉堂
頭中將

物思ふ氣色を見えむを、恥かしきものにし給ひて、つれなくのみもてなしてこそ、御覽せられ奉り給ふめりしか」と語り出づるに、さればよと思し合はせて、愈々哀れも増りぬ。幼き人惑はしたりと、中將の憂へしは、さる人や」と問ひ給ふ。有然、一昨年春物し給へりし。女にていとらうたげになむ」と聞ゆ。遂に何處にぞ。人に然とは知らせで、我に得させよ。迹果敢なくいみじと思ふ御形見に、いと嬉しかるべくなむ」と宣ふ。かの中將にも傳ふべけれど、言ふ甲斐なき託言負ひなむ。とさま斯うさまにつけて、はぐくまむに咎あるまじきを、そのあらむ乳母などにも異様に言ひなして物せよかし」など語らひ給ふ。有さらばいと嬉しうなむ侍るべき。かの西の京にて生ひ出で給はむは、心苦しうなむ。はか／＼しく扱ふ人無しとて、彼處になむ」と聞ゆ。夕暮の静かなるに、空の氣色いと哀れに、御前の前栽枯々に、蟲の音も鳴き噎れて、紅葉のやう／＼色づく程、繪に畫きたる様に面白きを見

(一) 頭中將の本妻四君方(帯木巻、三三頁参照)

(二) 方違する

(三) 後の玉堂君

渡して、心より外にをかしき交らひかなと、かの夕顔の宿りを思ひ出づるも恥かし。竹の中に家鶴といふ鳥のふつゝかに鳴くを聞き給ひて、彼の在りし院に、この鳥の鳴きしを、いと恐ろしと思ひたりしさまの、面影にらうたく思ほし出でらるれば、三年は幾つにか物し給ひし。怪しう、世の人に似ずあえかに見え給ひしも、斯く長かるまじくてなりけり」ど宣ふ。有十九にやなり給ひけむ。右近は、亡くなりける御乳母の棄て置きて侍りければ、三位の君のらうたがり給ひて、かの御邊去らず、生ふし立て給ひしを思ひ給へ出づれば、如何でか世に侍らむとすらむ。いとしも人にと悔しうなむ。物果敢なげに物し給ひし人の御心を、頼もしき人にて、年頃馴ひ侍りける事」と聞ゆ。果敢なびたるこそ女はらうたけれ。賢く人に靡かぬ、いと心づき無きわざなり。自らはかくしくよくかならぬ心習ひに、女は唯柔かにて、取り外しては、人に欺かれぬべきが、流石に物慎みし、見む人の心には従はむなむ哀れにて、我が心の儘に取り直して見むに、懐かしく覺ゆべき」など宣へば、有この方の御好みには、持て離れ給はざりけりと、思ひ給ふるにも、口惜しく侍るわざかな」とて泣く。空の打曇りて、風冷やかなるに、いといたくうちながめ給ひて、

源見し人の烟を雲と眺むれば夕の空も陸まじきかな

と獨言ち給へど、えさし答も聞えず、斯様にておはせましかばと思ふにも、胸のみ塞がりて覺ゆ。耳聾しかりし砧の音を、思し出づるさへ戀しくて、正に長き夜」と打誦じて臥し給へり。

かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事削がず、装束より初めて、さるべきものども細かに、誦經

- (一) 夕顔が
- (二) 思ふとていとこそ人に馴れざらめしかならひてぞみねば戀しき(拾遺、戀四)
- (三) 夕顔の父
- (四) 自分が
- (五) 強くない
- (六) 夫
- (七) 八月九月正長夜、千聲萬聲無止時(白氏文集、聞夜砧)

などせさせ給ふ。經、佛の飾まで疎かならず。惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、になうしけり。御文の師にて陸まじく思す文章博士召して、願文作らせ給ふ。その人と無くて、哀れと思ひし人の果敢なき様になりたるを、阿彌陀佛に譲り聞ゆる由、哀れげに書き出で給へれば、唯斯くながら、加ふべき事侍らざめり」と申す。忍び給へれど、御涙も零れて、いみじく思したれば、何人ならむ。その人とは聞えも無くて、斯う思し歎かすばかりなりけむ宿世の高さよ」と言ひけり。忍びて調ぜさせ給へりける装束の袴を取り寄せ給ひて、

源泣くくも今日は我が結ふ下紐をいづれの世にか解けて見るべき

この程までは漂ふなるを、何れの道に定まりて赴くらむと、思ほし遣りつゝ、念誦をいと哀れにし給ふ。頭中將を見給ふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひ立つ有様、聞かせまほしけれど、託言に懼ぢて打出で給はず。

かの夕顔の宿りには、何方にと思ひ惑へど、その儘にえ尋ね聞えず、右近だに訪れねば、怪しと思ひ歎き合へり。確かならねど、けはひをさばかりにやと私語きしかば、惟光を託ちけれど、いと懸離れ、氣色なく言ひなして、猶同じ如好き歩きければ、いと夢の心地して、若し受領の子どものすきくしきが、頭の君に懼ぢ聞えて、やがて率て下りけるにやとぞ思ひ寄りける。この家主ぞ、西の京の乳母の女なりける。三人その子はありて、右近は別人なりければ、思ひ隔てて御有様を聞かせぬなりけりと泣き戀ひけり。右近將た、

- (一) 源が
- (二) 誰と明記せずに
- (三) 打解けて再び夕顔と
- (四) 四十九日までは
- (五) 中將の怨み言
- (六) 事情を推するに惟光が手引をしたらしい

疊かさねしく言ひ騒がれむを思ひて、君も今更に漏らさじと忍び給へば、若君わかきみの上をだにえ聞かず、淺ましく行方無くて過ぎ行く。君は夢にだに見ばやと思し渡るに、この法事し給ひて又またの夜、仄うすかにかの在りし院いんながら、添つひたりし女のさまも同じ様ようにて見えければ、荒れたりし所に住みけむ鬼物おにものの我に見入れけむ便りに、斯ごとくなりぬる事と、思し出づるにもゆゝしくなむ。

(一) 玉鬘

(二) 翌夜

いとかく通れ難き宿世の程を、女君はいみじう心憂く口惜しう思ししみて、ありく／＼て今更に、若々しく似げなき事を、侍ふ人々の思ふらむ程も、死ぬばかりわりなく恥かしう、且は人の物言ひも隠れなき世に、あはつけく軽々しき名や漏り出でむと、とかく思し亂れつゝ、唯たけき事とは、御涙に昏れ惑ひて、打解けぬ御氣色を、心苦しう見給ひて、おろかならず契り慰め給ふ事多かるべし。いとどしき春の夜のならひ、いと果敢なくて、明方近くなりぬるに、入方の月いと心細く霞みたり。

源「かはすまも果敢なき夢の手枕に名残霞める春の夜の月
いかゞ御覽する」と聞え給へば、

御息所 おぼろげの身の憂さならば春の夜の霞める月も共に見ましを

——本居宣長 手枕——

若わか

紫むらさき

(一八 三月一巻)

癡病に煩ふ源氏加持の爲北山へ・明石入道の女の噂——小柴垣の垣間見・
 若草を育む祖母尼君——若草の養育を望む源氏・あやぶむ尼君——源氏
 歸邸・打解けぬ葵上——源氏病尼君訪問・紫の行末を託する尼君——尼
 君逝去・幼き人を慰めて荒邸に明かす一夜——父兵部卿宮紫養育の意向・
 密かに紫を迎へ取る二條院——後の親に馴れ睦ぶ若紫



癡病に煩ひ給ひて萬づに呪ひ、加持などせさせ給へど、驗無くて數多度起り給ひければ、或人「北山になむ、某寺といふ所に、賢き行人侍る。去年の夏も世に起りて、人々呪ひ煩ひしを、やがてとどむる類數多侍りき。しゝこらかしつる時はうたて侍るを、疾くこそ試みさせ給はめ」など聞ゆれば、召に遣はしたるに、眞、古い屈まりて、室の外にも罷出ず」と申したれば、眞如何はせむ、

忍びて物せむ」と宣ひて、御供に睦まじき四五人許して、まだ曉におはす。稍深う入る所なりけり。三月の晦日なれば、京の花盛りは皆過ぎにけり。山の櫻はまだ盛りにて、入りもておはする儘に、霞のたゝずまひもをかしろ見ゆれば、斯かる有様も慣らひ給はず、所狹き御身にて、珍らしう思されけり。

寺のさまもいと哀れなり。峯高く、深き巖の中にぞ、聖入り居たりける。上り給ひて、誰とも知らせ給はず、いといたう寔れ給へれど、しるき御様なれば、眞あな長や。一日召し侍りしにやおはしますらむ。今はこの世の事を思ひ給へねば、驗方の行ひも棄て忘れて侍るを、如何でか斯うおはしましつらむ」と驚き騒ぎて、打笑みつゝ見奉る。いと尊き大徳なりけり。さるべき物作りてすかせ奉る。加持など参る程、日高くさし上りぬ。少し立ち出でつゝ見渡し給へば、高き所にて、此處彼處僧坊ども露に見下さる。只この九折の下に、同じ小柴なれど、麗しうし渡して、清げなる屋・廊など續けて、木立いとよしあるは、眞何人の住むにか」と問ひ給へば、御供なる人「これなむ、某僧都の、この二年籠り侍る坊に侍るなる」眞心恥かしき人住むなる所にこそあなれ。怪しうも餘り寔しけるかな。聞きもこそすれ」など宣ふ。清げなる重など數多出で來

(一) 眞言の呪法

(二) こじらした時は

(三) 護符など

(四) 飲ませ

て、閻伽奉り、花折りなどするも露に見ゆ。供人「彼處に女こそ有りけれ。僧都はよもさ様には居る給はじを、如何なる人ならむ」と口々言ふ。下りて覗くもあり。をかしげなる女子ども、若き人、童女なむ見ゆると言ふ。

君は行ひし給ひつゝ、日たくる儘に、如何ならむと思したるを、供人「とかう紛らはさせ給ひて、思ほし入れぬなむよく侍る」と聞ゆれば、後の山に立ち出でて、京の方を見給ふ。遙かに霞み渡りて、四方の梢そこはかと無う烟り渡れる程、雲繪にいとよくも似たるかな。斯かる所に住む人、心に思ひ残す事はあらずかし」と宣へば、供人「これはいと浅く侍り、他の國などに侍る海山の有様などを御覽せさせて侍らば、如何に御繪いみじう勝らせ給はむ。富士の山、某の嶽」など語り聞ゆるもあり。又西の國の面白き浦々、磯の上を言ひ續くるも有りて、萬づに紛はし聞ゆ。良清「近き所には、播磨の明石の浦こそ猶殊に侍れ。何の至り深き隈は無けれど、唯海の面を見渡したる程なむ、怪しく他所に似ずゆほびかなる所に侍る。かの國の前の守、新發意の女かしづきたる家、いといたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世の僻者にて、交らひもせず、近衛の中將を捨てて、申し賜はれりける司なれど、かの國の人にも少し侮られて、「何の面目にてか又都にも還らむ」と言ひて、頭もおろし侍りにけるを、少し奥まりたる山住みもせで、さる海面に出で居たる、僻々しきやうなれど、げにかの國の内にも、さも人の籠り居ぬべき所々はありながら、深き里は人離れ心凄く、若き妻子の思ひ佗びぬべきにより、且は心を遣れる住居に

大臣—明石入道
北方—明石上
按察大納言—桐壺更衣
北方

(一) 地方 (二) おちついた感じの (三) 新に僧になつた人。明石入道 (四) たいしたもの (五) 出世も

なむ侍る。先つ頃罷り下りて侍りし序に、有様見給へに寄りて侍りしかば、京にてこそ所得ぬやうなりけれ、そこら遙かに嚴めしう占めて造れる様、さは言へど、國の司にて爲置きける事なれば、残りの齡豊かに經べき心構へも、になくしたりけり。後の世の勤もいとよくして、なか／＼法師まさりしたる人になむ侍りける」と申せば、更さてその女は」と問ひ給ふ。鳥けしうはあらず、容貌心ばせなど侍るなり。代々の國の司など、用意殊にして、さる心ばへ見すなれど、更に承け引かず。「我が身の斯く徒らに沈めるだにあるを、この一人にこそあれ。思ふさま異なり。若し我に後れてその志遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と、常に遺言し置きて侍るなる」と聞ゆれば、君もをかしと聞き給ふ。人々「海龍王の后になるべきいつき娘ななり。心高き苦しや」とて笑ふ。斯く言ふは、播磨の守の子の、藏人より今年爵得たるなりけり。供人いと好きたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらむかし。さて竹み寄るならむ」と言ひ合へり。供人「いでや、さいふとも田舎びたらむ。幼くよりさる所に生ひ出でて、古めいたる親にのみ従ひたらむは」「母こそ故あるべけれ。良き若人・童女など、都のやんごとなき所々より、類に觸れて尋ね取りて、眩くこそもてなすなれ。情なき人に成りて行かば、さて心安くてしも、え置きたらじをや」など言ふもあり。君は、「何心ありて海の底まで深く思ひ入るらむ。底のみるめも物難かしう」など宣ひて、たゞならず思ほしたり。斯様にても、なべてならずもて僻みたる事好み給ふ御心なれば、御耳留まらむをやと見奉る。供人「暮れ

(一) 不遇 (二) 僧になつて却つて立派になつた

(三) 求婚の意のあること (四) 望をかけてゐるのは

(五) 源良清 (六) 紋爵(從五位下) した

(七) 良清は (八) 入道は

(九) 他人が見ても。見る目と海松布とに掛く

かゝりぬれど、起らせ給はずなりぬるにこそはあめれ。早歸らせ給ひなむ」とあるを、大徳、「御物怪など加はれるさまにおはしましけるを、今宵は猶靜かに加持など参りて、出でさせ給へ」と申す。さもある事と皆人申す。君も、斯かる旅寝も慣らひ給はねば、流石にをかしくて、「さらば曉に」と宣ふ。

日もいと長きにつれ／＼なれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は返し給ひて、惟光ばかり御供にて、覗き給へば、たゞこの西面にしも、持佛据え奉りて、行ふ尼なりけり。簾少し上げて花奉るめり。中の柱に寄り居て、脇息の上に經を置きて、いと惱ましげに讀み居たる尼君、ただ人と見えす。四十餘ばかりにて、いと白くあてに瘦せたれど、頬つきふくらかに、まみの程、髪的美しげに削がれたる末も、なか／＼長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見給ふ。清げなる大人二人ばかり、さては童女ぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの整れたる著て、走り來たる女子、數多見えつる兒どもに似るべくもあらず、いみじう生ひ先見えて、美しげなる容貌なり。髪は扇を廣げたるやうにゆらく／＼として、顔はいと赤く擦りなして立てり。尼「何事ぞや。童女と腹立ち給へるか」とて、尼君の見上げたるに、少し覺えたる所あれば、子なめりと見給ふ。雀の子を犬君が逃しつる。薰籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。この居たる大人、「例の心無し、斯かるわざをして叱まるゝこそ、いと心づき無けれ。何方へか罷りぬる。いとをかしくやう／＼なりつるものを。烏などもこそ見つけくれ」とて、立ちて行く。髪ゆるらかにいと長く、目易き人なり。少納言の乳母とぞ人い

(一) 山吹襲。即ち花山
吹。表薄朽葉、裏黃

(二) 紫上
(三) 泣いて

(四) 喧嘩した
(五) 似た

(六) 女童の名
(七) 雀は

ふめるは、この子の後見なるべし。尼君、「いであな幼や。いふ甲斐なう物し給ふかな。おのが斯く、今日明日になりぬる命をば、何とも思したらで、雀慕ひ給ふ程よ。罪得る事ぞと常に聞ゆるを。心憂く」とて、尼「此方や」と言へば、つゐるたり。頬つきいとらうたげにて、眉の邊打けぶり、幼稚く掻遣りたる額つき、髪ざし、いみじう美し。ねび行かむさまゆかしき人かなと目留まり給ふ。尼君髪を搔撫でつゝ、尼「梳る事をもうるさがり給へど、をかしの御髪や。いと果敢なう物し給ふこそ、哀れに後めたけれ。斯ばかりになれば、いと斯からぬ人もあるものを。故姫君は十二にて殿に後れ給ひし程、いみじう物は思ひ知り給へりしぞかし。只今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ」とて、いみじう泣くを見給ふも、すゞろに悲し。幼心地にも、流石にうちまもりて、伏目になりて俯したるに、零れかゝりたる髪、つや／＼とめでたう見ゆ。尼「生ひ立たむ在所も知らぬ若草を後らす露ぞ消えむ空なきまた居たる大人、げにと打泣きて、

大人 初草の生ひ行く末も知らぬ間に如何でか露の消えむとすらむ
と聞ゆる程に、僧部彼方より來て、僧部「此方は顯にや侍らむ。今日しも端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中將の、瘡病まじなひに物し給ひけるを、只今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び給ひければ、え知り侍らで、此處に侍りながら、御訪ひにも参うでざりける」と宣へば、尼「あないみじや。いと怪し

(一) 子供つぼくたわ
(二) 尼の娘、紫の母
(三) 父按察大納言

(四) うら若みねよぼ
に見ゆる若草をひ
との結ばむ事をし
ぞ思ふ(伊勢物語)

(五) 少納言の乳母と
は別の今一人の女
房

(六) 初草のなど珍ら
しき言の葉ぞうら
なく物と思ひける
かな(伊勢物語)

(七) 生先長く見届け
るまで長生なされ
ねばいけませぬ

きさまを人や見つらむ」とて簾下しつ。僧「この世にのゝしり給ふ光源氏、斯かる序に見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の愁忘れ、齡延ぶる人の御有様なり。いで御消息聞えむ」とて立つ音すれば、歸り給ひぬ。あはれなる人を見つるかな。斯かれば此の好色者どもは、斯かる歩行をのみして、よくさるまじき人を見付くるなりけり。邂逅に立ち出づるだに、斯く思ひの外なる事を見るよと、をかしろ思す。さてもいと美しかりつる兒かな。何人ならむ。明暮の慰めにも見ばやと思ふ心、深う附きぬ。

打臥し給へるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。程なき所なれば、君もやがて聞き給ふ。僧「過りおはしましける由、只今なむ人申すに、驚きながら侍ふべきを、某この寺に籠り侍るとは知召しながら、忍びさせ給へるを、愁はしく思ひ給へてなむ。草の御席もこの坊にこそ設け侍るべけれ。いと本意なき事」と申し給へり。僧「いぬる十餘日の程より、瘧病に煩ひ侍るを、度重なりて堪へ難う侍れば、人の教への儘に、俄に尋ね入り侍りつれど、斯う様なる人の験顯はさぬ時、はしたなかるべきも、たゞなるよりは、いとほしう思ひ給へ慎みてなむ、いたう忍び侍りつる。今其方にも」と宣へり。即ち僧都参り給へり。法師なれど、いと心恥かしく、人柄もやんごとなく世に思はれ給へる人なれば、輕々しき御有様を、はしたなう思す。斯く籠れる程の御物語など聞え給ひて、僧「同じ柴の庵なれど、少し涼しき水の流も御覽せさせむ」と、切に聞え給へば、かのまだ見ぬ人々に、事々しう言ひ聞かせつるを、慎ましう思せど、哀れなりつる有様もいぶかしうておはしぬ。げにいと心殊に由ありて、同じ木草をも植多なし給へり。月も無き頃なれば、遣水に篝火點し、燈籠などにも参りたり。南面いと清げにしづらひ給へり。空薫物心憎く薫り出で、名香の香など匂ひ満

(一) 旅の御宿

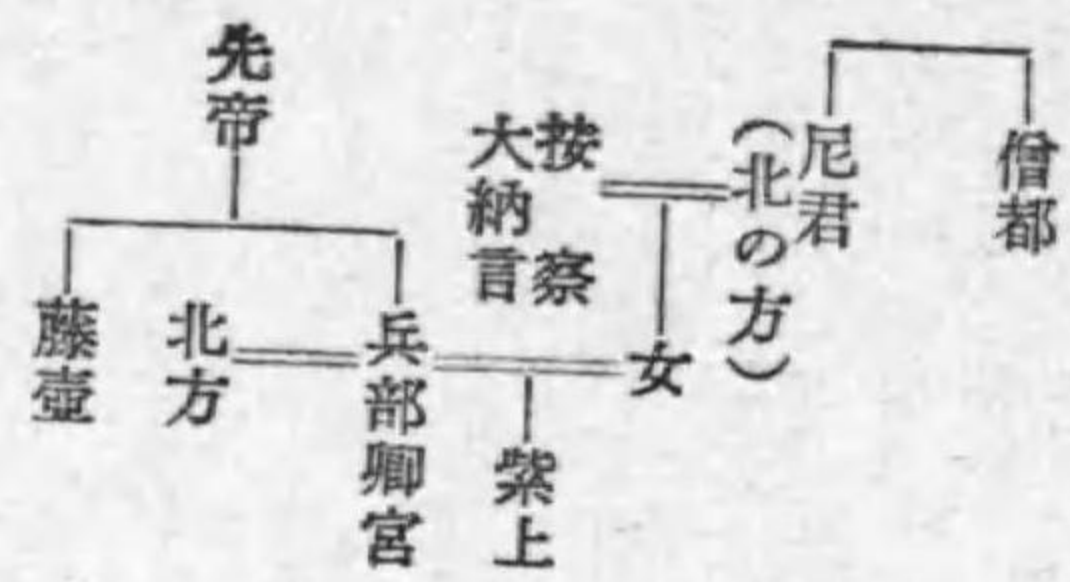
(二) 有名な験徳の

(三) 却つて一層

(四) 源は自分の

(五) 知りたくて

(六) 佛前に焚く香



ちたるに、君の御追風いと異なれば、内の人々も心遣ひすべかめり。僧都、世の常なき御物語、後の世の事など聞え知らせ思ふ。後の世のいみじかるべきを思し續けて、斯様なる住居もせまほしう覺え給ふものから、晝の面影心に懸りて戀しければ、僧「こゝに物し給ふは誰にか。尋ね聞えまほしき夢を見給へしかな。今日なむ思ひ合はせつる」と聞え給へば、打笑ひて、僧「うちつけなる御夢語にぞ侍るなる。尋ねさせ給ひても、御心劣りせさせ給ひぬべし。故按察大納言は、世に亡くて久しくなり侍りぬれば、え知しめさじかし。その北の方なむ、某が妹に侍る。かの按察遊れて後、世を背きて侍るが、この頃、煩ふ事侍るにより、斯く京にも罷出ねば、頼もし所に籠りて、物し侍るなり」と聞え給ふ。僧「かの大納言の御女ものし給ふと聞き給へしは。すきくしき方にはあらで、眞實に聞ゆるなり」と、推しあてに宣へば、僧「女唯一人侍りし、亡せてこの十餘年にやなり侍りぬらむ。故大納言は、内裏に奉らむなど、畏ういつき侍りしを、その本意の如くも物し侍らで、過ぎ侍りにしかば、唯この尼君一人持て扱ひ侍りし程に、如何なる人の仕業にか、兵部卿の宮なむ、忍びて語らひつき給へりけるを、もとの北の方、やんごとなくなどして、安からぬ事多くて、明暮物を思ひてなむ、亡くなり侍りにし。物思ひに病づくものと、目に近く見給へし」など申し給ふ。さらばその子なりけりと思し合はせつ。人の程もあてにかしう、なか／＼のさかしら心なく、打語らひて、心の儘に教へ生ふし立てて見ばやと思ほす。僧「いと哀れに物し給ふ事かな。それは留め給ふ形見もなきか」と、幼かりつる行方の猶確に知らまほしくて、問ひ給へば、僧「亡くなり侍りし程にこそ侍りしか。それも女にてぞ。それにつけても、物思ひの催しになむ、

齡としの末に思ひ給へ歎き侍るめる」と聞え給ふ。さればよと思さる。異怪しき事なれど、幼き御後見に思ほすべく聞え給ひてむや。思ふ心ありて、行きかゝづらふ方も侍りながら、世に心の染まぬにやあらむ、獨住ひとりぢゆうにてのみなむ。まだ似げなき程と、常の人に思し准へて、はしたなくや」など宣へば、異いと嬉しかるべき仰せ言なるを、まだ無下に幼稚いばけき程に侍るめれば、戯たはぶれにても御覽じ難くや。そもく女は、人にもてなされて大人にもなり給ふものなれば、委しくはえとり申さず。かの祖母北の方に語らひ侍りて聞えさせむ」と、すくよかに言ひて、物強きさまし給へれば、若き御心に恥かしくて、えよくも聞え給はず。佛阿彌陀佛あみだぶつものし給ふ堂に、する事侍る頃になむ。初夜未だ勤め侍らず。過して侍はむ」とて上り給ひぬ。

君は心地もいと惱ましきに、雨少し打注ぎ、山風冷やかに吹きたるに、瀧のとよみも増りて音高く聞ゆ。少し眠たげなる讀經の絶えく、凄く聞ゆるなど、すゞろなる人も、所柄物哀れなり。まして思ほし廻らす事多くて、まどろまれ給はず。初夜と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも人の寝ぬけはひ著くて、いと忍びたれど、數珠の脇息に引鳴らさるゝ音仄聞え、懐かしう打そよめく音なひ、あてはかなりと聞き給ひて、程も無く近ければ、外に立て渡したる屏風の中を少し引き開けて、扇を鳴らし給へば、覺えなき心地すべかめれど、聞き知らぬやうにやはとて、ゐざり出づる人あなり。少し退きて、「怪し、僻耳ひがみみにや」と、迫るを聞き給ひて、佛の御導は、暗きに入りても更に違ふまじかなるものを」と宣ふ御聲の、いと若うあてなるに、打出でむ聲遣ひも恥かしけれど、女房「如何なる方の御導にかは。覺東なく」と聞ゆ。異げに、うちつけたりとおぼめき給はむも、ことわりなれど、

(一) 本妻妾上

(二) 年が不釣合と

(三) 又参りまする

(四) 内の人は思ひもかけない

(五) 冥途

初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞ乾かぬ

と聞え給ひてむや」と宣ふ。女房「更に斯様の御消息、承り分くべき人も物し給はぬさまは、知しめしたりげなるを、誰にかは」と聞ゆ。異おのづからさる様ありて聞ゆるならむと、思ひなし給へかし」と宣へば、入りて聞ゆ。あな今めかし、この君や、世づいたる程におはするとぞ思すらむ。さるにてはかの若草を、いかで聞い給へる事ぞと、様々怪しきに心も亂れて、久しうなれば情無しとて、

尼「枕結ふ今宵ばかりの露けさを深山の苔に比べさらなむ

乾難う侍るものを」と聞え給ふ。異斯様の人傳なる御消息は、まだ更に聞え知らず、慣らはぬ事になむ。忝くとも、斯かる序に實々しう聞えさすべき事なむ」と聞え給へれば、尼君、いかで僻言聞き給へるならむと、「いと恥かしき御けはひに、何事をか答へ聞えむ」と宣へば、「はしたなうもこそ思せ」と人々聞ゆ。異げに、若やかなる人こそうたてもあらめ。眞實に宣ふ辱し」とて、ゐざり寄り給へり。異うちつけに、あさはかなりと御覽せられぬべき序なれど、心にはさも覺え侍らねば、佛はおのづから」とて、大人々々しう恥かしげなるに慎まれて、頃にもえ打出で給はず。異げに思ひ給へ寄り難き序に、斯くまで宣はせ聞えさするも、淺くはいかゞ」と宣ふ。異哀れに承る御有様を、かの過ぎ給ひにけむ、御代りに思しないでむや。言ふ甲斐なき程の齡にて、睦まじかるべき人にも立ち後れ侍りにければ、怪しう浮きたるやうにて、年月をこそ重ね侍

(一) 紫上
(二) 先刻詠んだ若草の歌を

(三) 君の御旅寝
(四) 私の
(五) あのつまらぬ歌

を。一解、誤傳を
(六) 對面なさらずば
(七) 尼君の

(八) 私をその亡き母
君の

(九) 私も幼少の折
(一〇) 母桐壺更衣や祖母

れ。同じさまにものし給ふなるを、類になさせ給へと、いと聞えまほしきを、斯かる折もあり難くてなむ、思されむ所をも憚からず、打出で侍りぬる」と聞え給へば、思いと嬉しう思ひ給へぬべき御事ながらも、聞召し僻めたる事などや侍らむと、慎ましうなむ。あやしき身一つを頼もし人にする人なむ侍れど、いとまだ言ふ甲斐なき程にて、御覽じ許さるゝ方も侍り難ければ、えなむ承り留められざりける」と宣ふ。聖皆覺束なからず承るものを。所狭う思し憚らで、思ひ給へ寄るさま異なる心の程を御覽ぜよ」と聞え給へど、いと似げなき事を、さも知らで宣ふと思して、心解けたる御答もなし。僧都おはしぬれば、聖よし、斯う聞え初め侍りぬれば、いと頼もしうなむ」とて、押し立て給ひつ。曉方になりければ、法華三昧行ふ堂の懺法の聲、山嵐につきて聞え来る、いと尊く、瀧の音に響き合ひたり。

源吹き迷ふみ山おろしに夢醒めて涙催す瀧の音かな

僧「さしぐみに袖濡しける山水に澄める心は騒ぎやはする

耳馴れ侍りにけりや」と聞え給ふ。明け行く空はいといたう霞みて、山の鳥どもも、そこはかたなく囀り合ひたり。名も知らぬ木草の花ども、色々に散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿の佇み歩くも珍らしく見給ふに、惱ましさも紛れ果てぬ。聖、動きも得せねど、とかくして護身参らせ給ふ。嘆れたる聲のいといたう透き僻めるも哀れに功づきて、陀羅尼讀みたり。

- (一) 尼君自らをいふ
- (二) 禁上
- (三) 毎朝行ふ六根の

- (四) ふと涙を催して
- (五) 住めるに掛く

- (六) 密教加持の法を以て身を護持すること

- (七) 有難味があつて
- (八) 佛菩薩の説いた呪文

御迎への人々参りて、癒り給へる喜び聞え、内裏よりも御使あり。僧都、世に見えぬ様の御菓物、何くれと谷の底まで掘り出でて營み聞え給ふ。聖「今年ばかりの誓ひ深う侍りて、御送りにもえ参り侍るまじき事。なか／＼にも思ひ給へらるべきかな」など聞えて、御酒参り給ふ。聖「山水に心とまり侍りぬれど、内裏より覺束ながらせ給へるも畏ければなむ。今この花の折過さず参り來む。

官人に行きて語らむ山櫻風よりさきに來ても見るべく

と宣ふ御もてなし聲遣ひさへ、目もあやなるに、

僧 優曇華の花待ち得たる心地して深山櫻に目こそ移らね

と聞え給へば、微笑みて、聖「時ありて一度開くなるは、難かなるものを」と宣ふ。聖、御土器賜はりて、聖奥山の松の扉を稀にあげてまだ見ぬ花の顔を見るかな

と打泣きて見奉る。聖、御守りに、獨鈷奉る。見給ひて、僧都、聖徳太子の百濟より得給へりける、金剛子の數珠の玉の装束したる、やがてその國より入れたる宮の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに、御薬ども入れて、藤・櫻などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げ奉り給ふ。君は聖よりはじめ、讀經しつる法師の布施、設けの物ども、さまざまに取りに遣はしたりければ、その邊の山賤までさるべき物ども賜ひ、御誦經などして出で給ふ中に、僧都入り給ひて、かの聞え給ひし事まねび聞

- (一) 山を出まいとの
- (二) 希有、希有、佛
- 出に於世、如優曇

- 華時一現耳(金光
- 明經、諸佛品の句)
- (三) 密教で煩惱打破

- の表章として用ゐる法具。銅製の兩端の尖つたもの

- (四) 菩提樹科の木果の核で作つた
- (五) 百濟で入れたま

- まの宮
- (六) 源から頼まれた禁上の件を

え給へど、尼とも斯うも只今は聞えむ方なし。若し御志あらば、いま四五年を過してこそは、とも斯うも」と宣へば、さなむと同じさまにのみあるを、本意なしと思す。御消息、僧部の許なる小さき童して、
源夕まぐれ仄かに花の色を見て今朝は霞の立ちぞわづらふ
御返し、

尼まことにや花の邊は立ち憂きと霞むる空の氣色をも見む
と、由ある手のいとあてなるを、打捨て書き給へり。

御車に奉るほど、大殿より、何方とも無くておはしましにける事とて、御迎への人々、君達など數多參り給へり。頭中將・左中辨、さらぬ君達も慕ひ聞えて、君達「斯うやうの御供は仕う奉り侍らむと思ひ給ふるを、淺ましう後らさせ給へる事」と恨み聞えて、君達「いといみじき花の陰に、暫しも休らはず、立ちかへり侍らむは、飽かぬ業かな」と宣ふ。岩隠れの苔の上に竝み居て、土器參る。落ち來る水のさまなど故ある瀧の下なり。頭中將、懐なりける笛取り出でて、吹き澄ましたり。辨の君、扇はかなう打鳴して「豊浦の寺の西なるや」と謠ふ。人よりは異なる君達なるを、源氏の君いたく打惱みて、岩に寄り居給へるは、類なくゆゑしき御有様にて、何事にも目移るまじかりける。例の篳篥吹く隨身、笙の笛持たせたる好き者などあり。僧都、琴を自ら持て參りて、僧これ唯御手一つ遊ばして、同じくは、山の鳥も驚かし侍らむ」と、切に聞え給

(一) 源に傳へる
(二) 紫上
(三) 今後の御心をす

つと拜見しませう
(五) 頭中の弟。夕顔
卷に藏人辨。六〇

頁参照
(六) 葛城の、寺の前
なるや、豊浦の寺

の、西なるや。履
の葉井に、白玉し
づくや、眞白玉し

づくや、おしとん
ど、おしとんど(備
馬樂、葛城)

へば、源「亂り心地いと堪へ難きものを」と聞え給へど、けにくからず搔鳴らして、皆立ち給ひぬ。飽かず口惜しと、言ふ甲斐なき法師童へも、涙を落し合へり。まして内には年老いたる尼君達など、まだ更に斯かる人の御有様を見ざりつれば、この世の物とも覺え給はずと聞え合へり。僧都も「あはれ何の契りにて、斯かる御様ながら、いとむつかしき日本の末の世に生れ給ひつらむと、見るにいとなむ悲しき」とて、目押し拭ひ給ふ。この若君、幼心地にめでたき人かなと見給ひて、宮の御有様よりも、勝り給へるかななど宣ふ。女房「さらば彼の人の御子に成りておはしませよ」と聞ゆれば、打領きて、いとようありなむと思したり。雖遊びにも、繪畫い給ふにも、源氏の君と作り出でて、清らなる衣著せかしづき給ふ。

君は先づ内裏に參り給ひて、日頃の御物語など聞え給ふ。いといたる衰へにけりとて、ゆゑしと思しめしたり。聖の尊かりける事など問はせ給ふ。委しく奏し給へば、阿闍梨などにもなるべき者にこそあめれ。行ひの勞は積りて、朝廷に知召されざりける事」と、尊がり宣はせけり。大殿參り合ひ給ひて、左大臣「御迎へにもと思ひ給へつれど、忍びたる御歩行には如何と、思ひ憚りてなむ。長閑やかに一二日打休み給へ」とて、左「やがて御送り仕う奉らむ」と申し給へば、さしも思さねど、引かされて罷出給ふ。我が御車に載せ奉り給ひて、自らは引き入りて奉れり。もて傳き聞え給へる御心ばへの哀れなるをぞ、流石に心苦しと思ほしける。殿にも、おはしますらむと心遣ひし給ひて、久しく見給はぬほどに、いと玉の臺に磨きしつらひ、萬づを整へ給へり。女君、例の這ひ隠れて、頓にも出で給はぬを、大臣切に聞え給ひて、辛うじて渡り給へり。た

(一) 父兵部卿官
(二) 軌範の義、僧の

師となるべきものの稱
號。宣旨で補せられる

(三) 自分は奥に陪乗した

だ繪に畫きたる物の姫君のやうに、し居ゑられて、うち身動き給ふことも難く、置しうてもなし給へば、思ふ事もうちかすめ、山路の物語をも聞えむに、言ふ甲斐ありて、をかしろ打答へ給はばこそ哀れならめ、世には心も解けず、疎く恥かしきものに思ほして、年の重なるに添へて、御心の隔ても増るを、いと苦しく思はずに、時々は世の常なる御氣色を見ばや。堪へ難う煩ひ侍りしをも、如何とだに問はせ給はぬこそ、珍らしからぬ事なれど、猶恨めしう」と聞え給ふ。辛うじて、尋問はぬは辛きものにやあらむ」と、後目に見おこせ給へるまみ、いと恥かしげに、氣高う美しげなる御容貌なり。稀々は、あさましの御事や。問はぬなど言ふ際は、異にこそ侍るなれ。心憂くも宣ひなすかな。世と共にはしたなき御もてなしを、若し思し直る折もやと、とざま斯うさまに試み聞ゆるを、いとと思ほし疎むなめりかし。よしや命だに」とて、夜の御座に入り給ひぬ。女君、ふとも入り給はず、聞え煩ひ給ひて、打敷きて臥し給へるも、なま心づき無きにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し亂るゝ事多かり。

かの若草の生ひ出でむ程の猶ゆかしきを、似氣なき程と思へりしもことわりぞかし。言ひ寄り難き事にもあるかな。如何に構へて、唯心安く迎へ取りて、明暮の慰めにも見む。いかでかと深う思ほす。又の日御文奉れ給へり。僧都にも仄めかし給ふべし。尼上には、

源もて離れたりし御氣色の愼ましさに、思ひ給ふるさまをも、え顯はし果て侍らすなりにしをなむ。斯

- (一) きちんとして けれど片時もとは (六) たま／＼の御詞 (七) 命だに心にかな
- (二) 葵は (三) 源は ぬはつらきものに (八) と思ふとあの通り ふものならば何か
- (四) 心外に ぞありける (七) 本妻の場合でな は人を恨みしもせ
- (五) 首も盡き程はな (古今六帖五) い (八) 奥入 長い間 (九) それは源はどうもいやなのであら
- (一〇) 紫上

ばかり聞ゆるにても、おしなべたらぬ志の程を御覽じ知らば、如何に嬉しう。などあり。中に小さく引結びて、

源面影は身をも離れず山櫻心の限りとめて來しかど
夜の間の風も後めたるなむ。

とあり。御手などはさるものにて、唯果敢なう押包み給へる様も、さだすぎたる御目どもには、目もあやに好ましう見ゆ。あな傍痛や、如何聞えむと思し煩ふ。

尼行手の御事は、等閑にも思ひ給へなされしを、ふりはへさせ給へるに、聞えさせむ方無くなむ。まだ難波津をだにはか／＼しう續け侍らざれば、甲斐なくなむ。さても、

嵐吹く尾上の櫻散らぬ聞を心留めける程の果敢なさ
いと後めたるう。

とあり。僧都の御返りも同じ様なれば、口惜しくて、二三日ありて、惟光をぞ奉れ給ふ。少納言の乳母といふ人あべし。尋ねて委しく語らへ」など宣ひ知らず。さもかゝらぬ限なき御心かな、さばかり幼稚げなりしけはひをと、眞ほならねども、見し程を思ひ遣るもかし。わざと斯う御文あるを、僧都も長まり聞え給ふ。少納言に消息して逢ひたり。委しく、思ほし宣ふ様、大方の御有様など語る。言葉多かる人にて、つき

- (一) 朝まだき起きて 春、元良親王 (五) 難波津に咲くや (六) 垣越しに
- ぞ見つる梅の花夜 (三) 年のたけた この花冬ごもり今 歌とを手習の初に
- の間の風のうしろ (三) 行きずりの は春べと咲くやこ (七) 惟光は
- めたさに(拾遺) (四) わざ／＼ の花(古今序)昔 した

づきしう言ひ續けれど、いとわりなき御程を如何に思ほすにかと、ゆるしうなむ誰も思しける。御文にもいと懇に書い給ひて、「かの御放書なむ、なほ見給へまほしき」とて、例の中なるには、
源 浅香山浅くも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ
御返し、

尼 汲み初めて悔しと聞きし山の井の浅きながらや影を見すべき
惟光も同じ事を聞ゆ。「この煩ひ給ふ事宜しくば、この頃過して、京の殿に渡り給ひてなむ、聞えさすべき」とあるを、心もと無う思す。

かの山寺の人は、よろしうなりて出で給ひにけり。京の御住處尋ねて、時々御消息などあり。同じさまにのみあるもことわりなる中に、この月頃は、ありしに増る物思ひに、他事無くて過ぎ行く。秋の末つ方、いと物心細くて歎き給ふ。月をかしき夜、忍びたる所に、辛うじて思ひ立ち給へるを、時雨めいて打そぐ。おはする所は六條京極邊にて、内裏よりなれば、少し程遠き心地するに、荒れたる家の木立いと物古りて、木暗う見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ、
惟 故按察の大納言の家侍り。一日物の便りに訪らひて侍りしかば、かの尼上、いたう弱り給ひにたれば、何事も覺えずとなむ、申して侍りし」と聞ゆれば、
源 あ

- (一) その御手習の くに(萬葉一六、
- (二) 浅香山影さへ見 葛城王)
- (三) くやしくぞ汲み 那由井の井のあさ
- (四) 同じ意味の返事
- (五) 病氣
- (六) 尼君の邸 ば袖のみぬる、山
- (七) 北山の寺にあた の井の水(六帖二)
- (八) 紫の祖母尼君 紫の祖母尼君
- (九) 紫上の祖父

はれの事や。訪らふべかりけるを、などかさなむとも物せざりし。入りて消息せよ」と宣へば、人入れて案内せさす。「わざと斯く立ち寄り給へる事」と言はせられたれば、入りて、惟光の使「斯く御訪らひになむおはしましたる」と言ふに驚きて、「いと傍痛き事かな。この日頃、むげにいと頼もしげなくならせ給ひにたれば、御對面なども有るまじ」と言へども、「返し奉らむは長し」とて、南の廂引繕ひて入れ奉る。「いとむつかしげに侍るめれど、長まりをだにとてなむ。ゆくりなう物深きおまし所になむ」と聞ゆ。げに斯かる所は、例に違ひて思さる。源 常に思ひ給へ立ちながら、甲斐なき様にのみもてなさせ給ふに、慎まれ侍りてなむ。惱ませ給ふ事をも、斯くとも承らざりける覺束なさなど聞え給ふ。尼 亂り心地は、いつともなくのみ侍り。限りのさまになり侍りて、いと忝く立ち寄せ給へるに、自ら聞えさせぬ事。宣はする事の筋、邂逅にも思召し變らぬ様侍らば、斯くわりなき齡過ぎ侍りて、必ず敷まへさせ給へ。いみじく心細げに見給へ置くなむ、願ひ侍る道の絆に、思ひ給へられぬべき」など聞え給へり。いと近ければ、心細げなる御聲絶えく聞えて、尼「いと辱き業にも侍るかな。この君だに、長まりも聞え給ひつべき程ならましかば」と宣ふ。哀れに聞き給ひて、源 何か、浅う思ひ給へむ事故、斯うすきくしきさまを見え奉らむ。如何なる契りにか、見奉り初めしより、あはれに思ひ聞ゆるも、怪しきまで、この世の事には覺え侍らぬ」など宣ひて、源 甲斐なき心地のみし侍るを、かの幼稚う物し給ふ御一聲、如何でか」と宣へば、女房「いでや、萬づ思ほし知らぬ様に、大殿籠り入りて」など聞ゆる折しも、彼方より來る音して、源 上こそ。この寺にありし源氏の君こそおはした

- (一) ごとくして
- (二) 御來訪の御禮な
- (三) 始終の事
- (四) 残念に存じます
- (五) 頑是のない
- (六) 紫上
- (七) おばあ様「こそ」は呼び掛けの敬稱

なれ。など見給はぬ」と宜ふを、人々いと傍痛しと思ひて、「あなかま」と聞ゆ。其いさ、見しかば心地の悪しき慰みきと、宜ひしかばぞかし」と、かしこき事聞き得たりと思して宜ふ、いとをかしと聞き給へど、人の苦しと思ひたれば、聞かぬ様にて、眞實なる御訪らひを、聞え置き給ひて歸り給ひぬ。げに言ふ甲斐なわけはひや。さりとも、いとよう教へてむと思す。またの日も、いと眞實に訪らひ聞え給ふ。例の小さくて、源「幼稚き鶴の一聲聞きしより葦間になづむ船ぞえならぬ
同じ人にや」と、殊更幼く書きなし給へるも、いみじうをかしげなれば、やがて御手本にと人々聞ゆ。少納言ぞ聞えたる。

少訪はせ給へるは、今日をも過し難げなる様にて、山寺に罷り渡る程にて、斯う訪はせ給へる長まりはこの世ならでも聞えさせむ。

とあり。いと哀れと思す。「消えむ空なき」とありし夕、思し出でられて、戀しくもまた、見ば劣りやせむと、流石に危し。

十月に朱雀院の行幸あるべし。舞人など、やんごとなき家の子ども、上達部・殿上人どもなども、その方につきくしきは、皆選らせ給へれば、親王達・大臣より初めて、とりくの才ども習ひ給ふ、暇なし。山里にも、久しう音づれ給はざりけるを、思ほし出でて、ふりはへ遣はしたりければ、僧都の返り事のみあり。

- (一) 源を
- (二) 源は
- (三) じれつたい
- (四) 堀江こぐ棚無し小船
- (五) 尼君は
- (六) 生ひ立たむあり
- (七) 後らす露ぞ消えむ
- (八) 空なき(尼君の歌、七五頁参照)
- (九) 漕返り同じ人にや戀ひ
- (一〇) 渡りなむ(古今、戀四)
- (一一) かも知らぬ若草を

文同「立ちぬる月の二十日の程になむ、遂に空しく見給へなして、世間の道理なれど、悲しび思ひ給ふる」などあるを見給ふに、世の中の果敢なきも哀れに、後めたげに思へりし人も如何ならむ。幼き程に戀ひやすらむと、故御息所に後れ奉りしなど、はかなくしからねど、思ひ出でて、淺からず訪らひ給へり。少納言、故なからず御返りなど聞えたり。
忌など過ぎて、京の殿になむと聞き給へば、程経て、自ら長閑なる夜おはしたり。いと凄げに荒れたる所の、人少ななるに、如何に幼き人怖ろしからむと見ゆ。例の所に入れ奉りて、少納言、御有様など打泣きつゝ聞え續くるに、あいなう御袖も唯ならず。少宮に渡し奉らむと侍るを、故姫君のいと情なく憂きものに思ひ聞え給へりしに、いとむげに兒ならぬ齡の、まだはかなくしう人の趣けをも見知り給はず、中空なる御程にて、數多物し給ふなる中の、悔らはしき人にてや交り給はむなど、過ぎ給ひぬるも、世と共に思し歎きつるも著き事多く侍るに、斯く辱き、無氣の御言の葉は、後の御心も辿り聞えさせず、いと嬉しう思ひ給へられぬべき折節に侍りながら、少しも准ひなる様にも物し給はず、御年よりも若びて慣らひ給へれば、いと傍痛く侍り」と聞ゆ。其何か、斯う繰り返し聞え知らする心の程を、つゝみ給ふらむ。その言ふ甲斐なき御有様の、哀れにゆかしう覺え給ふるも、契り殊になむ、心ながら思ひ知られける。猶人傳ならで、聞え知らせばや。

- (一) 桐壺更衣
- (二) 紫は
- (三) 尼君臨終の
- (四) 兵部卿宮邸へ紫を御引移らせ申さ
- (五) 紫の母
- (六) 御本妻を
- (七) 紫は
- (八) それだからと言
- (九) 仕向け
- (一〇) どつちつかずの
- (一一) 兵部卿宮の御子達
- (一二) 尼君
- (一三) 御世辭
- (一四) 似合はしい所も
- (一五) あどけない

蘆^(三)わか^(三)の浦にみるめは難くとも此は立ちながら返る波かは
めざましからむ」と宣へば、少^(三)げにこそいと畏けれ」とて、

少^(三)「寄る波の心も知らず和歌の浦に玉藻靡かむ程ぞ浮きたる
わりなき事」と聞ゆるさまの馴れたるに、少し罪免され給ふ。還^(四)「なぞ越えざらむ」と、打誦じ給へるを、身
に染みて若き人々思へり。

君は、上^(五)を戀ひ聞え給ひて泣き臥し給へるに、御遊び相手^(六)どもの、「直衣著たる人のおはする、宮のおはしま
すなめり」と聞ゆれば、起き出で給ひて、少^(七)納言よ。直衣著たりつらむは何ら。宮のおはするか」とて、
寄りおはしたる御聲、いとらうたし。還^(八)「宮にはあらねど、又思ほし放つべうもあらず。此方」と宣ふを、恥か
しかりし人と流石に聞きなして、悪しう言ひてけりと思して、乳母^(九)に差寄りて、美^(十)「いざかし、眠たきに」と
宣へば、還^(十一)「今更、など忍び給ふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。今少し寄り給へ」と宣へば、乳母の、「され
ばこそ、斯う世づかぬ御程にてなむ」とて、押し寄せ奉りたれば、何心もなく居給へるに、手を差し入れて
探り給へれば、なよやかなる御衣に、髪はつや／＼とかゝりて、末のふさやかに探りつけられたる程、いと
美しう思ひ遣らる。手を執らへ給へれば、うたて例ならぬ人の、斯く近づき給へるは恐ろしうて、美^(十二)「寝なむ
といふものを」とて、強ひて引き入り給ふにつきて、入り入りて、還^(十三)「今はまるぞ思ふべき人、な疎み給ひそ」

(一) 若い紫上に對面
することは。わか
は若と和歌。みる

(二) たい歸すのは
めは見る目と海松
布とに掛く

(三) 餘り軽々しい
(四) 人しれぬ身は急
げども年を経てな

(五) 越え難き逢坂の
關(後撰、戀三、
伊尹朝臣)

(六) 尼君
(七) ネエ行かうよ

と宣ふ。乳母、「いであなうたてや。ゆゝしうも侍るかな。聞え知らせ給ふとも、更に何の驗も侍らしものを」
とて、苦しげに思ひたれば、還^(一)「さりとも、斯かる御程を如何はあらむ。なほ唯世に知らぬ志の程を見果て給
へ」と宣ふ。霰降り荒れて、凄き夜のさまなり。還^(二)「いかで斯う人少なに、心細うて過し給はむ」と打泣い給
ひて、いと見捨て難き程なれば、還^(三)「御格子参りね。物怖ろしき夜のさまなめるを、宿直人にて侍らむ。人々
近う侍はれよかし」とて、いと馴れ顔に、御帳の内に掻き抱きて入り給へば、怪しう思ひの外にもと憫れて、
誰もく居たり。乳母は後めたうわり無しと思へど、荒ましう聞え騒ぐべきならねば、打敷きつゝ居たり。
若君は、いと怖ろしう、如何ならむと戦かれて、いと美しき御肌つきも、そぞろ寒げに思したるを、らうた
く覺えて、單衣ばかりを押し包みて、我が御心地も、且はうたて覺え給へど、哀れに打語らひ給ひて、還^(四)「い
ざ給へよ、をかしき繪など多く、雜遊びなどする所に」と、心につくべき事を宣ふけはひの、いとなつかし
きを、幼き心地にも、いといたうも懼ぢず、流石にむつかしう、寝も入らず、身じろぎ臥し給へり。夜一夜
風吹き荒るゝに、女房「げに斯うおはせざらましかば、如何に心細からまし。同じくば宜しき程におはしまさ
ましかば」と私語き合へり。乳母は、後めたさに、いと近う侍ふ。風少し吹き止みたるに、夜深う出で給ふ
も、事あり顔なりや。還^(五)「いと哀れに見奉る御有様を、今はまして片時の間も覺束なかるべし。明暮眺め侍る
所に渡し奉らむ。斯くてのみは如何。物懼し給はざりけり」と宣へば、少^(六)納言「宮も御迎へになど聞え給ふめ
れど、この御四十九日過してや、など思ひ給ふる」と聞ゆれば、還^(七)「頼もしき筋ながらも、よそくにて慣ら
ひ給へるは、同じうこそ疎う覺え給はめ。今より見奉れど、淺からぬ志は勝りぬべくなむ」とて、搔撫でつ

(一) 氣に入りさうなこと

(二) 源が

(三) 紫の年配が

(四) 別々の住居で

(五) 他人と

つ、願みがちにて出で給ひぬ。いみじう霧り渡れる空もたゞならぬに、霜はいと白う置きて、眞の懸想もをかしかりぬべきに、さうくしう思ひおはす。いと忍びて通ひ給ふ所の、道なりけるを思し出でて、門打ち敲かせ給へど、聞きつくる人無し。甲斐なくて、御供に聲ある人して語はせ給ふ。

源朝ぼらけ霧立つ空の迷ひにも行き過ぎがたき妹が門かな
と二返りばかり語ひたるに、由ばみたる下仕を出して、

立ち留まり霧の籬の過ぎ憂くば草のとざしに障りしもせじ

と言ひかけて入りぬ。又人も出で来ねば、歸るも情なけれど、明け行く空もはしたなくて、殿へおはしぬ。をかしかりつる人の名殘戀しく、獨咲しつゝ臥し給へり。日高う大殿籠り起きて、文遣り給ふに、書くべき言の葉も例ならねば、筆打置きつゝ、すさび居給へり。をかしき繪などを遣り給ふ。

彼處には、今日しも宮渡り給へり。年頃よりもこよなう荒れ増り、廣う物古りたる所の、いと人少なに寂しければ、見渡し給ひて、宮斯かる所には、いかでか、暫しも幼き人の過し給はむ。猶彼處に渡し奉りてむ。何の所狭き程にもあらず。乳母は、曹司などして侍ひなむ。君は、若き人々などあれば、諸共に遊びて、いとよう物し給ひなむ」など宣ふ。近う呼び寄せ奉り給へるに、かの御移香の、いみじう艶に染みかへり給へれば、宮をかしの御匂ひや。御衣はいと萎えて」と、心苦しげに思いたり。宮年頃も、あつしくさだ過ぎ給

(一) 妹が門や、せなが門、行き過ぎかねてや、わが行か

ば、眩笠の、眩笠の、雨もや降らなむ(下略)(催馬樂、妹が門)

(三) 遠慮なく御入りなされたらば如何

(四) 父兵部卿宮(五) 自邸

(六) 源の(七) 病身で老年の

へる人に添ひ給へるにより、「時々彼處に渡りて見馴らし給へ」などものせしを、怪しう疎み給ひて、人も心置くめりしを、斯かる折にしも物し給はむも、心苦しう」など宣へば、宮何かは、心細くとも、暫しは斯くておはしましたむ。少し物の心思ほし知りなむに渡らせ給はむこそ、よくは侍るべけれ」と聞ゆ。宮夜晝戀ひ聞え給ふに、果敢なき物も聞し召さず」とて、げにいといたう面瘦せ給へれど、いとあてに美しく、なかなか見え給ふ。宮何かさしも思す。今は世に亡き人の御事は甲斐なし。おのれあれば」など語り聞え給ひて、暮るれば歸らせ給ふを、いと心細しと思ひて泣い給へば、宮も打泣き給ひて、宮いと斯う思ひな入り給ひそ。今日明日渡し奉らむ」など、返すくこしらへ置きて出で給ひぬ。名殘も慰め難う泣き居給へり。行先の身のあらむ事などまでも思し知らず、唯年頃立ち離るゝ折無う纏はし慣らひて、今は亡き人となり給ひにけると思すがいみじきに、幼き御心地なれど、胸つと塞がりて、例の様にも遊び給はず。晝はさても紛らはし給ふを、夕暮となれば、いみじう屈し給へば、斯くてはいかでか過し給はむと慰め侘びて、乳母も泣き合へり。

君の御許よりは、惟光を奉れ給へり。「参り来べきを、内裏より召あればなむ。心苦しう見奉りしも、靜心なく」とて、宿直人奉れ給へり。少納言「あぢき無うもあるかな。戯れにても、物の始めにこの御事よ。宮聞召しつけば、侍ふ人々の疎かなるにぞ叱まれむ。あなかしこ。物のついでに、幼稚く打出で聞えさせ給ふな」など言ふも、それをば何とも思したらぬぞ淺ましきや。少納言は、惟光に哀れる物語どもして、宮あり經て後や、さるべき御宿世、遁れ聞え給はぬやうもあらむ。只今は、かけてもいと似げなき御事と見奉るを、

(一) 尼君

(二) 繼母(本妻)

(三) 同居

(四) 尼君を

(五) 御妾なんぞのやうな御身の上

怪しう思し宣はするも、如何なる御心にか、思ひ寄る方なう亂れ侍る。今日も宮渡らせ給ひて、「後安く仕う奉れ。心幼くもてなし聞ゆな」など、宣はせつるもいと煩はしう、たゞなるよりは、斯かる御好色事も思ひ出でられ侍りつる」など言ひて、この人も事有り顔にや思はむなど、あいなければ、いたう歎かしげにも言ひなさず。大夫も、如何なる事にかあらむと心得難く思ふ。参りて有様など聞えければ、哀れに思し遣らるれど、さて通ひ給はむも、流石に漫なる心地して、軽々しうもて僻めたる事と、人もや漏り聞かむなど憤ましかれば、唯迎へてむと思ほす。御文は度々奉れ給ふ。暮るれば、例の大夫をぞ奉れ給ふ。源文詞「障る事どもありてえ参り來ぬを、疎かにや」などあり。少宮より、明日俄に御迎へにと宣はせたりつれば、心慌しくてなむ。年頃の蓬生を離れなむも、流石に心細う、侍ふ人々も思ひ亂れて」と、言寡に言ひて、をさくあへしらはす。物縫ひ營むけはひなど、著ければ参りぬ。君は大殿におはしけるに、例の女君頼にも對面し給はず。物むつかしう覺え給ひて、東琴を清搔きて、「常陸には田をこそ作れ」といふ歌を、聲はいと艶きて、すさび居給へり。参りたれば、召し寄せて有様問ひ給ふ。然々なむと聞ゆれば、口惜しう思して、かの宮に渡りなば、わざと迎へ出でむもすきくしかるべし。幼き人を盗み出でたりと、抵悟負ひなむ。その前に、暫し人にも口固めて、渡してむと思して、暁、彼處にもせむ。車の装束さながら、隨身一人二人仰せ掟てたれ」と宣ふ。承りて立ちぬ。

(一) さうでない時よ
(二) 厄介に

(三) 氣がひけるので
(四) 葵上
(五) 源は不興で

(六) 琴の弾き方
(七) 常陸には、田を
こそ作れ、あだ心

かぬとや君が、山を越
え、野を越え、雨夜來
ませる(風俗歌、常陸)

(八) 惟光
(九) 非難
(一〇) 今のまゝで

君は、如何にせまし。聞えありて好色がましきやうなるべき事。人の程だに物を思ひ知り、女の心交しける事と、推し量られぬべくは尋常なり。父宮の尋ね出で給へらむも、はしたなう漫なるべきをと、思し亂るれど、さて外してむはいと口惜しかるべければ、まだ夜深う出で給ふ。女君例のしぶく、心も解けず物し給ふ。彼處にいと切に見るべき事の侍るを、思ひ給へ出でてなむ。立ち歸り参り來なむ」とて、出で給へば、侍ふ人々も知らざりけり。我が御方にて、御直衣などは奉る。惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ。門打ち敲かせ給へば、心も知らぬ者の開けたるに、御車をやら引き入れさせて、大夫妻戸を鳴らして咳けば、少納言聞き知りて、出で來たり。惟こにおはします」と言へば、少幼き人は大殿籠りてなむ。などかいと夜深う立出でさせ給へる」と、物の便りと思ひて言ふ。宮へ渡らせ給ふべかなるを、その先に物一言聞えさせ置かむとてなむ」と宣へば、少何事にかは侍らむ。如何にはかくしき御答聞えさせ給はむ」とて、打笑ひて居たり。君入り給へば、いと傍痛く、少打解けて、怪しき舊人どもの侍るに」と聞えさす。御まだ驚い給はじな。いで御目醒し聞えむ。斯かる朝霧をば知らで寝ぬるものか」とて入り給へば、「や」とも聞えず。君は何心も無く寝給へるを、抱き驚かし給ふに驚きて、宮の御迎へにおはしたると、寝おびれて思したり。御髪搔き繕ひなどし給ひて、いざ給へ。宮の御使にて参り來つるぞ」と宣ふに、あらざりけりと惘れて、怖ろしと思ひたれば、あな心憂。まろも同じ人ぞ」とて、搔抱きて出で給へば、大夫・少納言など、「こは如何に」と聞ゆ。こには常にもえ参らぬが覺束なければ、心安き所にと聞えしを、心憂く渡り給ふべかなれば、まして聞え難かるべければ。人一人参られよかし」と宣へば、心慌しくて、少今日はいと

(一) 紫が相當な年頃でもあつて
(二) 紫を逸し
(三) 居間
(四) 御目ざめではあるまいな
(五) 父宮の方へ

便びんなくなむ侍るべき。宮の渡らせ給はむには、如何さまにか聞え遣らむ。おのづから程經て、さるべきにおはしまさば、とも斯うも侍りなむを、いと思ひ遣りなき程の事に侍れば、侍ふ人々苦しう侍るべし」と聞ゆれば、源「よし、後にも人は参りなむかし」とて、御車寄せさせ給へば、淺ましろ、如何さまにかと思ひ合へり。若君も、怪しと思して泣い給ふ。少納言留め聞えむ方無ければ、前夜縫ひし御衣ども引き提げて、自らも宜しき衣著替へて乗りぬ。

二條院は近ければ、まだ明うならぬ程におはして、西の對に御車寄せて下り給ふ。若君をば、いと輕らかに搔抱きて下し給ふ。少納言「なほいと夢の心地侍るを、如何にし侍るべき事にか」とてやすらへば、源「そは心ななり。御みづからは渡し奉りつれば、還りなむとあらば送りせむかし」と宣ふに、わりなくて下りぬ。俄に淺ましろ、胸も靜かならず。宮の思し宣はむ事、如何に成り果て給ふべき御有様にか、とてもかくても、頼もしき人々に後れ聞え給へるがしみじさと思ふに、涙の止まらぬを、流石にゆゝしければ念じ居たり。此方は住み給はぬ對なれば、御帳なども無かりけり。惟光召して、御帳・御屏風など、邊々仕立てさせ給ふ。御几帳の帷子引下し、御座などたゞ引繕ふばかりにてあれば、東の對に、御宿直物召しに遣はして、大殿籠りぬ。若君は、いとむくつけう、如何にする事ならむと、慄はれ給へど、流石に聲立ててもえ泣き給はず。

案「少納言が許に寝む」と宣ふ聲いと若し。源「今は、さは大殿籠るまじきぞよ」と、教へ聞え給へば、いと佗しくて泣き臥し給へり。乳母はうちも臥されず、物も覺えず泣き居たり。明け行く儘に見渡せば、大殿の造りさましつらひさま、更にもいはず、庭の砂も玉を重ねたらむやうに見えて、輝く心地するに、はしたな

(一) お前の自由だ

(二) 紫

(三) もう乳母などとは

く思ひ居たれど、此方には女房なども侍はざりけり。疎き客人などの参る折節の方なりければ、男どもぞ御簾の外にありける。斯く人迎へ給へりと仄聞く人は「誰ならむ。おぼろげにはあらじ」と私語く。御手水・御粥など、此方に参る。日高う寝起き給ひて、源「人無くて悪しかめるを、さるべき人々、夕づけてこそは迎へさせ給はめ」と宣ひて、對に童べ召しに遣はす。「小さき限り殊更に参れ」とありければ、いとをかしげにて、四人参りたり。君は御衣に纏はれて臥し給へるを、せめて起して、源「斯う心憂くなおはせせ。漫なる人は、斯うはありなむや。女は心柔かなるなむよき」など、今より教へ聞え給ふ。御容貌は、さし離れて見しよりも、いみじう清らにて、懐かしう打語らひつゝ、をかしき繪・遊物ども取りに遣はして見せ奉り、御心につくべき事どもをし給ふ。やう／＼起き出でて見給ふに、鈍色の濃やかなるが、打萎えたるどもを著て、何心なく打笑みなどして居給へるが、いと美しきに、我も打笑まれて見給ふ。東の對に渡り給へるに、立ち出でて、庭の木立、池の方など覗き給へば、霜枯れの前栽、繪に畫けるやうに面白くて、見も知らぬ四位・五位とき交ぜに隙なう出で入りつゝ、實にをかしき所かなと思す。御屏風どもなど、いとをかしき繪を見つゝ、慰めておはするも果敢なしや。

君は二三日内裏へも参り給はで、この人を馴つけ語らひ聞え給ふ。やがて本にもと思すにや、手習・繪などさま／＼に書きつゝ見せ奉り給ふ。いみじうをかしげに書き集め給へり。源「いで君も書い給へ」とあれば、

(一) 紫

(二) 強ひて

(三) 普通の人は私の

やうに親切には出

來ぬ

(四) 紫は喪服の

(五) 源

(六) 源がその居間へ

行かれた間に紫が

(七) 手本

紫「まだようは書かず」とて、見上げ給へるが、何心なく美しげなれば、打微笑みて、眞よからねど、無下に書かぬこそ悪けれ。教へ聞えむかし」と宣へば、打側みて書い給ふ手つき、筆執り給へるさまの幼げなるも、らうたうのみ覺ゆれば、心ながら怪しと思す。紫「書き損ひつ」と恥ぢて隠し給ふを、強ひて見給へば、いと若けれど、生先見えて、ふくよかに書い給へり。故尼君のにぞ似たりける。今めかしき手本習はば、いと善う書い給ひてむと見給ふ。雛など、わざと屋ども作り續けて、諸共に遊びつゝ、こよなき物思ひの紛らはしなり。

かの留まりにし人々は、宮渡り給ひて尋ね聞え給ひけるに、聞え遣らむ方なくてぞ佗び合へりける。暫し人に知らせじと、君も宜ひ、少納言も思ふ事なれば、切に口固めやりつゝ、たゞ、行方も知らず少納言が率て隠し聞えたるとのみ聞えさするに、宮も言ふ甲斐なう思して、故尼君も彼處に渡り給はむ事を、いと物しと思したりし事なれば、乳母のいと差過したる心ばせのあまり、おいらかに、渡さむを便なしなどは言はで、心に任せて、率てはふらかしつるなめりと、泣く／＼歸り給ひぬ。宮「若し聞き出で奉らば告げよ」と宣ふも煩はしく。僧都の御許にも尋ね聞え給へど、跡果敢なくて、可惜らしかりし御容貌など戀しく、悲しと思す。北の方も、母君を憎しと思ひ聞え給ひける心も失せて、我が心に任せつべう思ほしけるに違ひぬるは、口惜しう思しけり。

- (一) 筆太に
- (二) 紫の邸に
- (三) 源
- (四) おとなしく
- (五) 紫の亡母

やう／＼人参り集まりぬ。御遊び相手の童へ兒ども、いと珍らかに今めかしき御有様どもなれば、思ふ事無

くて遊び合へり。君は、男君のおはせずなどしてさう／＼しき夕暮などばかりぞ、尼君を戀ひ聞え給ひて、打泣きなどし給へど、宮をば殊に思ひ出で聞え給はず。もとより見馴らひ聞え給はで慣らひ給へれば、今は唯この後の親を、いみじう睦び纏はし聞え給ふ。物よりおはすれば、先づ出で向ひて、哀れに打語らひ、御懐に入り居て、いさゝか疎く恥かしとも思ひたらず、さる方に、いみじうたき業なりけり。賢しら心あり、何くれとむつかしき筋になりぬれば、我が心地も少し違ふ節も出で來やと心置かれ、人も恨みがちに、思ひの外の事も自ら出で來るを、いとをかしき翫びなり。女など將た斯ばかりに成りぬれば、心安く打振舞ひ、隔て無きさまに起き臥しなどは、えしもすまじきを、これはいと様變りたる傳き種なりと思いためり。

- (一) 紫
- (二) 父宮を
- (三) 源
- (四) もつと年をとつて
- (五) 女
- (六) これは
- (七) 自分の娘
- (八) もう此の年頃になると

みる女だと、いゝ加減小ざかしくて

さて又萬づよりもめでたき事は、先づからぶみなどは、よに勝れたりといふも、世の人の、事に觸れて思ふ心の有様を書ける事は、唯一わたりのみこそあれ、いと粗く淺きものなり。すべて人の心といふものは、からぶみに書けるごと、一かたにつきぎりなるものにはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくしくめしく、亂れ合ひて定まり難く、さまさまの限多かるものなるを、此の物語には、さるくだくしき限々まで、残る方なく、いとも委しく細に書きあらはしたる事、曇り無き鏡に映して向ひたらむが如くにて、大方人の情のあるやうを書けるさまは、やまともろこし古へ今、行く先にも、たぐふべきふみはあらじとぞ覺ゆる。

——玉の小櫛二の巻——

左衛門督「あなかしこ、此のわたりに若紫やさぶらふ」とうかゞひ給ふ。源氏にかゝるべき人見え給はぬに、彼の上はまいていかでものし給はむと聞き居たり。

——紫式部日記——

末摘花

(一八卷—一九正月)

はかなく偲ぶ夕顔の露——大輔命婦の物語・故常陸宮姫君の御上——忍
 びて聞く琴の音・見顯す頭中將のすき心——荒れた籬に琴の主を訪ふ源
 氏・無言の女君——行幸試樂の頃——雪の夜の再訪・胸潰る、「普賢菩
 薩の乗物」——歳暮末摘花より贈られた衣服——正月の訪問——源氏と
 紫紅花の戯れ



思へども猶飽かさりし夕顔の露に後れし程の心地を、年月経れど思し忘れず、
 此處も彼處も、打解けぬ限りの、氣色ばみ心深き方の御いどましさに、氣近く
 懐かしかりし哀れに、似るものなう戀しく覺え給ふ。いかで、事々しき覺えは
 なく、いとらうたげならむ人の、慎ましき事ならむ、見つけてしがなと、懲
 りすまに思し渡れば、少し故づきて聞ゆる邊は、御耳留まり給はぬ限無きに、

さてもやと思し寄るばかりのけはひある邊にこそは、一行をもほめかし給ふめるに、靡き聞えず持て離れ
 たるは、をさくあるまじきぞ、いと目馴れたるや。強顔う心強きは、諭しへなう情後る、眞實さなど、餘
 り物のほど知らぬやうに、さても過ぐし果てず、名残なくくづほれて、直々しき方に定まりなどするもあ
 れば、宣ひさしつるも多かりけり。かの空蟬を、物の折々には妬う思し出づ。萩の葉も、さりぬべき風の便
 りある時は、驚かし給ふ折もあるべし。火影の亂れたりしさまは、又さやうにても見まほし
 く思す。大方、名残なき物忘れをぞ、えし給はざりける。

兵部大輔
 —大輔命婦
 左衛門乳母
 筑前守

左衛門の乳母とて、大貳の尼君の差次に思いたるが女、大輔の命婦とて、内裏に侍ふ。王家
 裔の、兵部大輔なるが女なりけり。いといたう色好める若人にてありけるを、君も召し使ひ
 などし給ふ。母は筑前守の妻にて、下りにければ、父君の許を里にて行き通ふ。故常陸の親
 王の、末に儲けていみじう傳き給ひし御女、心細くて残り居給へるを、事の序に語り聞えけ

(一) 葵と御息所
 (二) 對抗心から

(三) これは成功しき
 うだと (四) 文の

(五) 普通の人妻に
 (六) 軒端萩 (七) 皇子

の血統 (八) 常陸太
 守に任せられた親王

(九) 父に先立たれて
 (一〇) 命婦が源に

れば、哀れの事やとて、問ひ聞き給ふ。愈心ばへ容貌など深き方はえ知り侍らす。搔潜め人疎うもてなし給へば、さべき宵居など、物越にてぞ語らひ侍る。琴をぞ懐かしき語らひ人と思ひ給へる」と聞ゆれば、眞三つの友にて、いま一種やうたであらむ」とて、眞「我に聞かせよ。父親王のさやうの方にいと由づきて物し給ひければ、おしなべての手遣にはあらじと思ふ」と語らひ給ふ。眞「さやうに聞召すばかりには侍らずやあらむ」と言へば、眞「いたう氣色ばましや。この頃の臘月夜に忍びて物せむ。罷出よ」と宣へば、煩はしと思へど、内裏邊も長閑やかなる、春のつれづれに罷出ぬ。父の大輔の君は外にぞ住みける。こゝには時々ぞ通ひける。命婦は、繼母の邊は住みもつかず、姫君の御邊を睦びて、此處には來るなりけり。宣ひしも著く、十六夜の月をかしき程におはしたり。眞いと傍痛き業かな、物の音澄むべき夜のさまにも侍らざるに」と聞ゆれど、眞猶あなたに渡りて、たゞ一聲催し聞えよ。空しくて歸らむが妬かるべきを」と宣へば、打解けたる住處に居る奉りて、後めたる辱しと思へど、寢殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかしきを見出して物し給ふ。よき折かなと思ひて、眞御琴の音如何にまさり侍らむと、思ひ給へらるゝ夜のけはひに、誘はれ侍りてなむ。心慌しき出入に、え承らぬこそ口惜しけれ」と言へば、末摘「聞き知る人こそあなれ。百敷に行き交ふ人の聞くばかりやは」とて、召し寄するもあいなう、いかゞ聞き給はむと胸潰る。仄かに搔き鳴らし給ふ。をかしう聞ゆ。何ばかり深き手ならねど、物の音がらの筋異なるものなれば、聞きにくくも思されず。いといたう荒れ渡りて寂しき所に、さばかりの人の、古めかしう、所狭くかしづき居るたりけむ名

(一) 琴・詩・酒。今一種は即ち酒
三友者爲誰、琴罷輦舉酒、酒罷輦吟詩(白氏文集、北窓三友の句)

(二) ひどく勿體がつくのだね
お前も姫の所へ
常陸宮程の方が

残なく、如何に思ほし残す事無からむ。斯様の所にこそは、昔物語にも哀れなる事どもありけれなど、思ひ續けて、物や言ひ寄らましと思せど、うちつけにや思さむと、心恥かしくてやすらひ給ふ。命婦かどある者にて、いたう耳馴らさせ奉らじと思ひければ、眞曇りがちに侍るめり。客人の來むと侍りつる、厭ひ顔にもこそ。今、心長閑にを。御格子参りなむ」とて、いたうもそゝのかさで歸りたれば、眞なかゝなる程にても止みぬるかな。物聞き分く程にもあらで、妬う」と宣ふ氣色、をかしと思したり。眞同じくは、け近き程のけはひ立聞きせさせよ」と宣へど、心にくくてと思へば、眞いでや、いと微なる有様に思ひ消えて、心苦しげに物し給ふめるを、後めたきさまにや」と言へば、實にさもある事。俄に我も人も打解けて語らふべき人の際は、際とこそあれなど、哀れに思さるゝ人の御程なれば、眞猶さやうの氣色を仄めかせ」と語らひ給ふ。又契り給へる方やあらむ、いと忍びて歸り給ふ。眞上の眞實におはしますと持て惱み聞えさせ給ふこそ、をかしう思う給へらるゝ折々侍れ。斯様の御宴れ姿を、如何でかは御覽じつけむ」と聞ゆれば、立ち返り打笑ひて、眞他人の言はむ様に、咎な顯はされそ。これを仇々しき振舞と言はば、女の有様苦しからむ」と宣へば、餘り色めいたりと思して、折々斯う宣ふを、恥かしと思ひて物も言はず。寢殿の方に、人のけはひ聞く様もやと思して、やをら立ち出で給ふ。透垣のたゞ少し折れ残りたる隠れの方に、立ち寄り給ふに、固より立てる男ありけり。誰ならむ、心懸けたる好色者ありけりと思して、陰につきて立ち隠れ給へば、頭中将なりけり。この夕つ方、内裏より諸共に罷出給ひけるを、やがて大殿にも寄らず、

(一) 末摘は
(三) 氣のきいた女

(二) 私が居ないと
(四) 床しがらせうと

(三) 立聞きはどうも
(五) 身分が違ふ

(七) 末摘の御身分
(八) 桐壺帝(九) 源は

(一〇) そなた達の
(一一) 源が

二條院にもあらで、引き別れ給ひけるを、何方ならむとたゞならで、我も行く方あれど、跡につきて親ひけり。怪しき馬に、狩衣姿のないがしろにて來ければ、え知り給はぬに、流石に、かう異方に入り給ひぬれば、心も得ず思ひける程、物の音に聞きついて立てるに、歸りや出で給ふと、下待つなりけり。君は、誰ともえ見分き給はで、我と知られじと、拔足に歩み退き給ふに、ふと寄りて、興振り捨てさせ給へる辛さに、御送り仕う奉りつるは。

諸共に大内山は出でつれど入る方見せぬ十六夜の月

と恨むるも妬けれど、此の君と見給ふに、少しをかしろなりぬ。興人の思ひ寄りぬ事よ」と憎むく、

源里分かぬ影をば見れど行く月の入るさの山を誰か尋ぬる

興「斯う慕ひ歩かば、如何にせさせ給はむ」と聞え給ふ。興眞は、斯様の御歩きにも、隨身がそこそはかくしき事もあるべけれ。後らさせ給はでこそあらめ。寔れたる御歩きは、輕々しき事も出で來なむ」と、押し返し諫め奉る。斯うのみ見つけらるゝを、妬しと思せど、かの撫子はえ尋ね知らぬを、重き功に、御心のうちに思し出づ。各々契れる方にも、甘えて、え行き別れ給はず。一つ車に乗りて、月のをかしき程に、雲隠れたる道の程、笛吹き合はせて大殿におはしぬ。先驅なども追はせ給はず、忍びて入りて、人見ぬ廊に御直衣ども召して著替へ給ひ、強顔う今來るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、左大臣例の聞き過し給はで、高麗笛取り出で給へり。いと上手におはすれば、いと面白う吹き給ふ。御琴召して、内にも、この

(一) 無造作な風
(二) 何處でも照らす

(三) 入る先までも突
きとめるとは

(四) 御供次第で成功
(五) 夕顔の娘玉鬘(帯木卷・夕顔巻参照)

(六) 大手柄に

(七) 狛笛、高麗樂に
用ゐる笛

方に心得たる人々に弾かせ給ふ。中務の君、わざと琵琶は弾けど、頭の君心懸けたるを持って離れて、唯この邂逅なる御氣色の懐かしきをば、え背き聞えぬに、おのづから隠れ無くて、大宮なども、宜しからず思しなりたれば、物思はしくはしたなき心地して、すさまじげにて寄り臥したり。絶えて見奉らぬ所かけ離れなむも流石に心細く、思ひ亂れたり。君達は、ありつる琴の音を思し出でて、哀れげなりつる住居のさまなども、様變へてをかしろ思ひ續け、豫事に、いとをかしろうらうたき人の、さて年月を重ね居たらむ時、見初めていみじう心苦しくば、人にも持て騒がるばかりや、我が心もさま悪しからむ、などさへ中將は思ひけり。この君の斯う氣色ばみ歩き給ふを、まさにさては過し給ひてむやと、なま妬う危がりけり。その後此方彼方より、文など遣り給ふべし。いづれもく返り事見えす、覺束なく心疚しきに、餘りうたてもあるかな。さやうなる住居する人は、物思ひ知りたる氣色、果敢なき木草、空の氣色につけても、取り成しなどして、心ばせ推し量らるゝ折々あらむこそ哀れなるべけれ。重しとても、いと斯う餘り埋れたらむは、心づきなく悪びたりと、中將はまいて心苛れしけり。例の隔て聞え給はぬ心にて、興しかくの返り事は見給ふや。試みにかすめたりしこそ、はしたなくて止みにしか」と憂ふれば、さればよ、言ひ寄りにけるをやと微笑まれて、興いさ見むとしも思はねばにや、見るとしも無し」と答へ給ふを、人分きしけると妬う思ふ。君は深うしも思はぬ事の、斯う情なきをすさまじく思ひなり給ひにしかど、斯うこの中將の言ひ歩きけるを、

(一) 想を寄せる
(二) 源氏の君の
(三) 葵上母宮

(四) 源と頭
(五) 假に。以下頭中
の心

(六) 源と頭

(七) 返事を見たといふ程でもない
(八) 末摘の冷淡なのを

言多く言ひ馴れたらむ方にぞ靡かむかし。したり顔にて、もとの事を思ひ放ちたらむ氣色こそ、憂はしかるべけれと思して、命婦を、眞實に語らひ給ふ。覺束なう持て離れたる御氣色なむ、いと心憂き。すきくしき方に、疑ひ寄せ給ふにこそあらめ。さりとも短き心はえ遣はぬものを。人の心の長閑やかなる事無くて、思はずにのみあるになむ、自ら我が過にもなりぬべき。心長閑にて、親兄弟の持て扱ひ怨むるも無う、心安からむ人は、なかくなむらうたかるべきを」と宣へば、魚いでや、さやうにをかしき方の御笠宿には、えしもやと、つき無げにこそ見え侍れ。偏に物慎みし、引き入りたる方はしも、あり難う物し給ふ人になむ」と、見る有様語り聞ゆ。尋らうくじう、かどめきたる心は無きなめり。いと兒めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」と思し忘れず宣ふ。瘧病に煩ひ給ひ、物思ひの紛れも、御心の暇なきやうにて春夏過ぎぬ。

秋の頃ほひ、靜かに思し續けて、かの砧の音も、耳につきて聞きにくかりしさへ、戀しう思し出でらる、儘に、常陸宮には屢々聞え給へど、猶覺束なうのみあれば、世づかす心疚しう、負けては止まじの御心さへ添ひて、命婦を責め給ふ。尋、如何なるやうぞ。いと斯かる事こそまだ知らね」と、いとものしと思ひて宣へば、いとほしと思ひて、命婦持て離れて、似げなき御事とも、おもむけ侍らず。唯大方の御物慎みのわりなきに、

- (一) 女が 事があると、それ
- (二) 初め言ひ寄つた 自分が ば、眩笠の、ひぢ
- (三) 女の 門、行き過ぎか がかさの、雨もや降
- (四) 心ならず別れる ねてや、我が行か ならぬ、しでたを
- (五) 妹が門や、せな ざ、雨宿り、笠宿
- (六) 珍らしく 若紫巻初、七一
- (七) 若紫巻初、七一 頁参照
- (八) 夕顔巻、五〇頁 参照

手をえ差し出で給はぬとなむ見給ふる」と聞ゆれば、尋それこそは世づかぬ事なれ。物思ひ知るまじき程、獨身をえ心に任せぬ程こそ、さ様にかゞやかしきもことわりなれ。何事も思ひ靜まり給へらむと思ふにこそ。そこはかとなく、つれづれに心細うのみ覺ゆるを、同じ心に答へ給はむは、願ひ叶ふ心地なむすべき。何やかやと世づける筋ならで、その荒れたる簀子に佇まほしきなり。いと覺束なう心得ぬ心地するを、彼の御許し無くともたばかれかし。心苛れし、うたてあるもてなしには、よもあらじ」など語らひ給ふ。なほ世に在る人の有様を、大方なるやうにて聞き集め、耳とどめ給ふ癖の付き給へるを、さうくしき宵居などに、果敢なき序に、さる人こそとばかり聞え出でたりしに、斯く態とがましう宣ひ渡れば、生煩はしく、姫君の御有様も、似つかはしく由めきなどもあらぬを、なかくなる導きに、いとほしき事や見えなむと思ひけれど、君の斯う眞實に宣ふに、聞き入れざらむも僻々しかるべし。父親王のおはしける折にだに、舊りにたる邊とて、音なひ聞ゆる人も無かりけるを、まして今は淺茅分くる人も跡絶えたるに、斯く世に珍らしき御けはひの漏り匂ひ來るをば、生女房なども笑み設けて、なほ聞え給へと、嗾し奉れど、淺ましう物慎みし給ふ心にて一向に見も入れ給はぬなりけり。命婦は、さらばさりぬべからむ折に、物越に聞え給はむ程、御心につかずば、さても止みぬかし。又さるべきにて、假にもおはし通はむを、咎め給ふべき人も無しなど、仇めきたる逸り心は打思ひて、父君にも、斯かる事なども言はざりけり。

八月二十餘日、宵過ぐるまで待たる、月の心許なきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、古への事語り出で、打泣きなどし給ふ。いと好き折かなと思ひて、御消息や聞えつらむ、例のいと忍びてお

- (一) 若少の
- (二) 汝が心配するやうな
- (三) 姫は
- (四) 兵部大輔
- (五) 姫が

はしたり。月やうく出でて、荒れたる籬の程疎ましく、打眺め給ふに、琴嗾きんそくされて、仄かに掻き鳴らし給ふ程、けしうはあらず。少し今めきたる氣をつけばやとぞ、亂れたる心には、心もとなく思ひ居たる。人目し無き所なれば、心安く入り給ふ。命婦を呼ばせ給ふ。今しも驚き顔に、いと傍痛き業かな。しかくこそおはしましたなれ。常に斯う恨み聞え給ふを、心に叶はぬ由のみ、聞え拒ひ侍れば、自らことわりも聞え知らせむと、宣ひ渡るなり。いかゞ聞え返さむ。並々の容易き御振舞ならねば心苦しきを、物越にて、聞え給はむ事聞召せ」と言へば、いと恥かしと思ひて、先人に物聞えむやうも知らぬを」とて、奥さまへ膝入り給ふさま、いと初々しげなり。打笑ひて、いと若々しうおはしますこそ心苦しけれ。限りなき人も、親の扱ひ後見聞え給ふ程こそ、若び給ふことわりなれ。斯ばかり心細き御有様に、なほ世を盡きせず思し憚るは、つきなうこそ」と教へ聞ゆ。流石に、人の言ふ事は強うも辭びぬ御心にて、先答へ聞えてたゞ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」と宣ふ。命婦いのとなどには便なう侍りなむ。推し立ちて、あはくしき御振舞などは、よも」などいよいよ言ひなして、二間の際なる障子、手づからいと強く鎖して、御褥打置き引整ふ。いと慎ましげに思したれど、斯う様の人に物言ふらむ心ばへなども、夢にも知り給はざりければ、命婦の斯う言ふを、ある様こそはと思ひて物し給ふ。乳母うぶだつ老人などは、曹司に入り臥して、夕惑ゆふまどひしたる程なり。若き人二三人あるは、世に愛でられ給ふ御有様を、ゆかしきものに思ひ聞えて、心化粧し合へり。宜しき御衣奉り換へ繕ひ聞ゆれば、正身は、何の心化粧もなくしておはす。男は、いと盡きせぬ御様を、打忍び用意し給へる御けはひ、いみじうなまめきて、見知らむ人にこそ見せめ、何の榮えあるまじき邊を、あな

- (一) 命婦が
- (二) 命婦が
- (三) 佛像など安置する部屋
- (四) 宵の睡りこけ
- (五) 心づくるひ
- (六) 二間と廂との隔ての
- (七) 背の睡りこけ

いとほしと命婦は思へど、たゞ、おほどかに物し給ふをぞ後安う、差過ぎたる事は見え奉り給はじと思ひける。我が常に責められ奉る罪避り事に、心苦しき人の御物思ひや出で來むなど、安からず思ひ居たり。君は、人の御程を思せば、戯れくつがへる今様の由はみよりは、こよ無う奥ゆかしう思し渡るに、とかう嗾そくされて、膝行寄り給へるけはひ、忍びやかに、裏衣うらひの香いと懐かしう薫り出でて、おほどかなるを、さればよと思さる。年頃思ひ渡るさまなど、いとよく宣ひ續くれど、まして近き御答は絶えて無し。源「わりなのわざや」と打歎き給ふ。

源「幾そ度君がしどまに負けぬらむ物な言ひそと言はぬ頼みたのしみに宣ひも捨ててよかし。玉禪ぎよくぜん苦し」と宣ふ。女君の御乳母子おのちち、侍従とていとばかりかなる若人、いと心許無う、傍痛しと思ひて、差寄りて聞ゆ。

侍 鐘撞きてとぢめむ事は流石にて答へま憂きぞ且はあやなき
いと若びたる聲の、殊に重りかならぬを、人傳にはあらぬやうに聞えなせば、程よりは甘えてと聞き給へど、珍らしきに、真なか／＼口塞がるわざかな。

言はぬをも言ふに勝ると知りながら押し籠めたるは苦しかりけり
何やかやと果敢なき事なれど、をかしき様にも眞實にも宣へど、何の甲斐なし。いと斯かるも、さま變へて

- (一) 姫の
- (二) 末摘花
- (三) 香の名
- (四) 沈黙
- (五) のをせめての頼
- (六) ことならば思は
- (七) ずとやは言ひ果て
- (八) 確なる(古今、誹
- (九) 諧歌)
- (十) 法會の論議の終
- (十一) を知らせるしどま
- (十二) の鐘

思ふ方異にものし給ふ人にやと、妬くて、やを押し開けて入り給ひにけり。命婦、あなうたて、搦め給へると、いとほしければ、知らず顔にて我が方へ去にけり。この若人ども將た、世に類なき御有様の音聞に罪許し聞えて、おどろくしうも歎かれず、たゞ思ひも寄らず俄にて、さる御心も無きをぞ思ひける。正身は、唯我にもあらず、恥かしく憤しきより、外の事又無ければ、今は斯かるぞ哀れなるかし。まだ世馴れぬ人の、打冊かれたると、見免し給ふものから、心得すなまいとほしと覺ゆる御様なり。何事につけてかは御心の留まらむ、打呻かれて、夜深う出で給ひぬ。命婦は如何ならむと、目覺めて聞き臥せりけれど、知り顔ならじとて、「御送りに」とも聲作らず。君もやをら忍びて出で給ひにけり。

二條院におはして、打臥し給ひても、なほ思ふに叶ひ難き世にこそと思し續けて、軽らかならぬ人の御程を、心苦しとぞ思しける。思ひ亂れておはするに頭中将おはして、興こよなき御朝寐かな。故あらむかしとこそ思ひ給へらるれ」と言へば、起き上り給ひて、興心安き獨寝の床にて弛びにけり。内裏よりか」と宣へば、興然か。罷出侍るまゝなり。朱雀院の行幸、今日なむ樂人・舞人定めらるべき由承りしを、大臣にも傳へ申さむとてなむ罷出侍る。やがて歸り参りぬべう侍り」と、急がしげなれば、興さらば、諸共に」とて、御粥・強飯召して、客人にも参り給ひて、引續けたれど、一つに奉りて、猶いと眠たげなりと咎め出でて、隠し給ふ事多かりとぞ、恨み聞え給ふ。事ども多く定めらるゝ日にて、内裏に侍ひ暮し給ひつ。彼處には文をだにと、いとほしく思し出でて、夕つ方ぞありける。雨降り出でて所狭くもあるに、笠宿せむと、將た思されず

(一) 油断させて
(二) 侍従等

(三) 末摘花の身分
(四) 直に又内裏へ

(五) 車を二つ
(六) 頭中将が

(七) 厄介
(八) 泊りに行かうとは

やありけむ。彼處には、待つ程過ぎて、命婦も、いといとほしき御様かなと、心憂く思ひけり。正身は、御心の中に恥かしう思ひ續け給ひて、今朝の御文の暮れぬるも、とかうしもなか／＼思ひ分き給はざりけり。

源「夕霧の晴るゝ氣色もまだ見ぬにいぶせさ添ふる宵の雨かな

雲間待ち出でむ程、如何に心許なう」

とあり。おはしますまじき御氣色を、人々胸潰れて思へど、なほ聞えさせ給へと、嗾し合へれど、いとど思ひ亂れ給へる程にて、え形の様にも續け給はねば、夜更けぬとて、侍従ぞ例の教へ聞ゆる。

＊晴れぬ夜の月待つ里を思ひ遣れ同じ心にながめせずとも

口々に責められて、紫の紙の、年経にければ灰後れ古めいたるに、御手は流石に文字強う、中さだの筋にて、上下等しく書い給へり。見る甲斐なう打置き給ふ。如何に思ふらむと、思ひ遣るも安からず。斯かる事を、悔しなどはいふにやあらむ。さりとて如何はせむ。我がざりとも心長う見果ててむと、思しなす御心を知らねば、彼處にはいみじうぞ歎い給ひける。

大臣、夜に入りて罷出給ふに、引かれ奉りて、大殿におはしましたぬ。行幸の事を興ありと思ほして、君達集まり給ひ、各々舞ども習ひ給ふを、その頃の事にて、物の音ども、常よりも耳かしがましくて、方々挑みつ、例の御遊ならず、大筆策、尺八の笛などの、大聲を吹き上げつゝ、太鼓をさへ、勾欄の下に轉ばし寄せ、手づから打鳴らし、遊びおはさうす。御暇無きやうにて、切に思す所ばかりにこそ、ぬすまはれ給へ、かの邊には、いと覺束なくて、秋暮れ果てぬ。猶頼み來し甲斐なくて過ぎ行く。

(一) 源からの手紙を

(二) あくがぬけて、色が褪せて

(三) 中古風の

(四) 眼をぬすんで行かれる

(五) 末摘花

行幸近くなりて、試樂などのしる頃ぞ、命婦は参れる。如何にぞ」など問ひ給ひて、いとほしと思したり。有様聞えて、愈いと斯う持て離れたる御心ばへは、見給ふる人さへ心苦しく」など、泣きぬばかり思へり。心にくくもてなして止みなむと思へりし事を朽いてける、心も無くこの人の思ふらむをさへ思す。正身の、物も言はで思し埋もれ給ふらむさま、思ひ遣り給ふもいとほしければ、暇なき程ぞや。わりなし」と打敷い給ひて、物思ひ知らぬ様なる心様を、暫し懲さむと思ふぞかし」と、微笑み給へる、若う美しげなれば、我も打笑まるゝ心地して、わりなの人に恨みられ給ふ御齡や、思ひ遣り少なう、御心の儘ならむもことわりと思ふ。この御急ぎの程過してぞ時々おはしける。

かの紫の縁尋ね取り給ひては、その慈みに心入り給ひて、六條邊にだに、離れ勝り給ふめれば、まして荒れたる宿は、哀れに思し怠らずながら、物憂きぞわり無かりける。所狭き物恥を見顯はさむの御心も、殊に無くて過ぎ行くを、打返し見勝りするやうもありかし、手探りのたどしきに、怪しう心得ぬ事もあるにや、見てしがなと思ほせど、けさやかに取りなさむも眩し。打解けたる宵居の程、やをら入り給ひて、格子の間より見給ひけり。されど、自らは見え給ふべくもあらず。几帳などいたく損はれたるものから、年經にける立處變らず、押遣りなど亂れねば、心許なくて、御達四五人居たり。御臺、祕色やうの唐土のものなれ

(一) 命婦が自分に姫を床しがらせるだけに止めておかうとしたのを破つた

(二) 命婦
(三) 末摘の源の御年の若さでは恨む人の方が無理

(四) 恥かしがつて頻りと隠れたがる末摘花の容貌を

(五) よく見たら却つて

ど人悪きに、何の種はひも無く哀れげなる、罷出て人々食ふ。隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女房、白き衣の言ひ知らず煤けたるに、きたなげなる褶引結びつけたる腰つき、頑しげなり。流石に櫛押垂れて挿したる額つき、内教坊・内侍所の程に、斯かる者どものあるはやとをかし。かけても、人の邊に近う振舞ふ者とも知り給はざりけり。女房「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、斯かる世にも逢ふものなりけり」とて、打泣くもあり。女房「故宮おはしましし世を、などて辛しと思ひけむ。斯く頼みなくて過ぐるものなりけり」とて、飛び立ちぬべく震ふもあり。様々に人悪き事どもを憂へ合へるを、聞き給ふも傍痛ければ、立ち退きて、只今おはするやうにて、打敲き給ふ。「そ、や」などいひて、火取り直し、格子放ちて入れ奉る。侍従は齋院に参り通ふ若人にて、この頃は無かりけり。いよゝ怪しう鄙びたる限りにて、見慣らはぬ心地ぞする。いと愁ふなりつる雪、搔き垂れいみじう降りけり。空の氣色烈しう、風吹き荒れて、御殿油消えにけるを、燈し點くる人も無し。かの物に魔れし折思し出でられて、荒れたる様は劣らざるを、程の狭う、人氣の少しあるなどに慰められたど、凄う、うたて寝聴き心地する夜のさまなり。をかしうも哀れにも、様變へて心留まりぬべき有様を、いと埋れすくよかにて、何の榮え無きをぞ、口惜しう思す。

辛うじて明けぬる氣色なれば、格子手づから上げ給ひて、前の前裁の雪を見給ふ。踏み開けたる跡も無く、遙々と荒れ渡りて、いみじう寂しげなるに、振り出でて行かむ事もあはれにて、源「をかしき程の空も見給へ。盡きせぬ御心の隔てこそわりなけれ」と、恨み聞え給ふ。まだ仄暗けれど、雪の光に、いとど清らに若う見え給ふを、老人ども笑み榮えて見奉る。老女「はや出でさせ給へ。味氣無し。心美しきこそ」など教へ聞

(一) 料理も

(二) 宮女の舞樂練習所

(三) 心配だつた

(四) 夕顔巻参照

(五) この姫はひどくぐずでそつてなく

ゆれば、流石に、人の聞ゆる事をえ辭いなひ給はぬ御心にて、とかう引き繕みひて、膝ひざ行出で給へり。見ぬ様にて、外の方を眺め給へれど、後目しりめはたゞならず。如何にぞ、打解け勝りの聊かもあらば嬉うれしからむと思すも、強おちなる御心なりや。先づ居丈ゐだけの高う、を背長に見え給ふに、さればよと胸潰れぬ。打次ぎて、あな不具ふたはと見ゆるものは、御鼻なりけり。ふと目ぞ留まる。普賢菩薩ふけんぼさつの乗物と覺ゆ。淺ましう高う伸のびらかに、先の方少し垂りて色づきたる程、殊の外にうたてあり。色は、雪恥かしく白うて眞青まゐに、額つきこよ無う脹れたるに、なほ下がちなる面おもてやうは、大方おどろくしく長きなるべし。瘦せ給へる事、いとほしげにさらばひて、肩の程などは、痛げなるまで衣の上だに見ゆ。何に残り無う見顯はしつらむと思ふものから、珍らしき様のしたれば、流石に打見遣られ給ふ。頭つき髪のかゝりはしも、美しげにめでたしと思ひ聞ゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、桂けいの裾すそに溜りて、曳かれたるほど、一尺許餘りたらむと見ゆ。著給へる物どもをさへ言ひ立つるも、物言ひさが無きやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそは先づ言ひためれ。許し色のわりなう上白うしろみたる一襲ひとかき、名残なごりなう黒き桂重けいぢゆうねて、上著かみぎには黒貂くろびしの裘衣かほぎぬ、いと清らに香ばしきを著給へり。古代こたひの故づきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御装よまには、似げなうおどろくしき事、いと持てはやされたり。されど實に、この皮無うては寒からましと見ゆる御顔おんかほさまなるを、心苦しと見給ふ。何事も言はれ給はず、我さへ口閉ぢたる心地し給へど、例れいのしゞまも試みむと、とかう聞え給ふに、いたう恥らひて、口覆くちぶひし給へるさへ、鄙おろび古めかしう、事々しく儀式官ぎしきくわんの練り出でたる臂うでもち覺えて、流石に打笑み給へる氣色、

(一) 源は (二) 紅又は紫の薄色 (三) 幾そ度君がしゞまにの歌 (二二頁) (四) 笏しやくを持つた殿め (五) 儀式の官人 (六) 笏しやくを持つた殿め

(一) 普賢菩薩乗三大白象。鼻如紅蓮華色。(觀普賢經) (二) 儀式の官人

はしたなう漫まびたり。いとほしく哀れにて、いとゞ急ぎ出で給ふ。源頼もしき人無き御有様を、見初めたる人には、疎からず思ひ睦なごみ給はむこそ、本意ほんいある心地すべけれ。許しなき御氣色なれば、辛つらうなど事託ことづて、
源朝日あさひさす軒たもとの垂氷たれひは解けながらなどか氷柱こほりの結むすばほるらむ
と宣へど、唯「む」と打笑ひて、いと口重ねなるもいとほしければ、出で給ひぬ。
御車寄せたる中門なかつかどのいたう歪よがみよるばひて、夜目にこそ、著しるきながらも萬づ隠ろへたる事多かりけれ、いと哀れに寂しう荒れ惑へるに、松の雪のみ暖かげに降り積める、山里の心地して物哀れなるを、かの人々の言ひし葎つたの門は、斯様なる所なりけむかし。實に、心苦しうたげならむ人を此處こゝに居すゑて、後めたる戀しと思はばや。思ふやうなる住處すまひに、合はぬ御有様は取るべき方なしと思ひながら、我ならぬ人はまして見忍びてむや。我が斯う見馴れけるは、父親ちち王おうの後めたしとたぐへ置き給ひけむ魂たましひの導しるべなめりとぞ思さる。名橘なたちの木の埋うれたる、御隨身召して拂はせ給ふ。美み顔に、松の木のおのれ起き返りて、さと零るる雪も、名に立つ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなる程にあへしらはむ人もがなと見給ふ。御車出づべき門は、まだ開けざりければ、鍵かぎの預あづかり尋ね出でたれば、翁おきなのいとみじきぞ出で來たる。女むすめにや、孫まごにや、はしたなる大ききの女の、衣きぬは雪に逢ひて煤すすけ感ひ、寒しと思へる氣色深うて、怪しき物に、火をただ仄ひらかに入れて、袖そでぐくみに持たり。翁門おきなをえ開けやらねば、寄りて引き助くる、いと頑かたくなり。御供の人寄りてぞ開けつる。

(一) 心からは打解け (二) 馬頭等。品定、 (三) 我が袖は名に立 (四) どつちつかずの
て下さらぬ (五) 二頁参照 (六) つ末の松山か空よ (七) なし(後撰、戀四、土佐)

源「ふりにける頭の雪を見る人も劣らず濡らす朝の袖かな
幼き者は形蔽れず」と打誦し給ひて、鼻の色に出でていと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて、
微笑まれ給ふ。頭中將にこれを見せたらむ時、如何なる事を比へ言はむ。常に窺ひ來れば、今見つけられな
むと、術無う思す。尋常なる程の殊なる事無さならば、思ひ捨てても止みぬべきを、分明に見給ひては、な
か／＼哀れにしみじみて、眞實なるさまに常に訪れ給ふ。黒貂の皮ならぬ絹・綾・綿など、老人どもの著る
べき物の類、かの翁の爲まで、上下思し遣りて奉り給ふ。斯様の眞實事も恥かしげならぬを、心安く、さる
方の後見にてはぐくまむと思ほし取りて、様殊にさならぬ打解け業もし給ひけり。かの空蟬の、打解けたり
し宵の側目は、いと悪かりし容貌さまなれど、もてなしに隠されて、口惜しうはあらざりきかし。劣るべき
程の人なりやは。實に品にもよらぬわざなりけり。心ばせのなだらかに妬げなりしを、負けて止みにしかな
と、物の折毎には思し出づ。

歳も暮れぬ。内裏の御宿直所におはしますに、大輔の命婦參れり。御梳櫛などには、懸想だつ筋なう、心安
きものの、流石に宣ひ戯れなどして、使ひ馴らし給へれば、召無き時も、聞ゆべき事ある折は參り上りけり。
命「怪しき事の侍るを、聞えさせざらむも僻々しう、思ひ給へ煩ひて」と、微笑みて聞えやらぬを、源「何さ
まの事ぞ。我には裏む事あらじとなむ思ふ」と宣へば、命「いかゞは。みづからの憂へは、長くとも先づこそ
命」怪しき事の侍るを、聞えさせざらむも僻々しう、思ひ給へ煩ひて」と、微笑みて聞えやらぬを、源「何さ
まの事ぞ。我には裏む事あらじとなむ思ふ」と宣へば、命「いかゞは。みづからの憂へは、長くとも先づこそ

(一) 夜深煙花盡。霰雪白粉々。幼者形不蔽。老者體無溫。悲喘與寒氣、併入鼻中辛
(白氏文集、秦中吟、重賦の句)
(二) 末摘が生活上の身分は末摘は空蟬に

は。これはいと聞えさせにくくなむ」といたう言籠めたれば、例の艶なりと憎み給ふ。鳥かの宮より侍る御
文」とて、取り出でたり。源「ましてこれは、取り隠すべき事かは」とて、取り給ふも胸潰る。陸奥紙の厚肥
えたるに、匂ひばかりは深う染め給へり。いとよう書きおほせたり。歌も、

末摘 唐衣君が心のつらければ袂は斯くぞ濡ちつゝのみ

心得ず打傾き給へるに、包みに、衣篋の重りかに古代なる、打置きて、推し出でたり。源「これを、いかでか
は、傍痛く思ひ給へざらむ。されど、朝日の御装とて、態と侍るめるを、はしたなうはえ返し侍らす。獨り
引籠め侍らむも、人の御心違ひ侍るべければ、御覽せさせてこそは」と聞ゆれば、源「引籠められなむは辛か
りなまし。袖巻き干さむ人も無き身に、いと嬉しき志にこそは」と宣ひて、殊に物言はれ給はず。さても淺
ましの口つきや。これこそは、手づからの御事の限りなめれ。侍従こそは取り直すべかめれ。又筆の尻取る
博士ぞ無かるべきと、言ふ甲斐なく思す。心を盡くして詠み出で給へらむ程を思すに、源「いと長き方と
は、これをも言ふべかりけり」と微笑みて見給ふを、命婦面赤みて見奉る。今様色の、え免すまじく艶なう
古めきたる直衣の、裏表等しう濃やかなる、いとなほ／＼しう、端々ぞ見えたる。淺ましと思すに、この文
を擲げながら、端に手習ひすさび給ふを、側目に見れば、

源「懐かしき色とも無しに何にこの末摘花を袖に觸れけむ

(一) 末摘 (三) 檀紙 まき干さむ人もあ (四) 添削する (六) 取り所もなく平 (七) 紅花で染料に用
(三) あわ雪は今日は らなくに (五) 流行の閉色。紅 凡に、品がなく ふ。鼻と花に掛く
な降りそ白妙の袖 (萬葉、卷一〇) 梅色

色濃き花と見しかども」など、書き汚し給ふ。花の咎めを、なほ有る様あらむと、思ひ合はする折々の月影などを、いとほしきものから、をかしく思ひなりぬ。

命「紅の一花衣薄くともひたすら朽す名をし立てずば

心苦しの世や」と、いといたう馴れて獨言つを、よきにはあらねど、斯うやうの搔撫にだにあらましかばと、返すく口惜し。人の程の心苦しきに、名の朽ちなむは流石なり。人々參れば、「取り隠さむや。斯かる業は人のするものにやあらむ」と打呻き給ふ。何に御覽ぜさせつらむ。我さへ心無きやうにと、いと恥かしくてやをら下りぬ。

又の日上に侍へば、臺盤所に差覗き給ひて、悪くはや、昨日の返り事、怪しく心ばみ過ぎる」とて投げ給へり。女房達、何事ならむとゆかしがる。またらめの花の色（三〇）の如、三笠の山の少女をば棄てて」と、諷ひすさびて出で給ひぬるを、命婦はいとをかしと思ふ。心知らぬ人々は、「何ぞ、御獨笑は」と咎め合へり。命「あらず。寒き霜の朝に、搔練好める花の色合や見えつらむ。御つしり歌のいとをかしき」と言へば、女房「強ちなる御事かな。この中には、匂へる鼻も無かめり。左近の命婦・肥後の采女や交らひつらむ」など、心も得ず言ひしろふ。御返り奉りたれば、宮には女房集ひて見愛でけり。

(一) 自分も月影などで折々見た鼻の色など思ひ合せて

(二) 源の末摘花に對する情けの心

(三) 姫の名譽を貶す評判さへ

(四) せめて平凡ながらこの位にでも歌が詠めたら

(五) 身分がよいだけ

(六) 禁中

(七) そりや

(八) 氣が遣ひ過ぎれるよ

(九) たらめの、花のごと、搔練好む

(一〇) 赤い練絹

(一一) 鼻に掛く

(一二) 消し紫の色好むや(風俗歌)

(一三) 一口つつ諷ふ歌

(一四) 不詳

源達はぬ夜を隔つる中の衣手に重ねていと見もし見よとや

白き紙に、捨て書き給へるしもぞ、なか／＼をかしげなる。晦日の日夕つ方、かの御衣宮に、御料とて人の奉れる御衣一具、葡萄染の織物の御衣、又山吹か何ぞいろ／＼見えて、命婦ぞ奉りたる。ありし色合を悪しとや見給ひけむと、思ひ知らるれど、かれ將た、紅の重々しかりしをや。さりとも消えじ」と、老成人どもは定むる。「御歌も、これよりのは、ことわり聞えてした／＼かにこそあれ。御返りは唯をかしき方にこそ」など、口々に言ふ。姫君も、臆けならでし出で給へる業なれば、物に書きつけて置き給へりけり。朔日の程過ぎて、今年男踏歌あるべければ、例の所々遊びのしり給ふに、物騒がしけれど、淋しき所の哀れに思し遣らるれば、七日の日の節會果てて、夜に入りて御前より罷出給ひけるを、御宿直所にやがて泊り給ひぬるやうにて、夜更かしておはしたり。例の有様よりは、けはひ打そよめきて世づいたり。君も、少したをやぎ給へる氣色もてつけ給へり。如何にぞ、改めて引替へたらむ時とぞ、思し續けらる。日さし出づる程にやすらひなして出で給ふ。東の妻戸押し開けたれば、向ひたる廊の上もなく荒れたれば、日の脚程無くさし入りて、雪少し降りたる光に、いとけさやかに見入らる。御直衣など奉るを見出して、少し差出でて、傍臥し給へる頭つき、零れ出でたる程いとめでたし。生ひ直りを見出でたらむ時と思されて、格子引き上げ給へり。いとほしかりし物徳に、上げも果て給はで、脇息を押し寄せて、打掛けて、御鬘莖のしどけ

(一) こちちからのも

(二) け歴されはせま

(三) 公達が年始の祝ひに揃つて所々を歌舞してめぐる行

(四) 末摘花邸

(五) 白馬の節會

(六) 家の様子

(七) 末摘

(八) 新年で化粧した

(九) 末摘の姿は

(一〇) 末摘が

(一一) 格子をそれにもたせて

(一二) 生れ替り

なきを繕ひ給ふ。わりなう古めいたる鏡臺・唐櫛匣・搔上の函など取り出でたり。流石に、男の御具さへ仄ほろ仄ほろあるを、戯あそれてをかしと見給ふ。女の御装束、今日は世づきたりと見ゆるは、ありし筈の心ばへさながらなりけり。さも思し寄らず。興ある紋つきて著しき上著しばかりぞ、怪しとは思しける。源「今年だに、聲少し聞かせ給へかし。待まちたるものは差置かれて、御氣色の改あらまらむなむゆかしき」と宣へば、末しゆ緒しゆ「轉る春は」と、辛うじて戦たたかし出でたり。源「さりや。年経ぬるしるしよ」と打笑ひ給ひて、「夢かと思ふ」と、打誦じて出で給ふを、見送りて添そひ臥し給へり。口覆くはの側目そばめより、猶かの末摘花、いと匂ひやかに差出でたり。見苦しのわざやと思さる。

二條院におはしたれば、紫の君いとも美しき片生かたぎにて、紅くはは斯う懐かしきもありけりと見ゆるに、無紋の櫻つばなの細長こほろ、なよやかに著つなして、何心も無くてものし給ふ様、いみじうらうたし。古代の祖母君おばきみの御名残おのなごにて、齒黒はぐろめも未だしかりけるを、引き繕はせ給へれば、眉のけさやかになりたるも、美しう清らなり。心から、など斯う憂うれき世を見扱あらむ。斯く心苦しきものも見てゐたらでと思しつゝ、例の諸共しよともに難遊いひなびし給ふ。繪など畫かきて色どり給ふ。萬づにをかしうさび散らし給ひけり。我も畫かき添へ給ふ。髪いと長き女を畫かき給ひて、鼻はなに紅べにをつけて見給ふに、圖かたに畫かきても見ま憂うれきさましたり。我が御影の鏡臺に映れるが、いと清らなるを見給ひて、手づからこの紅花あかばなを畫かきつけ、匂はして見給ふに、斯くよき顔だに、さて交まれらむ

- (一) 源から贈つた筈
- (二) 源は
- (三) あら玉の年たち

かへるあしたより
待たるものは驚
の聲(拾遺、春、
素性法師)

(四) 百千鳥囀る春は
物毎に改まれども
我はふりゆく(古
今、春上)

(五) 忘れては夢かと
ぞ思ふ思ひきや雪
踏み分けて君を見

(六) 若い上流婦人
の着る服
むとは(伊勢物語、業平)

は見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひ給ふ。源「まろが、斯く不具かたはになりなむ時、如何いかならむ」と宣へば、源「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむと危あやく思ひ給へり。空拭そらぬひをして、源「更にこそ白しろまね。用無もちきすさびわさなりや。内裏うちに如何に宣はむとすらむ」と、いと眞實まことに宣ふを、いといとほしと思して、寄りて御硯の瓶の水に、陸奥紙むつを濡ぬらして拭ぬぎ給へば、源「平仲へいぢゆうがやうに色どり添へ給ふな。赤あかからむはあへなむ」と戯あそれ給ふ様、いとをかしき妹背いもせと見え給へり。日のいと麗うらかなるに、いつしかと霞あみ渡れる梢すさどもの、心もと無なき中にも、梅は氣色きしきばみ微笑ほみ渡れる、取り分わきて見ゆ。階か隠かくしの下の紅梅べにうめ、いと疾はやく咲く花はなにて、色づきにけり。

源「紅くはの花ぞあやなく疎うまる、梅の立枝たちえは懐かしけれど

いでや」と、あいななく打呻うかれ給ふ。あないとほし。斯かる人々の末々い如何いかなりけむ。

- (一) 墨を入れたのを知らずに、硯の水を目に塗つてそら泣なきた
- (二) 平仲の好色談(宇治大納言物語)平仲は平貞文。狂言墨塗女参照
- (三) 我慢も出来よう
- (四) 屋根のある車寄せ
- (五) 鼻に掛く

近松云ひけるは、惣じて淨瑠璃は、人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて、文句皆働を肝要とする活物なり。殊に、歌舞伎の生身の人の藝と、芝居の軒を並べて爲すわざなるに、正根なき木偶（死木）に、さまざまの情を持たせて、見物の感をとらんとする事なれば、大かたにては、妙作といふに至り難し。某若き時、大内の草紙を見待る中に、節會の折節、雪いたら降り積りけるに、衛士に仰せて、橋の雪掃はせられければ、傍なる松の、枝もたわゝなるが、怨めしげに跳ね返りて」と書けり。是、心なき草木を、開眼したる筆勢也。その故は、橋の雪を掃はせらるゝを、松が羨みて、おのれと枝を跳ね返して、たわゝなる雪を剔ね落して恨みたる氣色、さながら活きて働く心地ならずや。是を手本として、我淨瑠璃の精神（まがね）を入るゝ事を悟れり。

—— 難波 土 産 ——

紅葉賀

(一八十月 — 一九秋)

朱雀院行幸の試樂・源氏の青海波——朱雀院行幸——紫の雜遊
び——舅左大臣の厚き傅き——紫を慈しむ源氏——老源内侍に
戯れる源氏と頭中將の獵奇趣味



朱雀院の行幸は、神無月の十日餘なり。よの常ならず面白かるべき度の事なりければ、御方々、物見給はぬ事を口惜しがり給ふ。上も、藤壺の見給はざらむを、飽かず思さるれば、試樂を御前にてせさせ給ふ。源氏の中將は、青海波をぞ舞ひ給ひける。片手には大殿の頭中將、容貌用意人には異なるを、立ち並びては、花の傍の深山木なり。入り方の日影さやかにさしたるに、樂の聲増り、物の面白き程に、同じ舞の足踏み、面もち、世に見えぬさまなり。詠などし給へるは、これや佛の御迦陵頻伽の聲ならむと聞ゆ。面白くあはれなるに、帝涙落し給ふ。上達部・親王達も、皆泣き給ひぬ。詠果てて、袖打直し給へるに、待ち取りたる樂の賑ははしきに、顔の色合増りて、常よりも光ると見え給ふ。春宮の女御、斯くめでたきにつけても、たゞならず思して、「神など、空に愛でつべき容貌かな。うたてゆゝし」と宣ふを、若き女房などは、心憂しと耳留めけり。宮はやがて御宿直なりけり。昔今日の試樂は、青海波に事皆盡きぬ。片手もけしうはあらずこそ見えつれ。舞のさま、手遣ひなむ、家の子は殊なる。この世に名を得たる舞の師の男どもも、げにいと賢けれど、兒々しう艶いたる筋を、えなむ見せぬ。試みの日斯く盡くしつれば、紅葉の陰やさうしくと思へど、見せ奉らむの心にて、用意せさせつる」など聞え給ふ。行幸には、親王達など世に残る人無く仕う奉り給へり。春宮もおはします。例の樂の船ども漕ぎ廻りて、唐土・高麗と盡くしたる舞ども種多かり。樂の聲、鼓の音、世を響かす。一日の源氏の御夕影、ゆゝしう思さ

- (一) 舞に合せて歌
- (二) 詞を歌ふこと
- (三) 弘徽殿女御
- (四) 藤壺
- (五) 大まかな
- (六) 朱雀院行幸當日
- (七) 樂人が乗つて奏樂
- (八) 神隱しにでも
- (九) 良家の
- (十) 朱雀院行幸當日
- (十一) 樂人が乗つて奏樂
- (十二) 神隱しにでも
- (十三) 藤壺
- (十四) 大まかな
- (十五) 朱雀院行幸當日
- (十六) 樂人が乗つて奏樂
- (十七) 神隱しにでも
- (十八) 良家の
- (十九) 朱雀院行幸當日
- (二十) 樂人が乗つて奏樂
- (二十一) 神隱しにでも
- (二十二) 藤壺
- (二十三) 大まかな
- (二十四) 朱雀院行幸當日
- (二十五) 樂人が乗つて奏樂
- (二十六) 神隱しにでも
- (二十七) 良家の
- (二十八) 朱雀院行幸當日
- (二十九) 樂人が乗つて奏樂
- (三十) 神隱しにでも

れて、御誦經など所々にせさせ給ふを、ことわりと哀れがり聞ゆるに、春宮の女御は、強ちなりと憎み聞え給ふ。垣代など、殿上人・地下も、心殊なりと世の人に思はれたる、有職の限り整へさせ給へり。宰相二人、左衛門督・右衛門督、左右の樂の事を行ふ。舞の師どもなど、世になべてならぬを取りつゝ、各々籠り居てなむ習ひける。木高き紅葉の陰に、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたる物の音どもに、合ひたる山の松風、眞の深山風と聞えて吹き迷ひ、色々に散り交ふ木の葉の中より、青海波の輝き出でたる様、いと怖ろしきまで見ゆ。挿頭の紅葉いたう散り過ぎて、顔の匂ひに氣壓されたる心地すれば、御前なる菊を折りて、左大將挿し替へ給ふ。日暮れかゝる程に、氣色ばかり打時雨れて、空の氣色さへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々移ろひえならぬを挿頭して、今日は又なき手を盡くしたる。入綾の程そゞろ寒く、此の世の事とも覺えず。物見知るまじき下人などの、木の下岩隠れ、山の木の葉に埋れたるさへ、少し物の心知るは涙落しけり。承香殿の御腹の四の御子、まだ童にて、秋風樂舞ひ給へるなむ、さし次ぎの見物なりける。是等に面白さの盡きにければ、他事に目も移らず、却りては事醒ましにやありけむ。その夜、源氏の中將正三位し給ふ。頭中將正下の加階し給ふ。上達部達は、皆さるべき限りの喜びし給ふも、この君に引かれ給へるなれば、人の目をも驚かし、心をも悦ばせ給ふ昔の世ゆかしげなり。

大殿にはいとゞ、かの若草尋ね取り給ひてしを、二條院には人迎へ給へりと人の聞えければ、いと心づき無し

- (一) 青海波の時、樂 屋の外に並ぶ樂人の一團
- (二) 左は唐樂、右は 高麗樂
- (三) 承香殿女御所生 桐壺帝第四皇子
- (四) 從四位上から正四位下へ
- (五) 源の前世
- (六) 葵が一番
- (七) 葵が一番

と思いたり。内々の有様は知り給はず、さも思さむは理なれど、心美しう例の人の様に怨み宣はば、我もうらなく打語りて慰め聞えてむものを、思はずにのみ取りない給ふ御心づき無さに、さもあるまじきすさび事も出で来るぞかし。人の御有様の片ほに、その事の飽かぬと覺ゆる疵もなし、人より先に見奉り初めてしかば、哀れにやんごとなき方に、思ひ聞ゆる心をも知り給はぬ程こそあらめ、終には思し直されなむと、穩しく輕しからぬ御心の程も、自らと頼まるゝ方は殊なりけり。幼き人は、見付い給ふ儘に、いとよき心様容貌にて、何心もなく睦れ纏はし聞え給ふ。暫し、殿の内の人にも誰と知らせじと思して、なほ離れたる對に、御しつらひ二なくして、我も明暮入りおはして、萬づの御事どもを教へ聞え給ふ。手本書きて習はせなどしつゝ、たゞ外なりける御女を迎へ給へらむ様にぞ思したる。政所・家司などを初め、殊に分ちて、心もとなからず仕う奉らせ給ふ。惟光より外の人は、覺束なくのみ思ひ聞えたり。かの父官も、え知り聞え給はざりけり。姫君は、なほ時々思ひ出で聞え給ふ時は、尼君を戀ひ聞え給ふ折多かり。君のおはする程は紛らはし給ふを、夜などは、時々こそとまり給へ、此處彼處の御暇なくて、暮るれば出で給ふを、慕ひ聞え給ふ折などあるを、いとらうたく思ひ聞え給へり。二三日内裏に侍ひ、大殿にもおはする折は、いといたく屈しなどし給へば、心苦しうて、母なき子持たらむ心地して、歩行も靜心なく覺え給ふ。僧都は斯くなむと聞き給ひて、怪しきものから、嬉しとなむ思ほしける。かの御法事などし給ふにも、嚴しう弔ひ聞え給へり。少納言は、覺えずをかしき世をも見るかな。これも故尼上の、この御事を思して、御行ひにも祈り聞え給ひ

- (一) 源 (二) やはり
- (三) 紫上
- (四) 家の用度などを
- (五) 別にして
- (六) 故尼君の
- (七) 紫上の乳母
- (八) 紫上

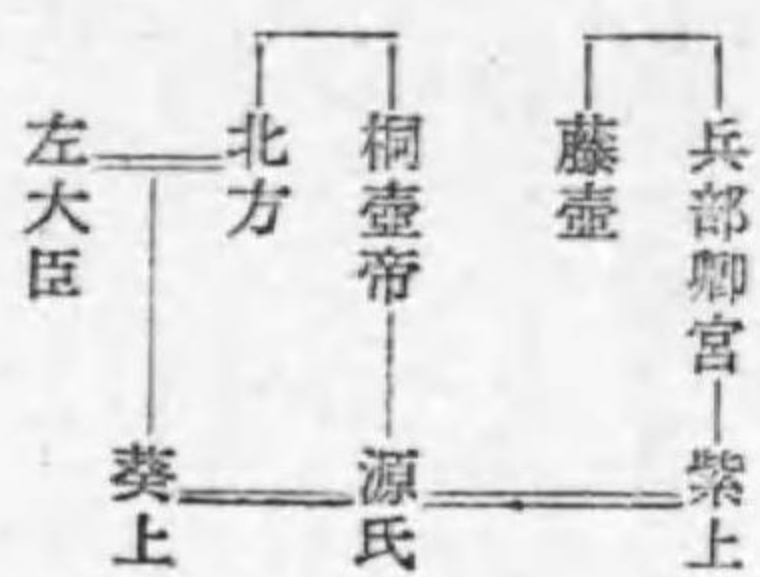
し、佛の御驗にやと覺ゆるに、大殿いとやんどなくておはし、此處彼處數多かゝづらひ給ふをぞ、眞に大
 人び給はむ程には、むつかしき事もやと覺えける。されど、斯く取り分き思ひ給へる御覺えの程は、いと頓
 もしげなりかし。御服、母方は三月こそはとて、晦日には脱がせ奉り給ふを、また親も無くて生ひ出で給ひ
 しかば、眩き色にはあらで、紅・紫・山吹の地の限り織れる、御小桂などを著給へるさま、いみじう今めか
 しろをかしげなり。男君は、朝拜に參り給ふとて、差覗き給へり。眞今日よりは、大人しくなり給へりや
 とて、打笑み給へる、いとめでたう愛敬づき給へり。いつしか雛押据えて、そゝき居給へり。三尺の御厨子
 一具に、品々しつらひ据えて、又小さき屋ども作り集めて奉り給へるを、所狭きまで遊び廣げ給へり。兼
 やらふとて、犬君がこれを毀ち侍りにければ、繕ひ侍るぞ」とて、いと大事と思ひたり。眞げにいと心なき
 人の仕業にも侍るかな。今繕はせ侍らむ。今日は言忌して、な泣い給ひそ」とて、出で給ふ氣色、いと所狭
 きを、人々端に出でて見奉れば、姫君も立ち出でて見奉り給ひて、雛の中の源氏の君繕ひ立てて、内裏に參
 らせなどし給ふ。少納言「今年だに少し大人びさせ給へ。十に餘りぬる人は、雛遊びは忌み侍るものを、斯く御
 夫など儲け奉り給ひては、あるべかしうしめやかにてこそ、見え奉らせ給はめ。御髪參る程をだに、物憂く
 せさせ給ふ」など少納言聞ゆ。御遊びにのみ心入れ給へれば、恥かしと思はせ奉らむとて言へば、心の中に
 我はさは夫儲けてけり。この人々の夫とてあるは、醜くこそあれ、我は斯くをかしげに若き人をも持たりけ
 るかなと、今ぞ思ほし知りける。さはいへど、御年の數添ふ徵なめりかし。斯く幼き御けはひの、事に觸れ

(一) 葵上
 (二) 無地織

(三) 喪服を

(四) 正月元日の小朝拜。清涼殿の前庭で行はれる
 (五) 追儼の式(大晦日の夜行ふ鬼やらひ)の眞似

(六) 慎んで
 (七) 北方らしく



て著ければ、殿の内の人々も怪しと思ひけれど、いと斯う世づかぬ御添臥ならむとは思はざりけり。
 内裏より、大殿に罷出給へり。例の置はしう粧しき御様にて、心美しき御氣色も無く、苦しければ、眞今年
 よりだに、少し世づきて改め給ふ御心見えば、如何に嬉しからむ」など聞え給へど、わざと人居えて傳き給
 ふと聞き給ひしよりは、やんどなく思ひ定めたる事にこそはと、心のみ置かれて、いと疎く恥かしく思
 さるべし。強ひて見知らぬやうにもてなして、亂れたる御けはひには、えしも心強からず、御答など打聞え
 給へるは、なほ人よりはいと異なり。四年ばかりが姉におはすれば、打過し恥かしげ
 に、盛りに整ほりて見え給ふ。何事かはこの人の飽かぬ所は物し給ふ。我が心の餘り怪
 しからぬすさびに、斯く怨みられ奉るぞかしと思し知らる。同じ大臣と聞ゆる中にも、
 覺えやんどなくおはするが、宮腹に一人いつき傳き給ふ御心驕り、いとこよ無くて、
 少し疎かなるをば、目ざましと思ひ聞え給へるを、男君は、などかいとさしもと、慣
 らはい給ふ御心の隔てどもなるべし。大臣も、斯く頼もしげなき御心を、辛しと思ひ聞
 え給ひながら、見奉り給ふ時は、怨みも忘れて、傳き營み聞え給ふ。翌朝出で給ふ所に、差覗き給ひて、御
 装束し給ふに、名高き御帯、手づから持たせて、渡り給ひて、御衣の御後引繕ひなど、御沓を取らぬばかり
 にし給ふ、いと哀れなり。眞「これは内宴などいふ事も侍るなるを、さ様の折にこそ」など聞え給へど、大臣そ

(一) 二條院に女を
 (二) それを本妻にと
 (三) 葵が

(四) 源の
 (五) 葵は源より
 (六) 葵の父は信望高

(七) 取扱が疎略だと
 (八) 源が

(九) 左大臣が
 (一〇) 正月二十一日に仁壽殿
 で内々に行はれる詩會

これは勝れるも侍り。これはたゞ目馴れぬさまなればなむ」とて、強ひてさせ奉り給ふ。げに萬づにかしづき立てて見奉り給ふに、生ける甲斐あり、邂逅にても、斯からむ人を出し入れて見むにます事あらじと見え給ふ。

つくぐと臥したるにも、遣る方なき心地すれば、例の慰めには西の對にぞ渡り給ふ。しどけなく打ふくだみ給へる鬘、あざれたる袿姿にて、笛を懐かしう吹きすさびつゝ、覗き給へれば、女君、ありつる花の露に濡れたる心地して、添ひ臥し給へるさま、美しうらうたげなり。愛敬零るゝやうにて、おはしながら疾くも渡り給はぬ、生恨めしかりければ、例ならず背き給へるなるべし、端の方につい居て、眞「こちや」と宣へど驚かず。眞「入りぬる磯の」と口すさびて、口覆ひし給へるさま、いみじう戯れて美し。眞「あなにく、斯かる事口馴れ給ひにけりな。見る目に飽くはまさなき事ぞよ」とて、人召して、御琴取り寄せて弾かせ奉り給ふ。眞「箏の琴は、中の細緒の堪へ難きこそ所狭けれ」とて、平調に押下して調べ給ふ。搦き合はせばかり弾きて、差遣り給へれば、え怨じも果てず、いと美しう弾き給ふ。小さき御程に、差遣りて搦し給ふ御手つき、いと美しければ、らうたしと思して、笛吹き鳴らしつゝ教へ給ふ。いと聴くて、難き調子どもを、唯一わたりに習ひ取り給ふ。大方らうくしくをかしき御心ばへを、思ひし事叶ふと思す。保會呂俱世利といふもの

- (一) 一寸珍しい
- (二) 潮満てば入りぬ
- (三) 多くの多き(萬葉七)
- (四) 細緒は十一枝か
- (五) 細緒は十二枝
- (六) 十二律中の一
- (七) 調子だけ合せて
- (八) 左手を伸ばして
- (九) 曲名、長保樂の
- (十) 破といふ
- (十一) 絃を抑へる

は、名は憎けれど、面白う吹き澄まし給へるに、搦き合はせませ若けれど、拍子違は才上手めきたり。

御殿油参りて、繪どもなど御覽するに、出で給ふべしとありつれば、人々聲作り聞えて、「雨降り侍りぬべし」など言ふに、姫君例の心細くて、屈し給へり。繪も見さして、俯しておはすれば、いとどたくて、御髮のいとめでたく零れかゝりたるを、搦き撫でて、眞「外なる程は戀しくやある」と宣へば、領き給ふ。眞「我も一日も見奉らぬはいと苦しうこそ。されど、幼くおはする程は、心安く思ひ聞えて、先づくねくしう怨むる人の心破らじと思ひて、むつかしければ、暫し斯くも歩くぞ。大人しく見なしてば、外へも更に行くまじ。人の怨み負はじなど思ふも、世に長う在りて、思ふさまに見え奉らむと思ふぞ」など細々に語らひ聞え給へば、流石に恥かしくて、ともかくも答へ聞え給はず。やがて御膝に寄りかゝりて、寝入り給ひぬれば、いと心苦しうて、眞「今宵は出でずなりぬ」と宣へば、皆立ちて、御膳など此方に参らせたり。姫君起し奉り給ひて、眞「出でずなりぬ」と聞え給へば、慰みて起き給へり。諸共に物など参る。いと果敢なげにすさびて、眞「さらば寝給ひねかし」と危げに思ひ給へれば、斯かるを見捨てては、いみじき道なりとも、赴き難く覺え給ふ。斯う様に留められ給ふ折々なども多かるを、おのづから漏り聞く人、大殿に聞えければ、女房「誰ならむ、いと目醒ましき事にもあるかな。今までその人とも聞えず、さ様に纏し、戯れなどすらむは、あてやかに心憎き人にはあらじ。内裏邊などにて、果敢なく見給ひけむ人を、物めかし給ひて、人や咎めむと隠し給ふななり。心なげに幼稚て聞ゆるは」など、侍ふ人々も聞え合へり。内裏にも、斯かる人ありと聞召して、

- (一) 前以て命じてあ
- (二) 早くなさらねば
- (三) ほんの眞似だけ
- (四) なほ不安に
- (五) 冥途への
- (六) つたので
- (七) ひねくられて
- (八) 食べて

重いとほしく大臣の思ひ歎かるなる事も、げに物げなかりし程を、おふなく斯く物したる心を、さばかりの事進らぬ程にはあらじを、などか情なくはもてなすらむ」と宣はすれど、畏まりたるさまにて、御答も聞え給はねば、心ゆかぬなめりといとほしく思召す。重さるはすきくしう打亂れて、この見ゆる女房にまれ、又此方彼方の人々など、なべてならずなども、見え聞えさめるを、如何なる物の限に隠れ歩いて、斯く人にも恨みらるらむ」と宣はす。

帝の御年老成させ給ひぬれど、斯様の方はえ過させ給はず。采女・女藏人などを容貌心あるをば、殊にもてはやし思召したれば、由ある宮仕人多かる頃なり。果敢なき事をも言ひ觸れ給ふには、持て離るゝ事もあり難きに、目馴るゝにやあらむ、げにぞ怪しう好い給はさめると、試みに戯言を聞えかゝりなどする折あれど、情なからぬ程に打答へて、眞には亂れ給はぬを、眞實にさうくしと思ひ聞ゆる人もあり。年いたう老いたる典侍、人もやんごとなく、心ばせありて、あてに覺え高くはありながら、いみじうあだめいたる心様にて、其方には重からぬ有るを、斯うさだ過ぐるまで、などさしも亂るらむと訝しく覺え給ひければ、戯言いひ觸れて試み給ふに、似げ無くも思はざりけり。浅ましと思しながら、流石に斯かるもをかしうて、物など宣ひてけれど、人の漏り聞かむも古めかしき程なれば、つれなくもてなし給へるを、女はいと辛しと

- (一) 源の少時から
- (二) 出来る限りお世
- (三) 奏では
- (四) 官女
- (五) 浅からぬ仲だと
- (六) 諸國から奉る。
- (七) 御膳の事などを専ら勤める女官。
- (八) 源が
- (九) 躰かすには居れ
- (一〇) 好色でない
- (一一) 源内侍。五十七

思へり。上の御梳櫛に侍ひけるを、果てにければ、上は御柱の人召して、出でさせ給ひぬる程に、又人も無くて、この内侍常よりも清げに、様體頭つき艶きて、装束有様、いと華やかに好ましげに見ゆるを、さも古り難うもと、心づきなく見給ふものから、如何思ふらむと、流石に過し難くて、裳の裾を引き驚かし給へれば、蝙蝠のえならず畫きたるを、さし隠して見返りたるまみ、いたう見延べたれど、目皮はいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそゝけたり。似つかはしからぬ扇の様かなと見給ひて、我が持給へるに、差代へて見給へば、赤き紙の、映るばかり色深きに、木高き森の畫を塗り隠したり。片つ方に、手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず、森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを、事しこそあれ、うたての心ばへやと、咲まれながら、森こそ夏のと見ゆる」とて、何くれと宣ふも似げなく、人や見つけむと苦しきを、女はさも思ひたらず、

内君し來ば手馴れの駒に刈り飼はむ盛り過ぎたる下葉なりとも
と言ふさま、こよなう色めきたり。

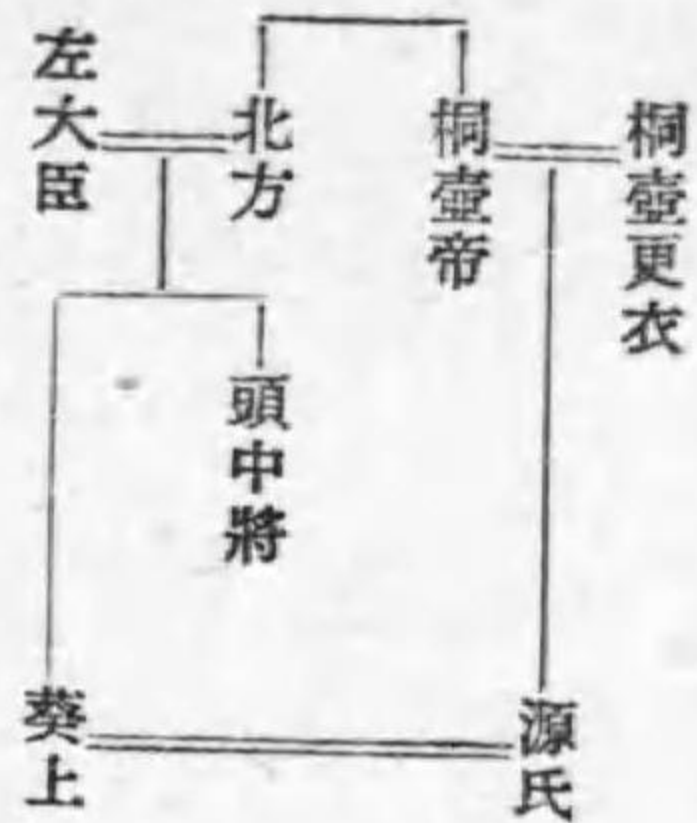
源笹分けば人や咎めむ何時となく駒懐くめる森の木がくれ
煩はしさに」とて立ち給ふを、控へて、内まだ斯かる物をこそ思ひ侍らね。今更なる身の恥にもなむ」とて、

- (一) 帝
- (二) 源が
- (三) 見事に繪のかい
- (四) 秋波を送つてゐる
- (五) 髪が短く亂れ下
- (六) 大荒木の森の下
- (七) 時鳥來鳴くを聞
- (八) 我が門の一むら
- (九) 笹分けば荒れこ
- (一〇) 駒なつくめる森の
- (一一) 下かは(蜻蛉日記)

とて遣り給ふ。立ち返り、

頭「君に斯く引き取られぬる帯なれば斯くて絶えぬる中と託たむ

え免れさせ給はじ」とあり。日闌けて、各々殿上に参り給へり。いと静かに、物遠き様しておはするに、頭の君もいとをかしけれど、公事多く奏し下す日にて、いと麗しくすくよかなるを見るも、互に微笑まる。人間に差寄りて、頭「物隠しは懲り給ひぬらむかし」とて、いと妬げなる尻目なり。源「などてかさしもあらむ。



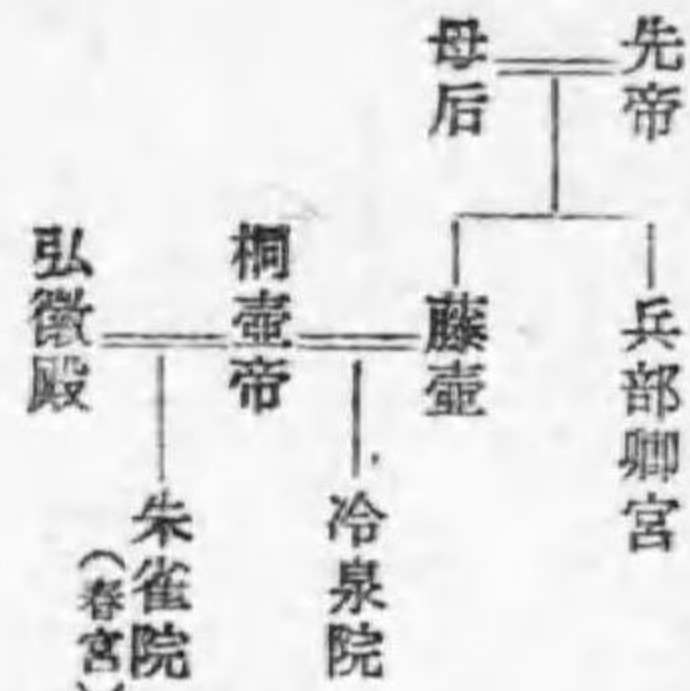
立ちながら、還りけむ人こそいとほしけれ。眞は憂しや世の中よ」と言ひ合はせて、「鳥籠の山なる」と、互に口固む。さてその後は、ともすれば事の序毎に、言ひ迎ふる種はひなるを、いと物むつかしき人故と、思し知らるべし。女はなほいと艶に恨みかくるを、佗しと思ひ歩き給ふ。中將は、妹の君にも聞え出でず、たゞさるべき折の嚇種にせむとぞ思ひける。やんごとなき御腹々の親王達だに、上の御待遇のこよなきに、煩はしがりて、いと殊に避り聞え給へ

るを、この中將は、更に押し消たれ聞えじと、果敢なき事につけても、思ひ挑み聞え給ふ。この君一人ぞ、姫君の御一腹なりける。帝の御子と言ふばかりにこそあれ、我も同じ大臣と聞ゆれど、御覺え殊なるが、皇女腹にて又なく傳かれたるは、何ばかり劣るべき際と覺え給はぬなるべし。人がらもあるべき限り整ひて、

- (一) 源が
- (二) 改まつたよそよ
- (三) 引歌未詳
- (四) 犬上とのこの山
- (五) 内侍
- (六) 葵上
- (七) 源に對する
- (八) 源は
- と答へて我が名漏すな(古今、墨塗
- なるいさや川いさ
- 歌、あやもち)

何事もあらまほしう、足らひてぞ物し給ひける。この御中どもの挑みこそ怪しかりしか。されどうるさくてなむ。

七月にぞ后居給ふめりし。源氏の君宰相になり給ひぬ。帝下り居させ給はむの御心遣ひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひ聞えさせ給ふに、御後見し給ふべき人おはせず。御母方、皆皇子達にて、源氏の公事知り



給ふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにし置き奉りて、強りにと思すになむありける。弘徽殿、いと御心動き給ふ、ことわりなり。帝「されど春宮の御世、いと

近くなりぬれば、疑ひなき御位なり。思ほしのどめよ」とぞ聞えさせ給ひける。げに、春宮の御母にて二十餘年になり給へる女御を置き奉りては、引越し奉り給ひ難き事なりかすと、例の安からず、世の人も聞えけり。参り給ふ夜の御供に、宰相の君も仕う奉り給ふ。同じ后と聞ゆる中にも、后腹の、皇子玉の光耀きて、類なき御

- (一) 藤壺中宮に册立
- (二) 藤壺腹の(冷泉院)
- (三) 又源姓の方があ
- つても藤氏孫關時
- 代に
- (四) 確りした位置に
- 居ゑておいて春宮
- の後楯にと
- (五) 自分を越して先
- に中宮になられた
- のを
- (六) 中宮としての参
- 内
- (七) 藤壺は先帝の后
- 腹でしかも玉と耀
- く御子もあり、帝
- の寵愛も一身に集
- めてをられるので

昔、世ごころづける姫、如何で心情けあらむ男に逢ひ得てしがなと思へど、言ひ出でむも便りなさに、眞ならぬ夢語りをす。子三人を呼びて語りけり。二人の子は、情けなく答へて止みぬ。三郎なりける子なむ、よき御夫ぞ出で來むと合はするに、この姫氣色いとよし。異人はいと情けなし。如何でこの在五中將に逢はせてしがなと、思ふ心あり。狩し歩きけるにいき進ひて、道にて馬の口を取りて、斯う／＼なむ思ふと言ひければ、あはれがりて行きけり。さて後、男見えざりければ、姫、男の家に行きて垣間見けるを、男ほのかに見て、

百年に一年足らぬ九十九髪我れを戀ふらし面影に見ゆ

とて、出で立つ氣色を見て、むばら杖藪にかゝりて、家に來て、うち臥せり。男、かの姫のせしやうに、忍びて立てりて見れば、姫歎きて寝ぬとて、

さむしろに衣かたしき今宵もや戀しき人に逢はでのみ寝む

と詠みけるを、男哀れと思ひけり。世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、此の人は、思ふをも思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。

— 伊 勢 物 語 —

花 宴

(二〇 春)

南殿の櫻の宴に耀く光君——はからず會うた細殿の女(朧月夜)・扇の契り——紫と葵・左大臣の讚美——右大臣邸の藤の宴に知る女の素性



二月の二十日餘、南殿の櫻の宴させ給ふ。后・春宮の御局、左右にして、参り上り給ふ。弘徽殿の女御は、中宮の斯くておはするを、折節毎に安からず思せど、物見にはえ過し給はで参り給ふ。日いと好く晴れて、空の氣色、鳥の聲も心地よげなるに、親王達・上達部より初めて、その道のは、皆探韻賜はりて、詩作り給ふ。宰相の中將、「春といふ文字賜はれり」と宣ふ聲さへ、例の人に異なり。次に頭中將、人の目移しも徒ならず覺ゆべかめれど、いと目易く持て鎮めて、聲遣ひなど、物々しく勝れたり。さての人々は、皆臆しがちに鼻白める多かり。地下の文人は、まして、帝・春宮の御才賢く勝れておはします。斯かる方にやんごとなき人多く物し給ふ頃なるに、恥かしくて、遙々と曇りなき庭に立ち出づる程、はしたなくて、易き程の事なれど苦しげなり。年老いたる博士どもの、容體怪しく變れて、例馴れたるもあはれに、さま／＼御覽するなむをかしかりける。樂どもなどは、更にも言はず調へさせ給へり。やう／＼入日になる程に、春の驚轉るといふ舞、いと面白く見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折、思し出でられ、春宮、挿頭賜はせて、切に責め宣はするに、遁れ難くて、立ちて、長閑に袖翻す所を、一折氣色許り舞ひ給へるに、似るべき物なく見ゆ。左大臣、恨めしさも忘れて涙落し給ふ。「頭中將いづら。遅し」とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今少し打過して、斯かる事もやと、心遣ひしけむ、いと面白ければ、御衣賜はり

(一) 紫宸殿
(二) 藤壺

(三) 韻字を一つづつ

(四) 他の
探りつつで詩賦を
作ること

(五) きまりの悪い思
ひをする

(六) 昇殿を許されぬ
(七) 文章生
(八) 春鶯囀

(九) 前卷参照
(一〇) 念入りに

て、いと珍らしき事に人思へり。上達部皆亂れて舞ひ給へど、夜に入りては、殊に差別も見えず。詩など講ずるにも、源氏の君の御をば講じもえやらで、句毎に誦しのしる。博士共の心にもいみじう思へり。斯うやうの折にも、先づこの君を光にし給へれば、帝もいかで疎かに思されむ。

上達部各々退出れ、后・春宮還らせ給ひぬれば、長閑やかになりぬるに、月いと明うさし出でてをかしきを、源氏の君酔ひ心地に、弘徽殿の細殿に立ち寄り給へれば、三の口開きたり。女御は、上の御局に、やがて参り上り給ひにければ、人少ななるけはひなり。奥の樞戸も開きて、人音もせず。斯様にて世の中の過失はするぞかしと思ひて、やをら上りて覗き給ふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる聲の、なべての人とは聞えぬ、女臙月夜に似る物ぞなき」と、打誦して、此方様には来るものか。いと嬉しくて、ふと袖を捉へ給ふ。女怖ろしと思へる氣色にて、女あなむくつけ。こは誰ぞ」と宣へど、何か疎ましき」とて、

源 深き夜のあはれを知るも入る月の臙げならぬ契りとぞ思ふ

とて、やをら抱き下して、戸は押し閉てつ。淺ましきに憫れたるさま、いと懐かしうをかしげなり。戦く戦く、女「此處に人の」と宣へど、眞まろは、皆人に許されたれば、召し寄せたりとも、何でふ事かあらむ。唯忍びてこそ」と宣ふ聲に、この君なりけりと聞き定めて、聊か慰めけり。佗しと思へるものから、情なく強強しうは見えじと思へり。酔ひ心地や例ならざりけむ、免さむ事は口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心もえ知らぬなるべし。らうたしと見給ふに、程なく明け行けば、心慌し。女はまして、様々に思ひ亂れたる

- (一) 御作
- (二) 清涼殿に在る
- (三) 照りもせず曇りもはてぬ春の夜の臙月夜にしくものぞなき(新古今、春上、大江千里)
- (四) 源



氣色なり。眞なほ名告し給へ。如何にか聞ゆべき。斯うて止みなむとは、さりとも思されじ」など宣へば、

女 憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

といふさま、艶になまめきたり。眞ことわりや。聞え違へたる文字かなとて、

源「何れぞと露の宿りを分かむ間に小笹が原に風もこそ吹け

るもあれば、斯かるを、一さも撓みなき御忍び歩きかな」とつきじろひつ、空寐をぞし合へる。入り給ひて臥し給へれど、寐入られず。をかしかりつる人の様かな。女御の御おとうと達にこそはあらめ。まだ世に馴れぬは、五六の君ならむかし。帥の宮の北の方、頭中將のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか。なかなかそれならましかば、今少しをかしからまし。六は春宮に奉らむと志し給へるを、いとほしうも有べいかな。煩はしう尋ねむ程も紛はし。さて絶えなむとは思はぬ氣色なりつるを、如何なれば言通はすべきさまを教へずなりぬらむなど、萬づに思ふも心の留まるなるべし。その日は後宴の事ありて、紛れ暮し給ひつ。箏の琴仕う奉り給ふ。昨日の事よりも、なまめかしう面白し。

- (一) お便りを
- (二) 私言ひ損ひです
- (三) 源の曹司
- (四) 目のさめた
- (五) 妹
- (六) 氣に入らぬ
- (七) 翌日の小宴

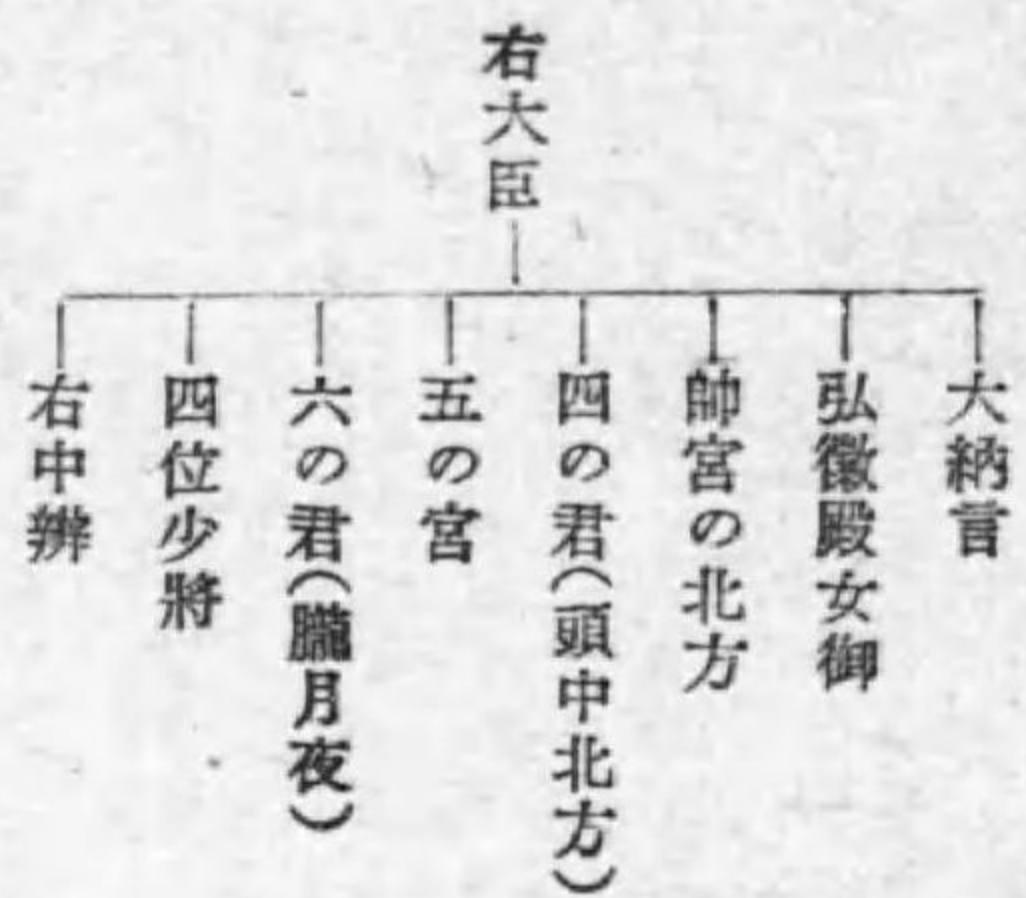
て、いと珍らしき事に人思へり。上達部皆亂れて舞ひ給へど、夜に入りては、殊に差別も見えず。詩など講ずるにも、源氏の君の御をば講じもえやらで、句毎に誦しのしる。博士共の心にもいみじう思へり。斯うやうの折にも、先づこの君を光にし給へれば、帝もいかでか疎かに思されむ。

上達部各々退られ、后・春宮還らせ給ひぬれば、長閑やかになりぬるに、月いと明うさし出でてをかしきを、源氏の君酔ひ心地に、弘徽殿の細殿に立ち寄り給へれば、三の口開きたり。女御は、上の御局に、やがて参らう上り給ひにければ、人少ななるけはひなり。奥の樞戸も開きて、人音もせず。斯様にて世の中の過失はするぞかしと思ひて、やをら上りて覗き給ふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる聲の、なべての人とは聞えぬ、女臚月夜に似る物ぞなき」と、打誦して、此方様には来るものか。いと嬉しくて、ふと袖を捉へ給ふ。女怖ろしと思へる氣色にて、女あなむくつけ。こは誰ぞ」と宣へど、源「何か疎ましき」とて、

源 深き夜のあはれを知るも入る月の臚げならぬ契りとぞ思ふ

とて、やをら抱き下して、戸は押し閉てつ。浅ましきに惘れたるさま、いと懐かしうをかしげなり。戦く戦く、女「此處に人の」と宣へど、源「まろは、皆人に許されたれば、召し寄せたりとも、何でふ事かあらむ。唯忍びてこそ」と宣ふ聲に、この君なりけりと聞き定めて、聊か慰めけり。佗しと思へるものから、情なく強強しうは見えじと思へり。酔ひ心地や例ならざりけむ、免さむ事は口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心もえ知らぬなるべし。らうたしと見給ふに、程なく明け行けば、心慌し。女はまして、様々に思ひ亂れたる

- (一) 御作
- (二) 清涼殿に在る
- (三) 照りもせず曇りもはてぬ春の夜の臚月夜にしくものぞなき(新古今、春上、大江千里)
- (四) 源



氣色なり。源「なほ名告し給へ。如何でか聞ゆべき。斯うて止みなむとは、さりとも思されじ」など宣へば、

女 憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

といふさま、艶になまめきたり。源「ことわりや。聞え違へたる文字かなとて、

源「何れぞと露の宿りを分かむ間に小笹が原に風もこそ吹け

煩はしう思す事ならずば、何か裏まむ。若し賺い給ふか」ともえ言ひ敢へず、

人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふ氣色ども繁く迷へば、いとわり無くて、

扇ばかりを、證に取り替へて出で給ひぬ。桐壺には、人々多く待ひて、驚きた

るもあれば、斯かるを、「さも撓みなき御忍び歩きかな」とつきじろひつゝ、空寐をぞし合へる。入り給ひて

臥し給へれど、寐入られず。をかしかりつる人の様かな。女御の御おとうと達にこそはあらめ。まだ世に馴

れぬは、五六の君ならむかし。帥の宮の北の方、頭中將のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか。なか

なかそれならましかば、今少しをかしまし。六は春宮に奉らむと志し給へるを、いとほしうも有べいか

な。煩はしう尋ねむ程も紛はし。さて絶えなむとは思はぬ氣色なりつるを、如何なれば言通はすべきさまを

教へずなりぬらむなど、萬づに思ふも心の留まるなるべし。

その日は後宴の事ありて、紛れ暮し給ひつ。箏の琴仕う奉り給ふ。昨日の事よりも、なまめかしう面白し。

- (一) お便りを
- (二) 私の言ひ損ひです
- (三) 源の曹司
- (四) 目のさめた
- (五) 妹
- (六) 氣に入らぬ
- (七) 翌日の小宴

藤壺は、曉に参り給ひにけり。かの有明出でやしぬらむと心も空にて、思ひ至らぬ限なき良清・惟光をつけて、窺はせ給ひければ、御前より罷出給ひける程に、惟光等「只今北の陣より、かねて隠れ立ちて侍りつる車ども罷り出づる。御方々の里人侍りつる中に、四位少将・右中辨など急ぎ出でて、送りし侍りつるや、弘徽殿の御退出ならむと見給へつる。けしうはあらぬけはひども著くて、車三つばかり侍りつ」と聞ゆるにも胸打潰れ給ふ。如何にして何れと知らむ。父大臣など聞きて事々しうもてなされむも如何にぞや。まだ人の有様よく見定めぬ程は煩はしかるべし。さりとして知らであらむ將た、いと口惜しかるべければ、如何にせましと思し煩ひて、つくづくと眺め臥し給へり。姫君如何につれづれならむ、日頃になれば、屈してやあらむと、らうたく思しやる。かの證の扇は、櫻の三重襲にて、濃き方に霞める月を畫きて、水に映したる心ばへ目馴れたれど、故懐かしう持て馴らしたり。「草の原をば」と言ひしさまのみ心に懸かり給へば、

源世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行方を空にまがへてと書きつけ給ひて置き給へり。

大殿にも久しうなりにけると思せど、若君も心苦しければ、こしらへむと思して、二條院へおはしぬ。見るまゝに、いと美しげに生ひなりて、愛敬づき、らうくじき心ばへいと殊なり。飽かぬ所無う我が御心の儘に教へなさむ、と思すに適ひぬべし。男の御教へなれば、少し人馴れたる事や交らむと思ふこそ後めけたれ。

- (一) 有明の女君 (膾)
- (二) 朔平門
- (三) 紫上
- (四) 檜扇の端三枚を重ねて櫻の薄様で
- (五) 前の「憂き身世
- (六) 紫上

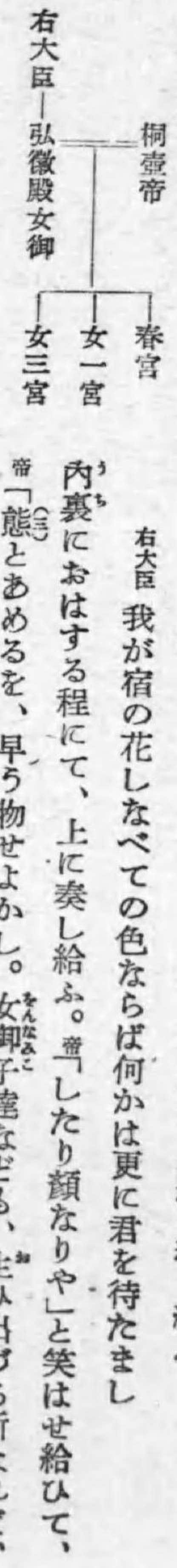
日頃の御物語、御琴など教へ暮して出で給ふを、例のと口惜しう思せど、今はいとよう慣らはされて、わり無くは慕ひ纏さず。大殿には例のふとも對面し給はず。つれづれと萬づ思し廻らされて、筆の御琴まさぐりて、「やはらかに寝る夜はなくて」と詠ひ給ふ。大臣渡り給ひて、一日の興ありし事聞え給ふ。互こゝらの齡にて、明王の御代、四代をなむ見侍りぬれど、此の度のやうに、詩ども警策に、舞樂物の音ども調ほりて、

頭中將 齡延ぶる事なむ侍らざりつる。道々の物の上手ども多かる頃ほひ、委しう知しめし調へ
左大臣 左中辨 させ給へる故なり。翁もほとく舞ひ出でぬべき心地なむ侍りし」と聞え給へば、殊
葵上 に調へ行ふ事も侍らず。たゞ公事に、そしうなる物の師どもを、此處彼處に尋ねて侍りしなり。萬づの事よりは、柳花苑なむ、誠に後代の例ともなりぬべく見給へしに、まして榮ゆく春に立ち出でさせ給へらましかば、世の面目にや侍らまし」と聞え給ふ、辨・中將など参り合ひて、勾欄に背中押しつゝ、とりくくに物の音ども調べ合はせて遊び給ふ、いと面白し。

かの有明の君は、果敢なかりし夢を思し出でて、いと物歎かしう眺め給ふ。春宮には四月ばかりと思し定めたれば、いと理無う思し亂れたるを、男君も、尋ね給はむに跡果敢なくはあらねど、何れとも知らず、殊に免し給はぬ邊に、かゝづらはむも、人悪く思ひ煩ひ給ふに、三月の二十餘日、右大臣の弓の結に、上達部・

- (一) 葵上
- (二) 源は
- (三) 貫河の、瀬々の
- (四) 小菅の、やはら手
- (五) 枕、柔らかに、寝
- (六) 葵上
- (七) 源は
- (八) 催馬樂、貫河
- (九) すぐれて
- (十) 翁とてわびやは
- (十一) 夜はなくて、親
- (十二) さくる夫 (下略)
- (十三) をらむ草も木も榮
- (十四) ゆる時に出でて舞
- (十五) ひてむ (續日本後
- (十六) 紀、仁明紀、尾張
- (十七) 漢主)
- (十八) 御つとめで
- (十九) 上手な
- (二十) 左大臣が
- (二十一) 膾月夜君
- (二十二) 春宮へ宮仕する
- (二十三) のは
- (二十四) 右大臣や弘徽殿
- (二十五) 方
- (二十六) 射手を組合せて
- (二十七) する弓の競技會

親王達多く集へ給ひて、やがて藤の花の宴し給ふ。花盛りは過ぎにたるを「外の散りなむ」とや教へられたりけむ、後れて咲く櫻二木ぞいと面白き。新しう造り給へる殿を、宮達の御裳著の日、磨きしつらはれたり。華々と物し給ふ殿の様にて、何事も今めかしうもてなし給へり。源氏の君にも、一日内裏にて御對面の序に聞え給ひしかど、おはせねば、口惜しう物の榮えなしと思して、御子の四位の少將を奉り給ふ。



なべてのさまには思ふまじきを」など宣はす。御装ひなど引繕ひ給ひて、いたう暮るゝ程に、待たれてぞ渡り給ふ。櫻の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾いと長く引きて、皆人は袍衣なるに、あざれたる大君姿の艶きたるにて、齋かれ入り給へる御様、げにいと殊なり。花の匂ひも氣壓されて、なか／＼事醒ましになむ。遊びなどいと面白うし給ひて、夜少し更け行く程に、源氏の君、いたう酔ひ惱める様にもてなし給ひて、紛れ立ち給ひぬ。寢殿に女一の宮・女三の宮のおはします、東の戸口におはして、寄り居給へり。藤は此方の端に當りてあれば、御格子ども上げ渡して、人々出で居たり。袖口など、踏歌の折覺えて、殊更めきもて出でたるを、相應しからずと、先づ藤壺邊思し出でらる。憂惱ましきに、いといたう強ひられて、忙にて侍

- (一) 見る人もなき山
- (二) 弘徽殿腹の
- (三) 正式の禮装
- (四) 蘇枋の裏を附け、
- (五) 正月男女の舞人
- (六) 玉(オホキミ)ら
- (七) が祝ひの歌舞をし
- (八) 里の櫻花外の散り
- (九) 態々の使
- (一〇) 蘇枋の裏を附け、
- (一一) 薄い唐綾
- (一二) 古今、春上、伊勢)
- (一三) しい姿
- (一四) 諸家を廻る行事

り。畏けれど、この御前にこそは、蔭にも隠させ給はめ」とて、妻戸の御簾を引著給へば、女房「あな煩はし、よからぬ人こそ、やんごとなき縁は託ち侍るなれ」と言ふ氣色を見給ふに、重々しうはあらねど、おしなべての若人共にはあらず。あてにをかしきはひ著し。空薫物、いと烟たく薫りて、衣の音なひいと華やかに打振舞ひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ち後れ、今めかしき事を好みたる邊にて、やんごとなき御方々物見給ふとて、この戸口は占め給へるなるべし。さしもあるまじき事なれど、流石にをかしう思されて、何れならむと胸打潰れて、扇を取られて、辛き目を見る」と打おほどけたる聲に言ひなして、寄り居給へり。女房「怪しうもさま變へたる高麗人かな」と答ふるは、心知らぬにやあらむ。答はせて唯時々打歎くけはひする方に倚りかゝりて、几帳越に手を捉へて、

- (一) 咲く花の下に隠るゝ人多みありしにまさる藤の蔭かな (伊勢物語、業平)
- (二) 部屋などに薫く香
- (三) 有明の君は
- (四) 石川の、高麗人に、帯をとられて、辛き悔する (催馬樂、石川)を語ひかへたのである。
- (五) 紅葉賀卷(一三九頁)註(一一)参照
- (六) 源「梓弓いるさの山に惑ふかな仄見し月の影や見ゆると
- (七) 何故か」と、推しあてに宣ふを、え忍ばぬなるべし、
- (八) 女心入る方ならませば弓張の月無き空に迷はましやは
- (九) といふ聲たゞそれなり。いと嬉しきものから。

葵あひな

三三—三三正月

桐壺帝讓位・朱雀院即位——新齋宮と新齋院——賀茂祭・葵上と六條御
 息所の車争——紫上と源氏の祭見物——御息所の懊惱——葵上の懷妊・
 病氣・つき纏ふ御息所の生靈——若君(夕霧)誕生——葵上俄の逝去・源
 氏左大臣の悲歎——源氏籠居・故人を偲ぶ左大臣邸の人々——紫上との
 結婚——源氏元旦の左大臣邸訪問



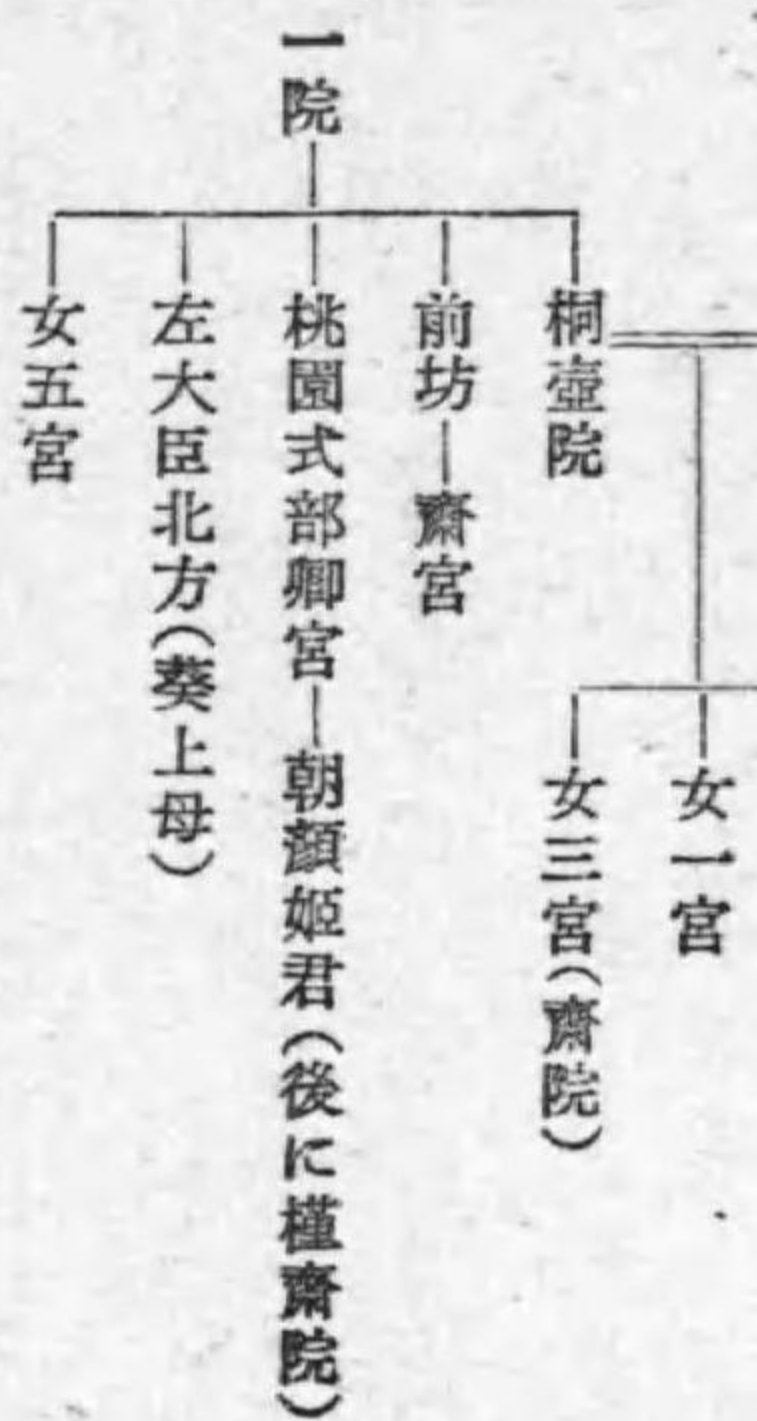
世の中變りて後、萬づ物憂く思され、御身のやんごとなさも添ふにや、輕々し
 き御忍び歩行も慎まじうて、此處も彼處も、覺束なさの歎きを重ね給ふ。
 眞や、かの六條の御息所の御腹の、前坊の姫君、齋宮に居給ひにしかば、大將
 の御心ばへもいと頼もしげ無きを、斯く幼き御有様の後めたさに事託けて下り
 やしなましと、かねてより思しけり。院にも斯かる事なむと聞召して、
 のいとやんごとなく思し、時めかし給ひしものを、輕々しうおしなべたる様にもてなすなるが、いとほしき
 事。齋宮をも、この御子達の列になむ思へば、何方につけても、疎かならざらむ
 こそ宜からめ。心のすさびに任せて、斯く好色業するは、いと世の抵牾負ひぬべ
 き事なり」など、御氣色の悪しければ、我が御心地にも實にと思ひ知らるれば、
 畏まりて侍ひ給ふ。又斯く院にも聞召し宣はするに、人の御名も我が爲も、好き
 がまじういとほしきに、いとどやんごとなく、心苦しき筋には思ひ聞え給へど、
 まだ顯はれては、態ともてなし聞え給はず。女も似げなき御年の程を恥かしう思
 して、心解け給はぬ氣色なれば、それに随ひたるさまにもてなして、院に聞召し入れ、世の中の人も知らぬは
 無くなりたるを、深うしもあらぬ御心の程を、いみじう思し歎きけり。斯かる事を聞き給ふにも、朝顔の



- (一) 桐壺帝が御位を朱雀院に譲られた後
- (二) 源は
- (三) 伊勢大神宮奉仕の未婚の内親王
- (四) 六條御息所の心
- (五) 伊勢へ
- (六) 前春宮
- (七) 源が
- (八) 自分の
- (九) 非難
- (一〇) 源は
- (一一) 御息所
- (一二) 源の
- (一三) 御息所は
- (一四) 桐壺帝の御弟桃園式部卿宮の姫君

姫君は、如何で人に似じと深う思せば、果敢なきさまなりし御返りなどもさく無し。さりとして人憎く、はしたなくはもてなし給はぬ御氣色を、君もなほ、殊なりと思し渡る。大殿には、斯くのみ定めなき御心を、心づきなしと思せど、餘り慎まぬ御氣色の言ふ甲斐無ければにやあらむ、深うしも怨じ聞え給はず、心苦しきさまの御心地に悩み給ひて、物心細げに思いたり。珍らしう哀れと思ひ聞え給ひて、嬉しきものから、誰もくゆしう思して、様々の御慎しみせさせ奉り給ふ。斯様な程は、いと御心の暇なくて、思し怠る

弘徽殿太后 今上(朱雀)



る限り、下襲の色、表の袴の紋、馬鞍まで皆整へたり。取り分きたる宣旨にて、大將の君も仕う奉り給ふ。かねてより、物見車心遣ひしけり。一條の大路、所なくむくつけきまで騒ぎたり。所々の御棧敷、心々にし

- (一) 源氏への
- (二) 葵上
- (三) 御懷妊
- (四) 賀茂神社に奉仕

- する未婚の内親王
- (三) 弘徽殿腹の第三皇女
- (六) 朱雀

- (七) 弘徽殿皇太后
- (八) 齋院などになられるのを
- (九) 賀茂祭。四月中

- の酉の日
- (一〇) 祭の前の吉日に齋院潔齋して紫野の野の宮に入る、

その當日。こゝは二度の禊

盡くしたるしつらひ、人の袖口さへいみじき見物なり。大殿には、斯様の御歩行もをさくし給はぬに、御心地さへ惱ましければ、思しかげざりけるを、若き人々、女房「いでや、己がどち引忍びて見侍らむこそ榮えなかるべけれ。おほよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、あやしき山賤さへ見奉らむとすなれば、遠き國々より、妻子を引具しつゝも參うで來なるを、御覽せぬは、いと餘りにも侍るかな」と言ふを、大宮聞召して、大宮「御心地も宜しき隙なり。侍ふ人々もさうくしげなめり」とて俄に廻らし仰せ給うて見給ふ。日闌け行きて、儀式も態とならぬさまにて出で給へり。隙も無う立ち渡りたるに、装ほしう引き續きて立ち煩ふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めて、皆差退けさする中に、網代の少し慣れたるが、下簾の様など由はめるに、いたう引入りて仄かなる袖口、裳の裾・汗衫など、物の色いと清らにて、殊更に饗れたるけはひ、著く見ゆる車二つあり。「これは更に、さ様に差退けなどすべき御車にもあらず」と、口強くて手觸れさせず。何方にも若き者ども、酔ひ過ぎ立ち騒ぎたる程の事は、えしたゝめ敢へず。大人々々しき御前の人々は、「斯く勿」など言へど、え止め敢へず。齋宮の御母御息所、物思し亂るゝ慰めにもやと、忍びて出で給へるなりけり。強顔しづくれど、おのづから見知りぬ。葵供人「さばかりにては、然な言はせそ。大將殿をぞ豪家には思ひ聞ゆらむ」など言ふを、その御方の人々も交れば、いとほしと見ながら、用意せむも煩はしければ、知らず顔をつくる。遂に御車ども立て續けつれば、副車の奥に押し遣られて、物も見えず。

- (一) 一般の人
- (二) 葵上の母
- (三) 觸れ出し
- (四) 葵上は

- (五) 物見車が
- (六) 網代車
- (七) 童女の上衣
- (八) 素知らぬ顔してゐても

- (九) 葵方は
- (一〇) 後楯にして威張る

- (一一) 源の
- (一二) 干渉

- (一三) 従者の車。人給
- (一四) 御息所の車は

心疾しきをばさるものにて、斯かる宴れをそれと知られぬるが、いみじう妬き事限りなし。榻なども皆押し折られて、漫なる車の筒に打掛けたれば、又なう人悪く悔しう、何に來つらむと思ふに甲斐なし。物も見で歸らむとし給へど、通り出でむ隙も無きに「事成りぬ」と言へば、流石につらき人の御前渡りの待たるも心弱しや。笹の隈にだにあらねばにや、強顔く過ぎ給ふにつけても、なか／＼御心盡しなり。げに常よりも好み整へたる車どもの、我も／＼と乗り零れたる下簾の透間どもも、さらぬ顔なれど、微笑みつゝ後目に留め給ふもあり。大殿のは著ければ、眞實だちて渡り給ふ。御供の人々打長まり、心ばへありつゝ渡るを、押し消たれたる有様こよなう思さる。

伊豫介 紀伊守
藏人右近將監
先妻 軒端萩

御息所 影をのみ御手洗川のつれなきに身の憂き程ぞいと知らるゝ

と、涙の零るゝを、人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御様容貌の、いとゞしう、出で映えを見さらましかばと思さる。程々につけて、装束く人の有様、いみじう整へたりと見ゆる中にも、上達部はいと殊なるを、一所の御光には押し消たれためり。大将の假の隨身に、殿上の尉などのすることは、常の事にもあらず、珍らしき行幸などの折の業なるを、今日は右近の藏人の將監仕う奉れり。さらぬ御隨身共も、容貌姿眩く整へて、世にもて傳かれ給へる様、木草も靡かぬはあるまじげなり。壺装束などいふ姿にて、女ばらの賤

- (一) 車の轅をのせる (六) 見に掛く。諷の
- (二) 蔵人右近將監 (九) 臨時の
- (三) 御通りだ (七) 源の
- (四) 笹の隈の限川 (八) 口惜しからまし
- (五) 源は見ぬ振で
- (一〇) 蔵人で近衛の將監を兼ねた者
- (一一) 女の歩行姿。薄衣の前の兩襟を折り挿み、頭に市女笠を戴く

しからぬや、又尼などの世を背きけるなども、仆れ惑ひつゝ、物見に出でたるも、例は、強ちなりや、あな憎と見ゆるに、今日はことわりに、口うちすげみて、髪著こめたるあやしの者どもの、手を作りて、額に當てつゝ見奉り上げたるも、痴がましげなる賤夫まで、己が顔のならむさまをば知らで笑み榮えたり。何とも見入れ給ふまじき、えせ受領の女などさへ、心の限り盡くしたる車どもに乗り、さま殊更び、心化粧したるなむ、をかしき様々の見物なりける。まして此處彼處に立ち忍びて通ひ給ふ所々は、人知れず、數ならぬ歎き増るも多かりけり。式部卿の宮、棧敷にてぞ見給ひける。いと眩きまで、老成行く人の容貌かな。神などは目もこそとめ給へと、ゆゝしく思したり。姫君は、年頃聞え渡り給ふ御心ばへの世の人に似ぬを、斜ならむにてだにあり、まして斯うしも如何でと、御心留まりけり。いと近くて見えむまでは思し寄らず。若き人は聞きにくきまでめで聞え合へり。

祭の日、大殿には物見給はず。大将の君、かの御車の所争ひを、まねび聞ゆる人ありければ、いといとほしう憂しと思して、猶あたら重りかにおはする人の、物に情後れて、すく／＼しき所つき給へる餘りに、自らはさしも思さざりけめども、斯かる中らひは情交すべきものとも思いたらぬ御心掟に従ひて、次々善からぬ人の爲させたるならむかし。御息所は、心ばせのいと恥かしく、由ありておはするものを、如何に思し倦じにけむと、いとほしうて、參うで給へりけれど、齋宮の、まだ舊の宮におはしませば、榊の憚りに託けて、

- (一) 合掌して (八) 併し
- (二) 源の方では (九) 源の侍女等
- (三) 氣どつた様子 (一〇) 葵上
- (四) 桃園式部卿宮、 (一一) 葵上自身は御息所に對して
- (五) 朝顔の父 (一二) 左衛門府に入らず六條京極の
- (六) 源の (一三) 榊を立てて清淨にしてある
- (七) 源の容姿が

心安くも對面し給はず。ことわりとは思しながら、源「なぞや斯く互にそば／＼しからでおはせよかし」と、打咳かれ給ふ。

今日は、二條院に離れおはして、祭見に出で給ふ。西の對に渡り給ひて、惟光に車の事仰せたり。源「女房出で立つや」と宣ひて、姫君の、いと美しげに装ひ立てておはするを、打笑みて見奉り給ふ。源「君はいざ給へ。諸共に見むよ」とて、御髪の常よりも清らに見ゆるを、搔撫で給ひて、源「久しう削ぎ給はざめるを、今日は吉き日ならむかし」とて、曆の博士召して、時間合せなどし給ふ程に、源「先づ女房出でね」とて、童の姿どものをかしげなるを御覽す。いとらうたげなる髪どもの、末華やかに削ぎ渡して、浮紋の表の袴に掛かれる程、けさやかに見ゆ。源「君の御髪は我削がむ」とて、源「うたて所狭うもあるかな。如何に生ひやらむとすらむ」と削ぎ煩ひ給ふ。源「いと長き人も、額髪は少し短くぞあめるを、無下に後れたる筋の無きや、餘り情なからむ」とて削ぎ果てて、源「千尋と祝ひ聞え給ふを、少納言あはれに辱しと見奉る。」

源「はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひ行く末は我のみぞ見む」と聞え給へば、

業「千尋とも如何でか知らむ定めなく満ち干る潮の長閑けからぬに」と物に書きつけておはするさま、らう／＼じきものから、若うをかしきを、めでたしと思す。今日も、所も無く立ち込みにけり。馬場の殿の程に、立て煩ひて、源「上達部の車ども多くて、物騒がしげなる邊かな」とやすらひ給ふに、宜しき女車の、いたう乗りこぼれたるより、扇を差出でて、人を招き寄せて、女「此處にや

(一) 御息所が

(二) 葵も御息所も

(三) 浮線綾の袴

(四) 髪は長かれと祝ふ詞

は立たせ給はぬ。所避り聞えむ」と聞えたり。如何なる好き者ならむと思されて、所も實によき邊なれば、引寄せさせ給ひて、源「如何で得給へる所ぞと、妬さになむ」と宣へば、由ある扇の端を折りて、

女「果敢なしや人の挿頭せる葵ゆる神の許しの今日を待ちける

注連の内にはとある手を思し出づれば、かの源典侍なりけり。浅ましろ、古り難くも今めくかなと憎さにはしたなう、

源「かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

女恥かしと思ひ聞えたり。

内「悔しくもかざしけるかな名のみして人頼めなる草葉ばかりを

と聞ゆ。人と相乗りて、簾をだに上げ給はぬを、心疚しう思ふ人多かり。一日の御有様の置しかりしに、今日は打亂れて歩き給ふかし。誰ならむ、乗り並ぶ人けしうはあらじはやと、推量り聞ゆ。挑ましからぬ挿頭争ひかなと、さう／＼しく思せど、斯様にいと面無からぬ程の人將た、人相乗り給へるに慎まれて、果敢なき御答も、心安く聞えむも眩しかし。

御息所は、物を思し亂るゝ事、年頃よりも多く添ひにけり。つらき方に思ひ果て給へど、今はとて振り離れ下り給ひなむは、いと心細かりぬべく、世の人聞も人笑へにならむ事と思す。さりとして立ち留るべく思ほし

(一) 場所を譲つて差
上げませう

(二) 逢ふ日に掛け
た。源をさす

(三) 君に近づく事は
出来ません

(四) 他の人が占領し
て注連を張つてゐ

(五) 葵(逢ふ)といふ
御誤の日

(六) 甲斐もないつま
らぬ

(七) 厚かましい

なるには、斯くよなきさまに、皆思ひ朽すべかめるも安からず。釣する海士の浮けなれや」と、起臥思し煩ふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、惱ましうし給ふ。大將殿には、下り給はむ事を、持て離れて、あるまじき事なども、妨げ聞え給はず、馬數ならぬ身を、見ま憂く思し捨てむることわりなれど、今はなほ言ふ甲斐なきにても、御覽じ果てむや、淺からぬにはあらむ」と、聞えかゝづらひ給へば、定めかね給へる御心もや慰むと、立ち出で給へりし御禊河の荒かりし瀬に、いとゞ萬づいと憂く思し入られたり。

大殿には、御物怪めきていたく煩ひ給へば、誰もく思し歎くに、御歩行など便なき頃なれば、二條院にも時々ぞ渡り給ふ。さはいへど、やんごとなき方は、殊に思ひ聞え給へる人の、珍らしき事さへ添ひ給へる御惱みなれば、心苦しう思し歎きて、御修法や何やなど、我が御方にて、多く行はせ給ふ。物怪・生靈などいふ物多く出で来て、様々の名告する中に、人にも更に移らず、唯みづからの御身につと添ひたる様に殊におどろくしう煩はし聞ゆる事も無けれど、又片時離るゝ折も無きもの一つあり。いみじき験者どもにも隨はず、執念き氣色、臆げの物にあらずと見えたり。大將の君の御通ひ所、此處彼處と思し當つるに、この御息所、二條の君などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらざめれば、恨みの心も深からめ」とさどめきて、物など問はせ給へど、さして聞え當つる事もなし。物怪とても、態と深き御敵と聞ゆるもなし。過ぎにける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつゝ傳はりたるものの、弱目に出で來たるなど、むねく

- (一) 伊勢海に釣する 蟹のうけなれや心 一つを定めかねつ
- (二) 伊勢海に釣する 爾(古今、戀一)
- (三) 葵上
- (四) 懐胎
- (五) 懐胎
- (六) 左大臣邸の源の室
- (七) 葵上
- (八) 六條御息所
- (九) 紫
- (一〇) 大した程でなく

しからず亂れ顯はるゝ。唯つくくゝと音をのみ泣き給ひて、折々は胸を堰き上げつゝ、いみじう堪へ難げに感ふ業をし給へば、如何におはすべきにかと、ゆゝしう悲しう思し慌てたり。院よりも御訪らひ隙なく、御祈禱の事まで思し寄せ給ふさまの辱きにつけても、いとゞ惜しげなる人の御身なり。世の中遍く惜しみ聞ゆるを聞き給ふにも、御息所は徒ならず思さる。年頃は、いとゞ斯くしもあらざりし御挑み心を、果敢たかりし所の車争ひに、人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまでも思し寄せざりけり。斯かる御物思ひの亂れに、御心地なほ例ならずのみ思さるれば、外に渡り給ひて、御修法などせさせ給ふ。大將殿聞き給ひて、如何なる御心地にかと、いとほしう思し起して渡り給へり。例ならぬ旅所なれば、いたう忍び給ふ。心より外なる怠りなど、罪免されぬべく聞え續け給ひて、惱み給ふ人の御有様も、愁へ聞え給ふ。自らはさしも思ひ入れ侍らねど、親達のいと事々しう思ひ惑はるゝが心苦しさに、斯かる程を見過さむとてなむ。萬づを思しのどめたる御心ならば、いと嬉しうなむ」など語らひ聞え給ふ。常よりも心苦しげなる御氣色を、ことわりに哀れと見奉り給ふ。打解けぬ朝ぼらけに出で給ふ御様のをかしきにも、猶振り離れなむ事は思し返さる。やんごとなき方に、いとゞ志添ひ給ふべき事も出で來にたれば、一つ方に思し靜まり給ひなむを、斯様に待ち聞えつゝあらむも、心のみ盡きぬべき事、なかゝ物思ひの驚かさるゝ心地し給ふに、御文ばかりぞ暮つ方ある。

- (一) 桐壺院
- (二) 御息所
- (三) 葵上方
- (四) 御息所は
- (五) 御息所の
- (六) 御息所の心
- (七) 御子誕生
- (八) 葵上が

源日頃、少し癒る様なりつる心地の、俄にいといたう苦しげに侍るを、え引き避がでなむ。

とあるを、例の事託と見給ふものから、

御息所 袖濡るゝ懸路と且は知りながら下り立つ田子のみづからぞ憂き
山の井の水もことわりに。

とぞある。御手はなほ許多の人の中に勝れたりかした、打見給ひつゝ、如何にぞやもある世かな。心も容貌もとり／＼に、捨つべきもなく又思ひ定むべきもなきを、苦しう思さる。御返り、いと暗うなりにたれど、
御袖のみ濡るゝや如何に。深からぬ御託言になむ。

浅みにや人は下り立つ我が方は身もそぼつまで深き懸路を

臍氣にてや、この御返りを、みづから聞えさせぬ。
などあり。

大殿には、御物怪いたく起りて、いみじう煩ひ給ふ。この御生靈、故父大臣の御靈など言ふものありと聞き給ふにつけて、思し續くれれば、身一つの憂き歎きより外に、人を悪しかれなど思ふ心も無けれど、物思ふに憧るなる魂は、さもやあらむと思し知らるゝ事もあり。年頃、萬づに思ひ残す事なく過しつれど、斯うしも碎けぬを、果敢なき事の折に、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御禊の後、一節に憂しと思し浮かれにし心、静まり難う思さるゝよにや、少しも打まどろみ給ふ夢には、かの君姫と思しき人の、いと

(一) 懸路に小泥、みづからに水を掛く。田子は農夫

(二) 懸路に小泥、みづからに水を掛く。田子は農夫

(三) 御息所は、自身

(四) 並大抵の病状で

(五) 葵上

清らにてある所に往きて、とかく引きまさぐり、現にも似ず、猛く嚴き一向心出で来て、打ちかなぐるなど見え給ふ事、度重なりけり。あな心憂や、げに身を捨ててや往にけむと、現心ならず覺え給ふ折々もあれば、さならぬ事だに、人の御爲には、善き様の事をしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれは、いとよく言ひなしつべき便りなりと思すに、いと名立たしう、ひたすら世に亡くなりて後に恨み残すは尋常の事なり、それだに人の上にては、罪深うゆゝしきを、現の我が身ながら、さる疎ましき事を言ひつけらるゝ、宿世の憂き事。すべて強顔き人に如何で心も懸け聞えじと思し返せど、思ふも物をなり。齋宮は、去年内裏に入り給ふべかりしを、様々障る事ありて、この秋入り給ふ。九月には、やがて野宮に移ろひ給ふべければ、二度の御禊の準備、取り重ねてあるべきに、唯怪しく恍惚しうて、つく／＼と臥し惱み給ふを、宮人いみじき大事にて、御祈禱などさま／＼仕う奉る。おどろ／＼しき様にはあらず、そこはかとなき煩ひて、月日を過し給ふ。大將殿も、常に訪らひ聞え給へど、優る方のいたう煩ひ給へば、御心の暇無げなり。
まださるべき程にもあらずと、皆人も弛み給へるに、俄に御氣色ありて惱み給へば、いとどしき御祈禱の數を盡くしてせさせ給へれど、例の執念き御物怪一つ更に動かす。やんごとなき験者ども、珍らかなりと持て悩む。流石にいみじう調ぜられて、心苦しげに泣き侘びて、少し緩べ給へや。大將に聞ゆべき事あり」と宣ふ。「さればよ。有るやうあらむ」とて、近き御几帳のもとに入れ奉りたり。無下に限りのさまに物し給ふ

(一) 身を捨ててゆきやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり(古)

(二) その人の源

(三) 思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじや

(四) 左衛門府 嵯峨の有栖川の野宮へ入る前の

(五) 母御息所が(六) 葵上

を、聞え置かまほしき事もおはするにやとて、大臣も宮も少し退き給へり。加持の僧ども聲静めて、法華經を讀みたる、いみじう尊し。御几帳の帷子引上げて見奉り給へば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥し給へる様、餘所人だに見奉らむに心亂れぬべし。まして惜しう悲しう思す、理なり。白き御衣に、色合いと華やかにて、御髪いと長うちたきを、引結ひて打添へたるも、斯うてこそ、らうたげに艶きたる方添ひて、をかしかりけれと見ゆ。御手を執らへて、「あないみじ。心憂き目を見せ給ふかな」とて、物もえ聞え給はず泣き給へば、例はいと煩はしく恥かしげなる御まみを、いと弛氣に見上げて、打まもり聞え給ふに、涙の零る、様を見給ふは、如何哀れの淺からむ。餘りいたく泣き給へば、心苦しき親達の御事を思し、また斯く見給ふにつけて、口惜しう覺え給ふにやと思して、「何事もいと斯うな思し入れそ。さりともけしうはおはせじ。如何なりとも必ず逢ふ瀬あなれば、對面は有りなむ。大臣・宮なども、深き契りある中は、行き廻りても絶えざなれば、逢ひ見る程ありなむと思せ」と慰め給ふに、「いであらずや。身の上のいと苦しきを、暫し休め給へと聞えむとてなむ。斯く参り來むとも更に思はぬを、物思ふ人の魂は、實に懂るゝものになむ有りける」と懐かしげに言ひて、

歎き侘び空に亂るゝ我が魂を結びとどめよ下がひの棲

と宣ふ聲、けはひ、その人にもあらず、變り給へり。いと怪しと思し廻らすに、たゞ彼の御息所なりけり。淺ましう、人のとかく言ふを、善からぬ者どもの言ひ出づる事と、聞き悪く思して宣ひ消つを、目に見す見

(一) 大宮

(二) 假令死んでも

(三) 來世で

(四) 一六四頁註 (六) 參照

(五) 魂が飛ぶと見たら衣の下前の棲を結ばば元に戻るといふ迷信

す、世には斯かる事こそは有りけれと、疎ましうなりぬ。あな心憂と思されて、「斯く宣へど、誰とこそ知らね。確かに宣へ」と宣へば、唯それなる御有様に、淺ましとは尋常なり。人々近う参るも、傍痛う思さる。少し御聲も鎮まり給へれば、隙おはするにやとて、宮の御湯持て寄せ給へるに、搔き起され給ひて、程なく生まれ給ひぬ。嬉しと思す事限りなきに、人に驅り移し給へる御物怪どもの、妬がり惑ふけはひ、いと物騒がしうて、後の事又いと心許なし。言ふ限りなき願ども立てさせ給ふ故にや、平かに事成り果てぬれば、山の座主何くれのやんごとなき僧ども、したり顔に汗押し拭ひつゝ、急ぎ罷出ぬ。多くの人の心を盡くしつる日頃の名残、少し打休みて、今はさりともと思す。御修法などは、またく始め添へさせ給へど、先づは興あり、珍らしき御かしづきに皆人心緩べり。院を初め奉りて、親王達・上達部残りなき産養どもの、珍らかに嚴しきを、夜毎に見のゝしる。男にてさへおはすれば、その程の作法、賑ははしくめでたし。

かの御息所は、斯かる御有様を聞き給ひても、たゞならず、かねてはいと危く聞えしを、平かにも將たと、打思しけり。怪しう我にもあらぬ御心地を思し續くるに、御衣なども、唯芥子の香に泌み返りたり。怪しさに、御泔参り、御衣著更へなどし給ひて、試み給へど、なほ同じやうにのみあれば、我が身ながらだに疎ましう思さるゝに、まして人の言ひ思はむ事など、人に宣ふべき事ならねば、心一つに思し歎くに、いと御心變りも増り行く。大將殿は、心地少しのどめ給ひて、淺ましかりし程の間はず語りも、心憂く思し出でら

(一) まがふ方なき

(二) 後に夕霧大將

(三) よりまし(盤媒)

(四) 叡山の天台座主

(五) もう大丈夫

(六) 嬰兒の

(七) 出産祝の饗宴や贈物

(八) 祈禱の護摩に焚いた

(九) 祈禱の護摩に焚いた

(一〇) 御髪を洗ひ

(一一) 本性の亂れも

(一二) 憑靈した時の

れつゝ、いと程經にけるも心苦しく、またけ近くて見奉らむには、如何にぞやうたて覺ゆべきを、人の御爲いとほしう萬づに思して、御文ばかりぞ有りける。

いたう煩ひ給ひし人の、御名殘ゆゝしう、心緩び無げに、誰も思したれば、ことわりにて御歩行も無し。なほいと惱ましげにのみし給へば、例の様にてはまだ對面し給はず。若君のいとゆゝしきまで見え給ふ御有様を、今からいとさま殊にもて傳き聞え給ふ様疎かならず、事合ひたる心地して、大臣も嬉しういみじと思ひ聞え給へるに、唯この御心地癒り果て給はぬを、心許なく思せど、さばかりいみじかりし名殘にこそはと思して、如何でかは、さのみは心をも惑はし給はむ。参り給はむとて、内裏などにも餘り久しく参り侍らねば、いぶせさに、今日なむ初立し侍るを、少し氣近き程にて聞えさせばや。餘り覺束なき御心の隔てかな」と、怨み聞え給へれば、女房連「げに唯偏に艶にのみあるべき中にも有らぬを、いたう衰へ給へりと言ひながら、物越にてなどあるべきかは」とて、臥し給へる所に、御座近う参りたれば、入りて物など聞え給ふ。御答時々聞え給ふも、なほいと弱げなり。されど無下に亡き人と思ひ聞えし御有様を思し出づれば、夢の心地して、ゆゝしかりし程の事どもなど聞え給ふ序にも、かの無下に息も絶えたるやうにおはせしが、引返し、つぶ／＼と宣ひしことども、思し出づるに心憂ければ、涙いさや、聞えまほしき事いと多かれど、まだいと弛氣に思しためればこそ」とて、「御湯参れ」などさへ扱ひ聞え給ふを、いつ習ひ給ひけむと、人々哀れがり聞ゆ。いとをかしげなる人の、いたう弱り損はれて、有るか無きかの氣色にて臥し給へる様、いとらうたげに苦しげなり。御髪の亂れたる筋もなく、はら／＼と掛かれる枕の程、有り難きまで見ゆれば、年頃何事を

(一) 葵上

(二) 葵上の

(三) 久しく引籠つてから初めての外出

飽かぬ事ありて思ひつらむと、怪しきまで打まもられ給ふ。眞院などに参りて、いと疾く罷出なむ。斯様に、覺束なからず、見奉らば嬉しかるべきを、宮のつとおはするに心無くやと、愼みて過しつるも苦しきを、猶やう／＼心強く思しなして、例の御座所にこそ。餘り若くもてなし給へば、片方は斯くも物し給ふぞ」など聞え置き給ひて、いと清げに打裝束きて出で給ふを、常よりは目留めて、見出して臥し給へり。秋の司召あるべき定めて、大殿も参り給へば、君達も勞り望み給ふ事どもありて、殿の御邊離れ給はねば、皆引續き出で給ひぬ。

殿の内人少なにしめやかなる程に、俄に例の御胸を堰き上げて、いといたう惑ひ給ふ。内裏に御消息聞え給ふ程もなく、絶え入り給ひぬ。足を空にて誰も／＼罷出給ひぬれば、除目の夜なりけれど、斯くわり無き御障りなりければ、皆事破れたるやうなり。の／＼しり騒ぐ程に、夜半ばかりなれば、山の座主、何くれの僧達もえ請じ敢へ給はず。今はさりとともと思ひ弛みたりつるに、淺ましければ、殿の内の人、物にぞ當り惑ふ。所々の御訪らひの使など立ち込みたれど、え聞えつがすゆすり満ちて、いみじき御心惑ひども、いと怖ろしきまで見え給ふ。御物怪の度々取り入れ奉りしを思して、御枕などもさながら、二三日見奉り給へど、やうやう變り給ふ事どものあれば、限りと思し果つる程、誰も／＼いといみじ。大將殿は、悲しき事に事を添へて、世の中をいと憂きものに思し泌みぬれば、たどならぬ御邊の御用ひどもも、心憂しとのみぞ並べて思さ

(一) 屢々御目にかゝ

れたら

(二) 若々しく氣が弱

いので、一つには

病も抄々しくよく

ならぬのです

(三) 京官の任免を行ふ

(四) 参内

(五) 葵の兄弟

(六) 功勞を言ひ立てて

(七) 父左大臣

(八) 司召

る。院に思し歎き、弔ひ聞えさせ給ふ様、却りて面立たしげなるを、嬉しき瀬も交りて、大臣は御涙の暇なし。人の申すに随ひて、嚴しき事どもを、生きや返り給ふと、さまざま残る事なく、且損はれ給ふ事どももあるを見るくも、盡きせず思し惑へど、甲斐無くて日頃になれば、如何はせむとて、鳥邊野に率て奉る程、いみじげなる事多かり。此方彼方の御送りの人ども、寺々の念佛の僧など、そこら廣き野に所も無し。院をば更にも申さず、後の宮・春宮などの御使、さらぬ所々のも参り交ひて、飽かずいみじき御弔ひを聞え給ふ。大臣はえ立ちも上り給はず。在斯かる齡の末に、若く盛りの子に後れ奉りて、もこよふ事」と恥ぢ泣き給ふを、許多の人悲しう見奉る。終夜いみじうのしりつる儀式なれど、いとも果敢なき御屍許りを御名残にて曉深く歸り給ふ。常の事なれど、一人一人か、數多しも見給はぬ事なればにや、類なく思し焦れたり。八月二十餘日の有明なれば、空の氣色も哀れ少なからぬに、大臣の闇に昏れ惑ひ給へる様を見給ふも、ことわりにいみじければ、空のみ眺められ給ひて、

源昇りぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな

殿におはし著きても、つゆまどろまれ給はず。年頃の御有様を思し出でつゝ、などで、終にはおのづから見直し給ひてむと、長閑に思ひて、等閑のすさびにつけても、辛しと覺えられ奉りけむ。世を経て、疎く恥かしきものに思ひて過ぎ果て給ひぬるなど、悔しき事多く思し續けらるれど甲斐無し。鈍める御衣奉れるも、

- (一) 一方では奏上の遺骸が腐つてゆく
- (二) 藤壺中宮
- (三) 歎き道ひまはる
- (四) 源が人の死に目に會つたのは夕顔
- (五) 唯一人くらゐのもので
- (六) 人の親の心は闇
- (七) にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
- (八) 後撰、雜一、兼輔

夢の心地して、我先立たましかば、深くぞ染め給はましと思すさへ、

源限りあれば薄墨衣浅けれど涙ぞ袖を淵となしける

とて、念誦し給へる様、いと艶かしさ勝りて、經忍びやかに讀み給ひつゝ、「法界三昧普賢大士」と打宣へる、行ひ馴れたる法師よりは勝なり。若君を見奉り給ふにも「何に忍ぶの」と、いと露けけれど、斯かる形見さへ無からましかばと思し慰む。宮は沈み入りて、その儘に起き上り給はず、危げに見え給ふを、又思し騒ぎて、御祈禱などせさせ給ふ。果敢なく過ぎ行けば、御事の急ぎなどせさせ給ふも、思し懸けざりし事なれば、盡きせずいみじうなむ。斜に片はなるをだに、人の親はいかと思ふめる、ましてことわりなり。又類おはせぬをだに、さうくしく思しつるに、袖の上の玉の碎けたりけむよりも、淺ましげなり。

大將の君は、二條の院にだにも、假初にも渡り給はず、哀れに心深く思ひ歎きて、行ひを眞實にし給ひつゝ、明し暮し給ふ。所々には御文ばかりぞ奉り給ふ。かの御息所は、齋宮の左衛門の司に入り給ひにければ、いと嚴しき御清まはりに事託けて、聞えも通ひ給はず。憂しと思ひ泌みにし世も、なべて厭はしくなり給ひて、斯かる羈絆だに添はざらましかば、願はしき様にもなりなましと思すには、先づ對の姫君の、さうくしく物し給ふらむ有様ぞ、ふと思し遣らる。夜は御帳の内に一人臥し給ふに、宿直の人々は近う廻りて侍へど、傍淋しくて、時しもあれと寢覺がちなるに、聲勝れたる限り擇び侍はせ給ふ念佛の曉方など、忍

- (一) 普賢菩薩を讚歎する語
- (二) 結び置く形見の子だに無かりせば
- (三) 何に忍ぶの草をつまゝし(後撰、雜)
- (四) 一人娘で外に姉妹もないのさへ
- (五) 源は
- (六) 夕霧さへなかつたら
- (七) 出家
- (八) 紫
- (九) 時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを
- (十) 古今、哀傷、忠峯

び難し。深き秋のあはれ増りゆく風の音、身に泌みけるかなと、慣らはぬ御獨寝に、明し兼ね給へる朝ぼらけの霧り渡れるに、菊の氣色ばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、差置きて去にけり。源「今めかしうも」とて見給へば、御息所の御手なり。

息聞えぬ程は思し知るらむや。

人の世をあはれとさくも露けきに後る、袖を思ひこそやれ

只今の空に思ひ給へ餘りてなむ。

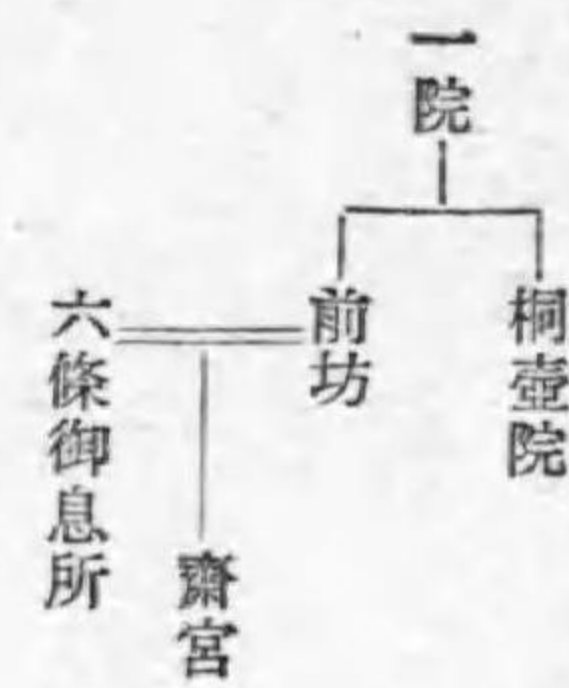
とあり。常よりも優にも書い給へるかなと、流石に置き難う見給ふものから、強顔の御弔ひやと心憂し。さりとて、掻き絶えおとなひ聞えざらむもいとほしく、人の御名の朽ちぬべき事を思し亂る。過ぎにし人は、とても斯くてもさるべきにこそは物し給ひけり、何にさる事をさだくとけざやかに見聞きけむと悔しきは、我が御心ながら猶え思し直すまじきなめりかし。齋宮の御清まはりも煩はしくやなど、久しう思ひ煩ひ給へど、態とある御返りなくば情なくやとて、紫の鈍める紙に、

源こよなう程經侍りにけるを、思ひ給へ怠らずながら、慣ましき程は、さらば思し知るらむやとてなむ。

とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむ程ぞ果敢なき

且は思し消ちてよかし。御覽ぜすもやとて、これにも。

- (一) 齋宮の潔齋で御無沙汰してゐたことを
- (二) 齋宮の御事をも、怒りに聞えつけさせ給ひしかば、その御代りにも、やがて見奉り扱はむなど、常に宣はせて、やがて内裏住し給へど、度々聞えさせ給ひしをだに、いとあるまじきことと思ひ離れにしを、斯く心より外に若々しき物思ひをして、遂に憂き名をさへ流し果つべき事と、思し亂るゝに、なほ例のさまにもおはせず。さるは大方の世につけて、心憎く由ある聞えありて、昔より名高くものし給へば、野宮の御移ろひの程にも、をかしよう今めきたる事多くしなして、殿上人どもの好ましきなどは、朝夕の露分け歩くを、その頃の役になむするなど聞き給ひても、大將の君は、ことわりぞかし、故は飽くまでつき給へるものを、もし世の中に飽き果てて下り給ひなば、さうくしくもあるべきかなと、流石に思されけり。
- (三) 御息所自身を生靈が葵上を呪ひ殺しなからそ知らぬ様なこの文を
- (四) 御息所のは憚り
- (五) 葵上
- (六) 生靈のこと
- (七) 喪の家からの文
- (八) 喪中は
- (九) 執着する
- (一〇) 私の方でも差上げずにをりました



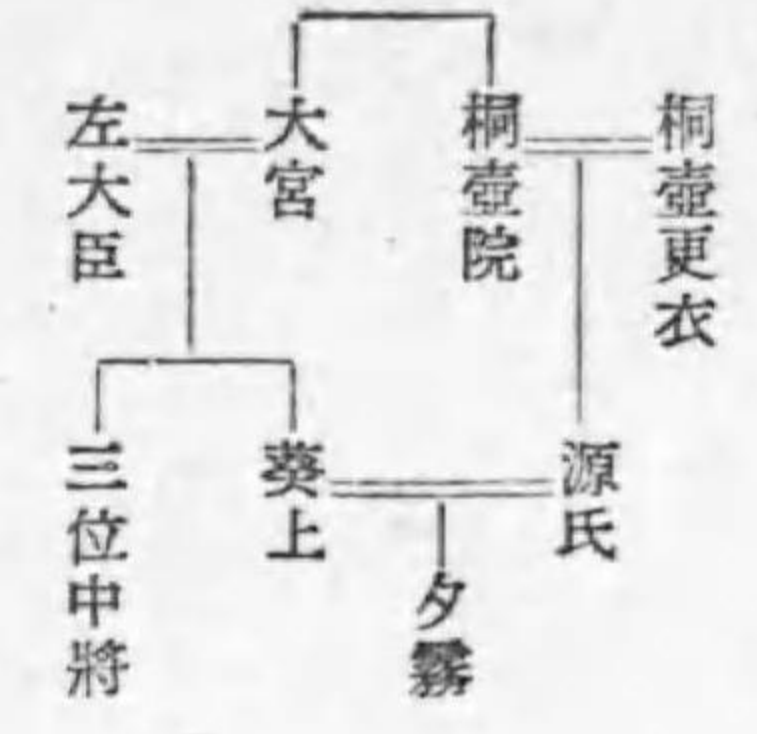
と聞え給へり。里におはする程なりければ、忍びて見給ひて、仄めかし給へる氣色を、心の鬼に著く見給ひて、さればよと思すもいとみじ。猶いと限りなき身の憂さなりけり。斯様なる聞えありて、院にも如何に思さむ。故前坊の同じき御兄弟といふ中にも、いみじう思ひ交し聞えさせ給ひて、この齋宮の御事をも、怒りに聞えつけさせ給ひしかば、その御代りにも、やがて見奉り扱はむなど、常に宣はせて、やがて内裏住し給へど、度々聞えさせ給ひしをだに、いとあるまじきことと思ひ離れにしを、斯く心より外に若々しき物思ひをして、遂に憂き名をさへ流し果つべき事と、思し亂るゝに、なほ例のさまにもおはせず。さるは大方の世につけて、心憎く由ある聞えありて、昔より名高くものし給へば、野宮の御移ろひの程にも、をかしよう今めきたる事多くしなして、殿上人どもの好ましきなどは、朝夕の露分け歩くを、その頃の役になむするなど聞き給ひても、大將の君は、ことわりぞかし、故は飽くまでつき給へるものを、もし世の中に飽き果てて下り給ひなば、さうくしくもあるべきかなと、流石に思されけり。

御法事など過ぎぬれど、正日まではなほ籠りおはす。慣らはぬ御徒然を心苦しがり給ひて、三位の中將は常に参り給ひつゝ、世の中の御物語など、眞實なるをも、又例の濫がはしき事をも聞え給ひつゝ、慰め聞え給ふに、かの内侍ぞ打笑ひ給ふ種はひにはなるめる。大將の君は、「あないとほしや、祖母殿の上ないたう輕め

- (一) 御息所は六條の自邸に
- (二) 源内侍(紅葉賀卷参照)
- (三) 生靈の件を
- (四) 前坊薨去の時桐
- (五) 前坊の代りに
- (六) 院が
- (七) この御息所は
- (八) 四十九日か
- (九) 頭中
- (一〇) 源内侍をいふ

給ひそ」と諫め給ふものから、常にをかしと思したり。かの十六夜のさやかならざりし秋の事など、さらぬも様々の好色事どもを、互に限なく言ひ顯はし給ふ果々は、哀れなる世を言ひくへて、打泣きなどもし給ひけり。

時雨打して、物哀れなる暮つ方、中將の君、鈍色の直衣指貫、薄らかに衣がへして、男々しくあざやかに、心恥かしき様して参り給へり。君は、西の妻戸の勾欄に押しかかりて、霜枯れの前裁見給ふ程なりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたる程、涙も争ふ心地して、源氏「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」と打獨言ちて、頬杖つき給へる御様、女にては、見捨てて亡くならむ魂、必ず留まりなむかしと、色めかしき心地に、打まもられつゝ、近うつい居給へれば、しどけなう打亂れ給へるさまながら、紐ばかりを差直し給ふ。これは、今少し濃やかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなる引襲



ねて、寢れ給へるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。中將も、いと哀れなるまみに眺め給へり。
頭「雨となり時雨るゝ空のうき雲をいづれの方と分きて眺めむ
行方なしや」と、獨言のやうなるを、

- (一) 末摘花に通つて 武昌春柳似腰支、相逢相失兩如夢
- (二) 末摘花に見つけれ 夜の誤寫かすと 爲雨爲雲今不知
- (三) 薄色の喪服に 替へて 唐劉禹錫の女
- (四) 度令樓中初見時 雲雨は巫山の神女
- (五) 源は 宋玉の高唐賦の 故事
- (六) 源は 女郎魂逐暮雲歸 只應長在漢陽渡 化作鸞鴛一隻飛
- (七) 鄂渚濛々烟雨微 劉禹錫の詩

源見し人の雨となりにし雲居さへいと時雨にかきくらす頃
と宜ふ御氣色も、淺からぬ程著く見ゆれば、怪しう、年頃はいとしもあらぬ御志を、院など居起ちて宣はせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御方様に、持て離るまじきなど、方々に差合ひたれば、えしも振り捨て給はで、物憂げなる御氣色ながら、あり經給ふなめりかしと、いとほしう見ゆる折々ありつるを、眞にやんごとなく重き方は、殊に思ひ聞え給ひけるなめりと見知るに、いよ／＼口惜しう思さる。萬づにつけて、光失せぬる心地して、屈し甚かりけり。枯れたる下草の中に、龍膽・瞿麥などの、咲き出でたるを折らせ給ひて、中將の立ち給ひぬる後に、若君の御乳母の宰相の君して、

源「草枯れの籬に残る撫子を別れし秋の形見とぞ見る
匂ひ劣りてや御覽せらるらむ」と聞え給へり。實に何心なき御笑顔ぞ、いみじう美しき。宮は、吹く風につけてだに、木の葉より勝に脆き御涙は、まして取り敢へ給はず。

大宮 今も見てなかく袖を朽すかな垣ほ荒れにし大和撫子
なほいみじうつれなれば、朝顔の宮に、今日の哀れはさりと見知り給ふらむと推し量らるゝ御心ばへなれば、暗き程なれど聞え給ふ。絶間遠けれど、然の物となりたる御文なれば、咎なくて御覽せさす。空の色したる唐の紙に、

- (一) 源の葵上に對す 源分きてこの暮こそ袖は露けけれ物思ふ秋は數多經ぬれど
- (二) 母宮には甥に當る 源の愛は
- (三) 葵上を
- (四) 中將は
- (五) 大宮へ
- (六) 夕霧の
- (七) 源は
- (八) もうさういふ習慣になつてゐた

いつも時雨は。

とあり。御手などの心とどめて書き給へる、常よりも見所ありて、過し難き程なりと人々も聞え、自らも思されければ、

大内山を思ひ遣り聞えながら、えやは。とて、

朝秋霧に立ち後れぬと聞きしより時雨るゝ空もいかゞとぞ思ふ

とのみ、仄かなる墨つきにて、思ひなし心憎し。何事につけても、見勝りは難き世なめるを、つらき人しもぞ哀れに覺え給ふ、人の御心様なる。強顔ながら然るべき折々の哀れを過し給はぬ、これこそ互に情も見えつべき業なれ。なほ故づき由過ぎて、人目に見ゆばかりなるは、餘りの難も出で来けり。對の姫君を、然は生ふし立てじと思す。つれづれにて戀しと思ふらむかしと、忘るゝ折無けれど、たゞ女親なき子を置きたらむ心地して、見ぬ程うしろめたく、如何思ふらむと覺えぬぞ、心安き業なりける。

暮れ果てぬれば、御殿油近く參らせ給ひて、さるべき限りの人々、御前にて物語などせさせ給ふ。中納言の君といふは、年頃忍び思ししかど、この御思ひの程は、なかゞ様なる筋にも懸け給はず。哀れなる御心かなと見奉るに、大方には懐かしく打語らひ給ひて、斯うこの日頃、有りしより勝に、誰もく紛るゝ方なく見馴れくゝて、えしも常に斯からずば戀しからじや。いみじき事をばさるものにて、唯打思ひ廻らすこ

(一) 神無月いつも時雨は降りしかどか

く袖ひづる折はなかりき〔河海抄〕

(二) 源の

(三) 紫 (四) 恨みはせぬかなどと

(五) この悲しみの間

(六) これから後 (七) 葵上の死

そ、堪へ難き事多かりけれ」と宣へば、いとゞ皆泣きて、女房連「言ふ甲斐無き御事は、唯搔昏す心地し侍るをばさるものにて、名残なき様にあくがれ果てさせ給はむ程、思ひ給ふるこそ」と聞えも遣らず。哀れと見渡し給ひて、名残なくは如何にか。いと心浅くもとりなし給ふかな。心長き人だにあらば、見果て給ひなむものを。命こそ果敢なけれ」とて、火を打眺め給へるまみの、打濡れ給へる程ぞめでたき。取り分きてらうたくし給ひし小さき童の、親どもも無く、いと心細げに思へる、理に見給ひて、あてきは、今は我こそは思ふべき人なめれ」と宣へば、いみじく泣く。程なき袖、人よりは黒く染めて、黒き汗衫、萱草色の袴など著たるもかしき姿なり。昔を忘れざらむ人は、つれづれを忍びても、幼き人を見捨てず物し給へ。見し世の名残なく、人々さへ離れなば、たづき無さも増りぬべくなむ」など、皆心長かるべき事どもを宣へど、いでやいとゞ待遠にぞなり給はむと思ふに、いとゞ心細し。大殿は、人々に、際々程々を置きつゝ、果敢なき翫物ども、又眞にかの御形見になるべき物など、態とならぬ様に取りなしつゝ、皆配らせ給ひけり。君は、斯くてのみも、いかでかはつくぐと過し給はむとて、院へ參り給ふ。御車差出でて、御前など參り集まる程、折知り顔なる時雨打そゞぎて、木の葉誘ふ風、慌しう吹き拂ひたるに、御前に侍ふ人々、物いと心細くて、少し隙ありつる袖ども濕り渡りぬ。夜さは、やがて二條院に泊り給ふべしとて、侍ひの人々も彼處にて待ち聞えむとなるべし、各々立ち出づるに、今日にしも綴ぢむまじきことなれど、又無く物悲し。大臣も官も、今日の氣色に、又悲しさ改めて思さる。宮の御前に御消息聞え給へり。

源院に覺束ながり宣はするにより、今日なむ參り侍る。假初に立ち出で侍るにつけても、今日まで長ら

(一) 葵上の死

(二) 源がこれからの家を離れて

(三) 女童の名

(四) 柑子色に似、喪服に用ふ

へ侍りにけるよと、亂り心地のみ動きてなむ。聞えさせむもなか／＼に侍るべければ、其方にも参り侍らぬ。

とあれば、いとどしく、官は目も見え給はず沈み入りて、御返りもえ聞え給はず。大臣ぞやがて渡り給へる。いと堪へ難げに思して、御袖も引放ち給はず。見奉る人々もいと悲し。大將の君は、世を思ひ續くる事いとさま／＼にて、泣き給ふ様いとあはれに心深きものから、いと様よく艶き給へり。大臣久しう躊躇ひ給ひて、左「齡の積りには、さしもあるまじき事につけてだに、涙脆なる業に侍るを、まして干る世なう思ひ給へ感はれ侍る心を、えのどめ侍らねば、人目も、いと濫りがはしく心弱きさまに侍るべければ、院などにもえ参り侍らぬなり。事の序には、さ様に趣け奏せさせ給へ。幾許も侍るまじき老の末に、打捨てられたるが辛くも侍るかな」と、せめて思ひ鎮めて宣ふ氣色、いとわりなし。君も度々鼻打かみて、馬後れ先立つ程の定めなさは、世の性と見給へ知りながら、差當りて覺え侍る心惑ひは、類あるまじき業になむ。院にも有様奏し侍らむに、推し量らせ給ひてむ」と聞え給ふ。左「さらば時雨も隙なく侍るめるを、暮れぬ程に」と、唆し聞え給ふ。打見廻し給ふに、御几帳の後、障子の彼方などの明き通りたるなどに、女房三十人ばかり押し凝りて、濃き薄き鈍色どもを著つゝ、皆いみじう心細げにて、打潮垂れつゝ、居集まりたるを、いと哀れと見給ふ。左「思し捨つまじき人も留まり給へれば、さりとも物の序には立ち寄せ給はじやなど慰め侍るを、偏に思ひ遣りなき女房などは、今日を限りに思し捨つる故郷と思ひ屈して、長く別れぬる悲しみよりも、たゞ時々馴れ仕う奉る年月の名残無かるべきを、數き侍るめるなむ。理なる。打解けおはします事は侍らざりつれど、

(一) 夕霧

(二) 葵上

(三) これ限りになる

(四) あなたが葵と

さりとも終にはと、あいな頼みし侍りつるを、實にこそ心細き夕に侍れ」とても、また泣き給ひぬ。源「いと淺はかなる人々の歎きにも侍るなるかな。眞に、如何なりともと長閑に思ひ給へつる程は、おのづから御目離るゝ折も侍りつらむを、なか／＼今は何を頼みてか怠り侍らむ。今御覽じてむ」とて出で給ふを、大臣見送り聞え給ひて入り給へるに、御しつらひよりはじめ、ありしに變る事もなければ、空蟬の空しき心地ぞし給ふ。御帳の前に御硯など打散らして、手習ひ捨て給へるを取りて、目を押絞りつゝ見給ふを、若き人々は悲しき中にも微笑むもあるべし。哀れなる古言ども、唐のも倭のも書き汚しつゝ、草にも眞字にも、さまざま珍らしきさまに書き交ぜ給へり。源「賢の御手や」と、空を仰ぎて眺め給ふ。よそ人に見奉りなさむが惜しきなるべし。源「舊き枕故き衾、誰と共にか」とある所に、

源 亡き魂ぞいと悲しき寝し床の憶れ難き心慣らひに

又「霜の花白し」とある所に、

源 君なくて塵積りぬる常夏の露打拂ひ幾夜寝ぬらむ

一日の花なるべし、枯れてまじれり。宮に御覽せさせ給ひて、左「言ふ甲斐なき事をばさるものにて、斯かる悲しき類世に無くやはと思ひなしつゝ、契り長からで、斯く心を惑はすべくこそはありけめと、却りてはつらく、前の世を思ひやりつゝなむ醒し侍るを、唯日頃添へて、戀しさの堪へ難きと、この大將の君の、

(一) 空な頼み
(二) 葵上の打解けぬ
お心が今はどうあつても、行末はと

(三) 室の裝飾
(四) 源が
(五) 鴛鴦瓦冷霜華
重、舊枕故衾誰與

共(長根歌の句。
但し流布の本には
「翡翠衾寒」とあ

(六) 共寝の床の捨て
離れ難いのにつけ
ても

(七) 源が歌をつけて
母宮に奉つた撫子
の花
(八) 床に掛く
(九) 葵上の死

今はと餘所になり給はむなむ、飽かずいみじく思ひ給へらる。一日二日も見え給はず、かれくにおはせしをだに、飽かず胸痛く思ひ侍りしを、朝夕の光失ひては、いかでか存命ふべからむ」と、御聲もえ忍び敢へ給はず泣き給ふに、御前なる大人々々しき人など、いと悲しくて、さと打泣きたる、そぞろ寒き夕の氣色なり。若き人々は、所々に羣れ居つゝ、おのがどち哀れなる事ども打語らひて、「殿の思し宜はするやうに、若君を見奉りてこそは慰むべかめれと思ふも、いと果敢なき程の御形見にこそ」とて、各々「假初に罷出て参らむ」と言ふもあれば、互に別れ惜しむ程、おのがじし哀れなる事ども多かり。

院へ参り給へれば、互に「いといたく面瘦せにけり。精進にて日を経る故にや」と、心苦しげに思召して、御前にて物など参らせ給ひて、とやかくやと思し扱ひ聞えさせ給へる様、哀れに忝し。無紋の上の御衣に鈍色の御下襲、纓巻き給へる裳袂姿、華やかなる御装よりも、艶かしさ増り給へり。春宮にも、久しう参らぬ覺束なさなど聞え給ひて、夜更けてぞ罷出給ふ。

二條院には、方々拂ひ磨きて、男女待ち聞えたり。上臈ども皆参り上りて、我もくんと装束き、化粧したるを見るにつけても、かの居並み屈したりつる氣色どもぞ、哀れに思ひ出でられ給ふ。御装束奉り更へて、西の對に渡り給へり。更衣の御しつらひ、曇りなく鮮やかに見えて、よき若人・童べの形姿目易く調へて、少納言がもてなし心許なき所なく、心憎しと見給ふ。姫君、いと美しう引繕ひておはす。久しかりつる程にいとこよなうこそ大人び給ひにけれ」とて、小さき御几帳引上げて見奉り給へば、打側みて恥ぢらひ給へる御様、飽かぬところなし。火影の御傍目、頭つきなど、たゞかの人の御様に違ふところなく成り行くかな

(一) 左大臣 (二) 冠の後に下つた帛。纓を巻くのは喪中の服装 (三) 左大臣邸の (四) 十月の衣更へ (五) 藤壺中宮

と見給ふに、いと嬉し。近く寄り給ひて、覺束なかりつるほどの事どもなど聞え給ひて、異日頃の物語、長閑に聞えまほしけれど、忌々しう覺え侍れば、暫しは異方に休らひて参り來む。今は跡絶なく見奉るべければ、厭はしうさへや思されむ」と、語らひ聞え給ふを、少納言は嬉しと聞くものから、なほ危く思ひ聞ゆ。やんごとなき御忍び所多うかゞづらひ給へれば、又煩はしきや立ち替り給はむと思ふぞ憎き心なるや。我が御方に渡り給ひて、中將の君といふに、御足など参りすさびて、大殿籠りぬ。朝には、若君の御許に、御文奉り給ふ。哀れなる御返りを見給ふにも、盡きせぬ事どものみなむ。いとつれづれにながめがちなれど、何となき御歩行も、物憂く思しなりて、思しも立たれず。姫君の何事も有らまほしう整ひ果てて、いとめでたうのみ見え給ふを、似げなからぬ程に、將た見なし給へれば、氣色ばみたる事など折々聞え試み給へど、見も知り給はぬ氣色なり。つれづれなる儘に、唯此方にて碁打ち、扁つきなどし給ひつゝ、日を暮し給ふ。

その夜さり、亥の子の餅参らせたり。斯かる御思ひの程なれば、事々しきさまにはあらで、此方ばかりに、をかじげなる檜破子などばかりを、いろくにて参れるを見給ひて、君、南の方にいで給ひて、惟光を召して、この餅、斯う數々に所狭きさまにはあらで、明日の暮に参らせよ。今日は忌々しき日なりけり」と、打微笑みて宣ふ御氣色を、心疾きものにて、ふと思ひ寄りぬ。惟光確にも承らで、推げに愛敬の始は、日擇

(一) 葵上の代りに
(二) 夕霧
(三) 紫上

(四) 配偶者としても
(五) 漢字の旁りに扁を付けさせる遊び

(六) 十月初の亥の日
に食べる餅、無病
息災の呪ひ

(七) 喪中
(八) 新婚第三夜は枕元に餅を飾る習慣

(九) 亥子餅のやうに

りして聞召すべき事にこそ。さても子の子は幾つか仕う奉らすべう侍らむ」と、眞實立ちて申せば、眞三つが一つにてもあらむかし」と宣ふに、心得果てて立ちぬ。物馴れの様やと君は思す。人にも言はで、手づからといふばかり、里にてぞ作り居たりける。君はこしらへ詫び給ひて、今始めて盗み持て來たらむ人の心地するも、いとをかしくて、年頃あはれと思ひ聞えつるは、片端にもあらざりけり。人の心こそうたて有るものはあれ、今は一夜も隔てむ事の、わり無かるべき事と思さる。宣ひし餅、忍びていたう夜更かして持て参れり。少納言は大人しくて、恥かしうや思さむと、思ひ遣り深く心しらひて、女の辨といふ呼び出でて、眞これ忍びて参らせ給へ」とて、香匣の箱を一つ差入れたり。眞確に御枕上に参らすべき祝ひの物に侍る。あなかしこ。あだにな」と言へば、怪しと思へど、眞あだなる事はまだ習はぬものを」とて取れば、眞眞に今はさる文字忌ませ給へ」と辨よもまじり侍らじ」と言ふ。若き人にて、氣色もえ深く思ひ寄らねば、持て参りて御枕上の御几帳より差入れたるを、君ぞ例の聞え知らせ給ふらむかし。人はえ知らぬに、翌朝この箱をまかでさせ給へるにぞ、親しき限りの人々、思ひ合はする事どもありける。御皿どもなど、いつの間にかし出でけむ。花足いと清らにして、餅の様も殊更び、いとをかしく調へたり。少納言は、いと斯うしもやはとこそ思ひ聞えさせつれ、哀れに忝く、思し至らぬ事なき御心ばへを、先づ打泣かれぬ。女房達「さても内々に宣はせよかしな。かの人も如何に思ひつらむ」と私語きあへり。

(一) 亥の日の次は子の日故、洒落れて言つた

(二) 亥子餅の三分の一

(三) 殆ど自身で作らぬばかりに
(四) 紫上を賺しあぐんで

(五) 惟光は
(六) 少納言の娘の
(七) そんな不吉な詞などは申しませんとも
(八) 紫上へ
(九) 花形の脚のついた臺
(一〇) 惟光

斯くて後は、内裏にも院にも假初に参り給へる程だに、靜心なく面影に戀しければ、怪しの心やと我ながら思さる。通ひ給ひし所々よりは、恨めしげに驚かし聞え給ひなどすれば、いとほしと思すもあれど、新し枕の心苦しくて、「夜をや隔てむ」と思し煩はるれば、いと物憂くて、惱ましげにのみもてなし給ひて、眞世の中のいと憂く覺ゆる程過してなむ、人にも見え奉るべき」とのみ答へ給ひつゝ、過し給ふ。今後は、御櫛匣殿の、なほこの大將にのみ心つけ給へるを、右大臣「實に將た、斯くやんごとなかりつる方も失せ給ひぬるを、さてもあらむに、なか口惜しからむ」など、大臣宣ふに、いと憎しと思ひ聞え給ひて、官仕も、をさしくだに爲なし給へらば、なか悪しからむと、参らせ奉らむ事を思し勵む。君も、おしなべてのさまには思さざりしを、口惜しと思せど、只今は異様に分くる御心も無くて、何かは、斯ばかり短かめる世に、斯くて思ひ定まりなむ。人の恨みも負ふまじかりけりと、いと危く思ほし懲りにたり。かの御息所はいといとほしけれど、眞の寄邊と頼み聞えむには、必ず心置かれぬべし。年頃のやうにて見過し給はば、さるべき折節に、物聞え合はする人にてはあらむなど、流石に殊の外には思し放たず。この姫君を、今まで世の人も、その人とも知り聞えぬ、ものげなきやうなり。父宮に知らせ聞えてむと思しなりて、御裳著の事、人に普くは宣はせねど、なべてならぬさまに思し設くる御用意など、いと有り難けれど、女君はこよなう疎み聞え給ひて、年頃萬づに頼み聞えて、纏はし聞えけるこそ、淺ましき心なりけれど、悔しうのみ思して、さやかに

(一) 若草の新手枕を
まきそめて夜をや
隔てむ憎からなく
に(萬葉一一)

(二) 弘徽殿皇太后
(三) 妹臚月夜
(四) 正妻葵上
(五) 娘臚月夜の望を

かなへて源に嫁さ
せても
(六) 弘徽殿は
(七) 立派な地位にさへのばれば

(八) 禁中へ
(九) 源も臚月夜を
(一〇) 紫以外
(一一) 紫
(一二) 兵部卿官

も見合はせ奉り給はず。聞え戯れ給ふも苦しう、わりなきものに思し結ばほれて、有りしにも有らずなり給へる御有様を、をかしようもいとほしうも思されて、異年頃思ひ聞えし本意なく、馴れは増らぬ御氣色の心憂き事」と、怨み聞え給ふ程に、年も返りぬ。

朔日の日は、例の院に参り給ひてぞ、内裏・春宮などにも参り給ふ。それより大殿に罷出給へり。大臣、新しき年とも言はず、昔の御事ども聞え出で給ひて、さうくしく悲しと思すに、いと斯うさへ渡り給へるにつけて、念じ返し給へど、堪へ難く思したり。御年の加はるけにや、物々しき氣さへ添ひ給ひて、有りしより勝に、清らに見え給ふ。立ち出でて御方に入り給へれば、人々も珍らしう見奉りて忍び取へず。若君見奉り給へば、こよなくおよすけて、御笑ひがちにおはするも哀れなり。御しつらひなども變らず、御衣掛の御装束など、例のやうにし懸けられたるに、女のが並ばぬこそ、なべてさうくしく榮えなけれ。宮の御消息にて、大宮「今日はいみじく思ひ給へ忍ぶるを、斯く渡らせ給へるになむ、なか／＼」など聞え給ひて、「昔に慣らひ侍りにける御粧も、月頃はいと涙に霧り塞がりて、色合なく御覽ぜられ侍らむと思ひ給ふれど、今日ばかりは、なほ宴れさせ給へ」とて、いみじく盡し給へる物ども、又重ねて奉り給へり。必ず今日奉るべきと思しける御下裳は、色も織さまも尋常ならず、心殊なるを、甲斐無くやはとて著更へ給ふ。來ざらましかば口惜しう思されまじと、心苦し。御返りには、

(一) み狩する雁羽の小野の檜柴の馴れは増らず
戀こそ増れ(萬葉一二)

(二) 桐壺院
(三) 源は

(四) 葵上の御部屋
(五) 夕霧

(六) 葵上存在中と變らず用意した君の衣装

(七) 御氣にも召しますまいけれど

源春や來ぬるとも、先づ御覽ぜられになむ、参り侍りつれど、思ひ給へ出でらるゝ事ども多くて、え聞えさせ侍らず。

數多年今日あらためし色衣きては涙ぞ降る心地する
えそこ思ひ給へ鎮めね。

と聞え給へり。御返り、

大宮 新しき年とも言はずふるものは古りぬる人の涙なりけり
疎かなるべき事にぞ有らぬや。

(一) めでたく此處で著換へた晴衣ながら

(三) 御兩人の悲愁何れも